
月明かりに、寄り添う牙

伽砂杜ともみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月明かりに、寄り添う牙

【Nコード】

N4302E

【作者名】

伽砂杜ともみ

【あらすじ】

光の加護を受けている少女。少女と出会い、護衛として命じられた青年。孤独の時を幾重にも過ごしてきた彼の目の前に現れた、揺るぎない白い光。青年と少女が出会った事で、二人の時間が動き出す。

満月の夜に（１）

イルミネーションが美しい駅前通り。散りばめられた光が降る中を、人々がごった返している。

全体的にクリスマスを意識しているのだろうか。まだ１１月の初めであるというのに。

そんな中でただ立ち尽くし、ぼんやりと煌びやかな光の渦を眺めている十五才くらいの少女。

肌寒くはあるが、ボタンは留めずにオレンジ色のコートを羽織っている。

彼女がつまらなそうに見ているのは、光の裏にあるビルから吊るされている大きな垂れ幕。

冬はホットビズ！

地球温暖化防止のために 節電しよう！

「……信用がた落ち？」

首を上げているのにも疲れる。

布の無駄。電気の無駄。金の無駄。そして労力の無駄。

黒髪ショートボブの少女は、もともと高いわけではないテンションが、さらに落ち込むのを感じながら、イルミネーションのない閑散としたビル群へと目を向けた。

光を見過ぎて、視界から白い点が抜けない。

「めんどくさい。帰ろ」

待ち合わせをしていたのだが、相手が来ない。

とりあえず辺りを見回したが、カップルばかりで自分を探してい

るような人間は見受けられなかった。

確認はしたし、帰ろう。

少女は確かに15分ほど遅刻した。家に携帯も忘れた。

普段さほど必要としてないので、不携帯の頻度も高いのだが、今日忘れたのは失敗だった。

「まあ、帰れば連絡も取れるだろうし」

相手の携帯番号なんて覚えていない。

曇天のせいで星は見えないが、光にやられた目を癒すために空を見上げる。

視線をさげ、家の方角へ足を向けたその時、何者かに肩を掴まれた。

その力強さに怯むどころか、あまりの痛さに振り向き、恨みを込めてガンをとばす。

「あ。いた」

痛い事の報告ではなく、待ち合わせの相手が目の前にいたのだ。

「…………『いた』じゃないだろう！ 何度も呼んでるのに、なにシカトしてるんだ」

慌てて走って来たのだろう。

年の頃は二十歳くらい。黒いロングコートを着た、灰色短髪で長身の青年が肩で息をして、小さく唸り声をあげる。

少女は少しだけ申し訳なさそうに、彼の方に向き直り声をかけた。

「いなかったから、帰ろうかと思って」

その言葉に彼は目を丸くし、脱力するかのように肩を落とした。

「……今日くらい携帯を持て。何度も連絡したんだぞ」
「うん。それは確かに思った。でも携帯にばかり気を使っていたくないんだよね」

いつでも誰かと繋がっている事が、時に苦痛なのである。

電源を切り忘れて、迷惑する場面とてあるのだ。

故に、めんどくさい。

持たなくても、実は大した事なかったりするものだから、彼女にとって必要性が希薄すぎるのだ。

「この自由な感じが好きなんだよね。自分の時間って感じがするじゃん」

「まあ分かるけど。楓に何かあれば、オレがただでは済まされないんだぞ」

悪びれずに見つめてくる少女に、彼は小さく息を吐いた。

しかしすぐに、気分を変える為か上を見上げてから、嬉しそうに楓を見る。

「それよりさ、ここ綺麗だろう？ バイト先で見た雑誌に載っていたのだ。楓、こういうの好きかと思ってね」

「なに？ コマさん、こういうの好きなんだ。意外と乙女チックなんだね」

「オレじゃなくて！」

楓と呼ばれた少女は、顔を真っ赤にさせて怒るコマと呼んだ青年に、笑顔を向けた。

からかわれたと、すぐさま気付いたのだろうコマは、苦虫を噛み

潰した表情を浮かべる。

「で？ 私、なんで呼び出されたの？」

「いや、だから……」

ぐるりとイルミネーションを指さすコマ。

楓はあからさまに呆れた表情を浮かべ、聞こえよがしに溜息を吐いた。

「わー。チョーきれいーい。この寒い中、呼び出してくれてありがとう。コマさん、ディスクー」

「……わかったよ。ダシに使って悪かった。オレが一度見たかっただけだよ」

楓が棒読みで言っていると、コマは少し顔を赤くして、イーツと歯を見せる。

「最初から素直に言えばいいのに」

コマの八重歯というより、犬歯に近いソレを見て、楓は慌てて空を振り仰いだ。

雲の切れ間から、白くぼんやりとした月が顔を出そうとしている。

「コマさん。帰るよ」

「なんでだ！ 楓、今来た所だろう？ もうちよっと思たいんじゃないか？」

慌てて引き止めようとする彼に、楓が人差し指を上に向けた。それにつられて、コマが上を向く。

雲の切れ間は狭く、月は全体を現すまでには至っていないが、コ

マをひどく動揺させるほどの力を持っていた。

「かかか帰るぞ！」

「こんな満月の日を、わざわざ選ばなきゃいいのに」

楓のつぶやきも、コマには届かなかったようだ。

大慌てでロングコートに付いているフードをかぶり、楓を軽々と抱き上げて、彼は逃げるように早足でその場を立ち去る。

人通りと街灯の少ない裏路地に逃げ込み、コマはやつと楓を建物の影に降ろし、少し先へと入っていった。

楓は肩掛けカバンから、小さな白いウサギが散りばめられたピンク地のエコバッグを、慣れた様子で取り出す。

「天気予報じゃ、ずっと曇りだって言ってたから、大丈夫だと踏んでたんだが……」

幾分、申し訳なさそうに言い訳をする四足の大きな獣が暗がりから姿を現す。

脱ぎ散らかされた男物の衣服を、口で拾い上げながら楓に渡した。

「なんで満月の日なんか、選ぶのよ」

機嫌の悪さを、あからさまに前面に押し出し、先程のつぶやきを、はつきりと口にした。

灰色の立派な毛並みをした大きな獣は、耳をさげ、しっぽを股の間に入れながら上目使いで楓を見る。

「満月は、調子がいいんだよ。楓がいれば、今みたいな事があっても安心して出歩けるだろう？」

「……やっぱりね。そのために私を呼びつけたんだと思った！で

も、こういう事なら今度からパパに頼んでよ」

めんどくさいのよ。

と、人差し指をコマの鼻に突きつけ、冷めた目と厳しい口調で言う。

「楓は時々、恐ろしい事を口にするな。男二人でイルミネーションなんか見たって楽しいものか！ 男二人でカフェで座ってただけで……」

その時の状況を思い出したのか、コマは大きく体を振るわせた。

「ってゆーか、またあんな思いをするくらいなら、暴れてやる」

「そう？ ってゆーか、暴れるくらいなら保健所に連れて行かれればいいのよ」

コマの言い方の真似をしながら、コマの首に特注で頼んだ大きな首輪をはめてやる。

それにつなぐリードは、小型犬用の物であるが。

「楓。そのリード、新しくしたのか？」

「そうよ。カワイイでしょ？ ピンクでお花が付いてるのが欲しかったんだ！」

「……そうか」

何も言つまい。とばかりに、コマは楓の歩調に合わせて歩き始める。

本来なら、獣相応の頑丈なリードを使うべきなのだろうが、楓の、

「だって、コマさんに合わせたら、どれだけ重たいリード使わない

といけないのよ。

いい？ コマさん。リードをちぎったあげく、メス犬に擦り寄りたりしたら、保健所行きだからね」

との温かい言葉に、コマはいつだって大人しくしていた。

ご近所さんの不安そうな苦情のたびに、彼らの目の前で、楓による上下関係を示すシツケを披露してきた。

いつも最後には、ご近所さんから涙ながらの「やめてあげて」という言葉にコマは救われてきたが。

近所から離れた場所で、こんな状況を見せつけられれば、人通りが少ないとはいえ、すれ違う人間はやはり不安気な表情を浮かべている。

しかし、ピンクのリードを使えて機嫌が直ったのか、楓はそんな事には気にもとめず、足取りも軽い。

「まったく、人狼^{じんろう}つてめんどくさいよね。なんで人狼になったんだっけ？」

「……生まれつきだ。なんでも何もない。楓は何故あの父親を選んだんだ？」

「物心ついた時からパパだったんだから、選んだわけじゃないんじゃない？」

楓は首をかしげながら、コマを見た。

コマも低い声で笑い、どんどんゆっくりになる楓に付き添うようにペースを合わせる。

街灯は少なく、人通りもなくなった暗い夜道。

すでに月も隠れたというのに、コマは姿を元に戻そうとしない事に、楓は首を傾げた。

「コマさん。そろそろ戻っても大丈夫なんじゃない？」
「いや、この方が安全だろう。いざという時、服が動きの邪魔をしないしな」

コマが後足で立ち上がれば、ゆうに二メートルは越えるだろう。スラッとした足ではなく、がっしりとした筋肉質の足は、それだけで威圧的である。

「ずっとこの格好でいたらいいのに」

「そうはいかないだろう。楓の家に住ませて貰ってる限り、タダとはいかん。金を稼ぐのは人間の体の方が都合がいい」

話しながらも、いよいよ止まりかけている楓の足。

乗れと言つように、コマはアゴで指し示す。

楓は待つてましたとばかりに、背中に腰かけながら溜息を吐いた。

「コマさん、頭が固いよね。パパは獣に金を出させるほど、落ちぶれてない！ って言ってるのに」

「……固いとかの問題じゃないだろう。ってゆーか獣を絡めて、『落ちぶれる』と使う辺りが気に食わないからだ」

毛を逆立てながら、コマが低い声で唸る。

楓は、無言で肩をすくめ、更なる安定性を求めて、首輪を手綱のように握った。

「コマさん。『ってゆーか』って言葉、好きだよね」

「楓は、話のすり替えが好きだな」

辺りに注意を向けながら歩を進めるコマに、楓は首輪を強く持ち直す。

厚い雲が覆っている為、真の闇に包まれながらも彼が道を外す事はない。

静まり返った裏通りを、二人は風のように駆け抜けていった。

満月の夜に（２）

闇夜の中、音もなく疾走する一対の影。

背に乗せている楓を振り落とさないように気を付けながら、灰色の毛並みをした大きな体躯の獣は走り続ける。

町の外れに近付いた時、コマがふと鼻を上げた。

「どうしたの？ コマさん」

「……いや、パパ様が外で待つておられるようだ」

走る速度を緩め、コマは小さく唸り、声を吐き出した。首輪を握り締めている楓は、その様子にくすりと笑う。

「コマさんって、パパが苦手だよね」

「苦手というか……何と言えいいのか」

黒光りする鼻をヒクヒクさせ、コマの足取りが重くなった。

民家がまばらになり、月もなく周囲が漆黒に包まれた中、白い豪邸が見えてくる。

鉄製の高い柵に囲まれて、静かに佇む邸宅には、窓から暖かな灯が周囲を照らす。

立派な門構えの前で、行ったり来たりを繰り返している長身の男。そろそろと歩くコマと背に乗っている楓を見つけるや、目にも留まらぬ速度で走り、コマを無視して楓を抱きしめた。

「楓ちゃん！ こんなに暗くなるまで、何をやっていたんだい！

心配した。そうだ、パパは心配したんだぞ！」

「ただいま、パパ」

泣き出さんばかりに頭を振る楓父の背を、楓はなだめるように優しく叩く。

そんな優しさを見せたばかりに、楓は更にきつく締められる事となった。

さすがに見かねたのか、コマが声をかけてくる。

「パパ様、そろそろ楓が限界そうです」

「お前、可愛い楓ちゃんを呼び捨てにすることは！ 恥を知れ！」

楓をコマから降ろし、楓父はコマの鼻に指を突きつけた。

コマはゆっくりと座り、頭をさげる。

「大変申し訳ありません、パパ様。以後気をつけます」

「そしてお前に、パパ呼ばわりされたくない、何度言えばわかるのだ！」

「……では、旦那様と呼べば？」

弱りきったコマの言葉に、楓が盛大に吹き出す。

「お前は、私の妻でも気取りたいのか！」

「ですから、名前を教えてくださいなれば……」

ますます困った声を出すコマ。ますます顔を赤くして激昂する楓父。

「獣に、教える名などない！」

楓以外にはすべからず理不尽な楓父。

コマは楓に拾われた初日から、この男の性格を理解はしたが、納得するには難しいようだった。

彼の怒声に、少し離れた家々の窓から明かりが灯り出し、暗い世界に少しばかり暖かみが増した。楓は二人に、静かな声で言葉をかける。

「パパ、近所迷惑だよ」

「おお、楓ちゃんの言う通りだ。さ、冷えるから早く中にお入り」

楓の肩を温めるように抱いて、黒く大きな扉を開け、楓を先に入らせた。

後からついて来た、暗闇に紛れる灰色の獣を彼は冷たく見下ろし、

「こんな遅くまで連れ歩いた罰だ。今日は外にいろ」

「パパ。コマさんを拾って来たのは私なんだから、命令しないで」

楓父を押しつけて、楓はコマを中に引き入れる。

「足を拭くから、待ってて」

玄関のマットの上にコマを座らせ、楓は靴の裏をマットで拭ってから、タオルを取りに行く。背後から、鍵をかけ終えた楓父の、囁く声のはつきりと聞こえてきた。

「楓ちゃんが気に入っているから、置いてやるのだ。お前は楓ちゃんの護衛を私と約束した。それをなんだ、気軽に外に連れ出しおつて！」

楓に聞こえていないつもりで話しているのだろうが、怒りの声が少しずつ大きくなる。

急ぎタオルを水に浸けて、絞りきれないそれを持ち、楓は柱の陰からそっと彼らの様子を伺っていた。

その時、楓父が首輪をつかみ、自分の目元まで軽々とコマを持ち上げる。

後ろ足で支えてはいるが、胸ぐらをつかまれ、因縁をつけられている獣の図が出来上がっており、その状態のままコマは低い声で、

「……ってゆーか。拾われて一週間立つけど、さして危険は感じません」

「バカ犬めっ！ こんな月のない夜に、若い少女が一人歩いてみる！ それだけでも危険極まりないというのに、それが楓ちゃんだと思つと……足が竦^{すく}むわ！」

竦んだ足で、あそこまで駆け寄れるくらいなら問題はないだろう。と楓は思うが、コマは洪々といった調子で謝罪した。

素直に謝られ、楓父は舌打ちをして首輪から手を離し、コマが同じ場所に座り込んだその直後、楓父の背に向かって声をかけた。

「パパ、コマさんに何してるの？」

「うん？ お話してただけだよ。仲良くね」

振り向いた楓父の笑顔に、ただうなずいた楓は、フラットな玄関の床に立て膝をつく。

大人しく前足を拭かれているコマに、楓父は笑顔のまま楓に進言した。

「楓ちゃん？ コマは自分で出来るから。まず夕ご飯を食べてきなさい」

「でも、犬は帰ったらブラッシングもするんだって聞いたの。私が飼いたいって言ったんだから、ちゃんとしないと」

そんな楓の言葉に、楓父は感動の涙を流した。

「楓ちゃん、立派に育ってくれて！ パパは……パパは嬉しい！」

後ろから抱きしめられ、楓はまた身動きが出来なくなった。

そんな夜も更け

冬の到来を思わせる冷気が辺りを包み、静穏な雰囲気せいおんを作り出す。寝静まった邸宅の中、灰色の獣は闇と見紛う黒い扉の前で、巨大な体軀を丸くしていた。

眠りと覚醒の狭間で、コマはここ一週間、同じ夢を繰り返し見る。そう、楓と出会った時の夢を

夕暮れも近い空。獣の形をしたコマはしつこく追ってくる人間から逃げていた。

少なくなったとはいえ、神社の闇の増す雑木林に身を隠し、追っ手をやり過ごす。

匂いが完全にしなくなる頃には、太陽は半分も沈んでいた。

今日はここで野宿かと、枯葉をかき寄せ寝床を作っていると、人の匂いとも違う不思議な匂いが、コマの近くへと近付いて来る。出来るだけ低い姿勢をとり、即座に気配を殺す。

神社の境内に現れたのは、白い光。

網膜を焼くほど強い光ではないが、夢いわけでもない。

しかし、凜として存在する揺るぎない光。

コマは、その光につられて立ち上がる。頭の中で強く警戒する声もヴェールに包まれたように今は遠い。

コマの姿を見つけるや、光は消え失せ、一人の少女が姿を現す。彼女は肩で息をして、足を引きずりながら、無表情でコマを見た。

「もう怖いおじさん達はいないから」

怖がりもせず見据えてくる少女に、コマは動けなかった。

自製の出来なかった自分が信じられない。何も考えられず、彼女に吸い寄せられた。

しかし、すぐに我に返り警戒態勢をとる。

疲れて座り込む少女の頭上で大きく羽ばたく音が聞こえ、見た事もない大きな黒い鳥が急降下してくる。

少女を守る筋合いは、コマにはない。彼女に助けられたとも思っていない。

しかしコマの中で、この光を渡すものと怒りが込み上げ、力が溢れる。躊躇ちゅうちよすることなく全身の筋肉をバネにして、コマは巨鳥に飛び掛っていた。

気が付けば、巨鳥は灰となって崩れ落ちていた。

少女は、目を見開いてコマを見ている。

「助けてくれたの？」

「……違う」

自分のものとは思えないほど、ひどくしゃがれた声が出た。

鋭い牙を見せながら、低く唸る。そうすれば怯えて逃げるだろうと思っただけなのに。

獣が話した事にも、その少女は驚く事もなく、右手を伸ばしコマ

に触れる。

「ありがとう」

そのたった一言に、コマの心は激しく揺さぶられた。

遠い昔に、人間と心を通わせた時期もあった。

しかし人間は瞬く間に成長し、緩やかな生を辿る自分は取り残される。やがて人間は自分を気味悪がり、殺そうとさえした。

逃げ延びて誓ったのだ。人間を信用してはならない、と。それなのに

コマは、目をあげ、変わらぬ暗い部屋を見回し、静かに嘆息した。

四足で立ち上がり、階段を静かにのぼって、二階奥の扉の前にソツと座る。

「……楓、どうした」

ノックのかわりに、右前足で軽く扉を引っかいた。

「パパは、お仕事？」

扉越しに静かに問われて、コマはそうだと返す。

扉を開けた楓は、抱えていた毛布でコマの全身を覆った。

「何の真似だ？」

「コマさん、いつもいらないうって言うけど、今日は寒いから」

目隠しをされた状態が落ち着かず、口を使って毛布を落とす。

暗い中、コマの所に来るつもりだったのか、楓の部屋の電気はついていない。

「何でコマさんには、私起きたってわかるの？」

落とされた毛布を拾い上げながら、楓は口をとがらせる。

コマは口の端を持ち上げ、楓を見上げながら片耳を動かした。それを見て、楓が小さく息を吐き、毛布を抱きしめる。

「眠れないのか」

「……そうでもないけど。ココアでも入れようかな。コマさんも飲む？」

「いや、水でいい」

その言葉に楓は表情を崩し、コマの背中に手を置いた。少女の手のぬくもりを感じても、コマの心が揺さぶられる事はない。

楓に合わせて、ゆっくりと階段をおりる。

キッチンの電気をつけ、ミルクをそそいだカップをレンジに入れて、一人と一匹は並んで待った。

人工的な白い明かりの中、コマは少しためらいながら楓を見る。

「楓は、何故オレをここへ？」

レンジの柔らかな光から目をそらし、楓はコマと目を合わせた。

「台所につて事じゃないよね。ええとね、神社で私を助けてくれたでしょう？ それに……パパに似てると思ったから」

「……オレが？」

聞き間違いかと耳をしつかりと楓に向け、目を丸くする。
しかし、楓は困った様に首をかしげ、

「そう。パパは何も言わないし、何て言えばいいのかわからないけど。まったく同じじゃないんだけどね、雰囲気似てるの」
「どこが！」

信じられない。とても理解出来ない。したくもない。
あからさまに眉間にシワを寄せ、コマは毛を逆立てて唸った。
そんなコマを見て、楓がクスリと笑う。

「コマさん、そんなにパパが苦手？」
「追われる身から解放されたのは、感謝している」

神妙な顔をしてうなだれるコマに、楓は思い出した事を口にした。

「コマさん、パパの事を『旦那様』って言ってたよね。アレってどこで聞いてきたの？」
「バイト先だ。客で来る人達のことを、男は旦那様。女はお嬢様と呼ぶなどと言っていた」

疑わしげに目を細めて、真相を確かめようと金色の瞳を覗き込む。

「……コマさん、一体どんなバイトしてるの？」
「皿洗いだ。誰とも話さずにすむからな」

楓の言葉の意図がつかめず、コマは目をそらさずに答える。

「そう。ヒラヒラした服着た、可愛い感じのおねーさんとか、いっぱいいるんじゃない？」

「人間の女は入れ替わりでいる。接客は女、裏は男という割り振りだな。オレは裏出口側を任されているから、背後からの不法侵入は不可能だと思っただけ」

狼の姿のまま胸を張り、口の端を持ち上げた。

楓は深く嘆息し、電子音を鳴らすレンジからカップを取り出した。コマから視線を外し、無言でココアの粉をカップに入れている楓。いたたまれない空気の中、コマは静かにその様子を伺い続ける。甘い香りと、カップにあたるスプーンの音だけが辺りを包む。

楓はコマの横を通り、電気を消した。

「お話終わり。なんか疲れちゃった」
「そうか」

コマの首輪をつかみ、またゆっくりと階段をのぼる。
楓が自室の扉を閉める前に、コマに振り返った。

「コマさん。まさかと思うけどバイト先で、ボクはコマです。皆さん仲良くしてくださいね。なんて、言っただけよね？」

おかしい事を言う。と言わんばかりに目を丸くして、コマは呆れた声を出す。

「何故、他の人間にその名を言う必要がある？ 本来、奴らとは関わりたくないのに」

「そうよね。じゃあ、何て名乗っているんだっけ？」

「パパ様から頂いた『マキハラ タケル』だ」

「私は槇原楓だよ」

楓は素直に答えたコマの鼻に指を突きつけながら、くすりと笑う。

「パパ様じゃなくて、ソレを使ってみたら？　おやすみ、コマさん」
「……？　おやすみ、楓」

扉がきつちりと閉められ、楓がベッドに入る音を聞いてから、コマはその場を離れる。

階段を静かにおりながら、楓の言葉を頭の中で反芻^{はんすう}させた。

「……そうか。今度はソレを試してみるか」

玄関の横、冷たくなった床に丸くなりコマは小さく息を吐いた。

雲が途切れ、玄関にある明かり取りの窓からは白い光が溢れている。
る。

白く輝く満月は、ただ静かに世界を見下ろす。
揺るぎない光を放ちながら。

静穏なる夜明け

白々と夜が明ける頃、張り詰めた冷たい空気も、ゆっくりと和らぎはじめる。

玄関の傍らでまどろんでいたコマは、かすかな気配に覚醒し身を起こした。

威圧的にそびえる黒い扉が音もなく開く。そして黒の革靴で、石の床を颯爽と入ってくる男、だが響くはずの靴音はない。

「槇原様、お疲れ様でした」

楓を起こさないよう、静かな声で出迎えるコマに、楓父は左眉を持ち上げた。

「……お前、誰から入れ知恵を受けた？」

「楓……様です」

コマを見もせず、不機嫌を顕わにしていた楓父は、シャツの首元のボタンを外していたが、楓の名前が出た瞬間、顔がほころぶ。

「やはり楓ちゃんは、彼女に似て聡明だな」

呟き、すぐに眉間にシワを寄せた。

電気も付けず、楓父がまだ暗い部屋を見回す。出かけた時と違いがない事を確認し、コマをにらみつけた。

「コマ。バイトは辞める」

「……理由を」

楓父は足首まである黒のマントを外し、振り返る事もなく一階奥の部屋の暗闇へ消えた。

楓すら立ち入りを禁じているその部屋を、コマはしばし外から眺め、辛抱強く待つ。

白いシャツと黒のスラックス姿で、バスローブを片手に戻ってきた楓父は、正面で待つコマをにらんだ。

「言っただけだ。お前は楓ちゃんの為にのみ存在する。いかなる時も離れるな」

コマは押し黙り、楓父は黒く湿った鼻に指をつきつける。指には構わず、楓父から目をそらさずにコマは呻いた。

「一つの場所に、留まるつもりはない」

その言葉に楓父は、さもおかしい事を言うばかりに口の端を持ち上げる。

「人狼であるお前が、楓ちゃんの傍から離れるだと？ …… お前は、離れられん」

「それは、オレが決める」

少し毛を逆立て、低い声で言うコマだが、自分が発した言葉に心が激しく動揺した。それが何故かは分からなかったが、意識的にその乱れを押さえつけ静める。

どんな相手であれ、深く関わり過ぎてはならない。と。

楓父はバスローブをコマに投げつけ、パチンと指を鳴らした。

「それを着ろ。くれてやる」

人間の姿に戻るつもりはなかったのだが、彼の鳴らした音でコマは人型に変化した。

コマは低く唸って、バスローブに腕を通し二本足で立ち上がる。

「せめて人型でいる。この私と話をする者が、獣とは気に入らん」

肩を怒らせ、楓父はキッチンへと消えた。

氷のような石の床を物ともせず、コマも足音に注意しながらキッチンに向かう。

「お前が来て一週間になる。不逞の輩どもが、様子見だけでは限界に近くなってきたようだ」

「ふてい？」

キッチンの入り口に静かにたたずみ、コマは眉をひそめた。

コンロの火を止め、楓父が振り返る。

「楓ちゃんを狙う者だ。闇に生きるモノが、どんな目に遭おうとも欲しがる光だ」

「……白い、光」

「やはり、お前も見えていたのか」

苦々しげにコマを見据え、楓父は熱い湯気を吐き出しているポットから、ゆっくりと手を離す。

近くにある椅子に優雅に腰をおろし、嘆息した。

「お前は……そうだな、さながら光に吸い寄せられる蛾がのように、彼女から離れる事は叶わない」

眉間に手をあてながら、楓父はいかにも仕方ないとばかりの口調

で続ける。

「それが何故なのか。まだ幼い頃から孤独の中生きてきたお前は知らんのだろ。それはそれで良い、知らぬままでいろ」

楓父は高まる気を落ち着かせるように、カップへ湯を注ぐ。返事をせず、コマは続きを待った。一瞬の間が、何十年の時を生きてきた事よりも長く感じる。

「楓ちゃんを狙う者は、化け物から人間まで多様だ」

「人間もか」

「そうだ。だから彼女を勝手に外へ連れ出すな」

楓父の言葉に、コマは小首をかしげた。

「ってゆーか、それを思えば家にいても変わらないのでは？」

他にどんな化け物がいるのかは知らないが、二階の窓ガラスなど、簡単に突破可能だろう。

現にそれを行う事は、コマにとっても楽な仕事だ。それを聞いて、楓父は蔑む^{さげす}ようにコマを見て、鼻で笑う。

「この家は、奴らには触れる事すら出来ない。出来るのは鈍感な人間くらいのもの。だからこそ闇の者どもは、人間を取り込む」

「……人間に、扉を開けさせて中に入り込もうとするのか」

再び思案するコマに、楓父は呆れた声を投げつける。

「中になど入れるものか！ 人間が敷地外に連れ出せば話は別だがな」

「では、なぜオレは家の中に入れる？ 化け物に違いないでしょう」

椅子に座っていたはずの彼が、いつの間にかコマの目の前に立ち、革靴でコマの素足を容赦なく踏みつける。

低い声を立てて痛みに堪えるコマを冷たく見下ろし、楓父は更に力を加えた。

「お前は、この私に何度質問したら気が済むのだ？ 彼女は大切だ、お前はただ身を挺して守り通せば、それで良い。わかったか？」

「……しかし」

「人間以外が万が一にも敷地に入る事があれば、拒否をしる。それだけでいい、分かったか」

どのように？ などとは聞けなかった。楓父の眼差しがすでに、自分で考えると物語っている。

コマは、小さく唸りながらもうなずいた。

つまらぬ事をしたと足を解放してやり、楓父は顔をしかめて出過ぎた紅茶を流しに捨てた。

「細かい事を知りたければ、自分で調べるといい」

コマを見る事なく、静かな空気に声を乗せ、楓父は言葉を続ける。

「ただし、それを知った上で、お前が態度を変えるような事があれば。私がお前を灰にする。楓ちゃんが何を言おうともだ。覚えておけ」

「……はい、分かりました」

本当は何も分かってはいないが、野生の、化け物としての本能が逆らうなと警告を発している。コマはうなずくしかなかった。

分かった事は三つ。

巧妙に隠していたが、楓父は人間ではないニオイを、わざとコマに分かるようにしてきた事。

これはいつでも灰に出来るという、彼とコマの能力差を歴然とさせる為。

そして彼らを敵に回すべきではない。という事を本能に叩き込む為。

シツケは早いうちに叩き込めとはよく言うが。コマもとりあえずは従う事となった。

紅茶をあきらめた楓父はまた暗い奥の部屋に消え、コマは獣の姿に戻る。

玄関まで移動して、楓父が帰宅した時のようにぐるりと見回す。コマは、初めてここに連れてこられた時、妙な感覚に襲われた事を思い出していた。

この家の敷地に近づくほど、頭がしびれ、全身に伸しかかる重みが気持ち悪かった。

自然と足が鈍り、近づく事がためらわれ、頭を何度も振った。

感覚をはつきりさせようとした時に、楓の声が意識をクリアにさせた。

「大丈夫よ。私のお客様だから、おいで」

枷が外れたように、重みも気持ち悪さもなくなった事を。

夜が明けていく。窓から溢れてくるオレンジ色の光に、コマは目を細めた。

まだ鳥は鳴かない。

バスローブを床に敷き、その上に丸くなり鼻から息を吐き出した。

「……おいで、か。なるほどな」

簡単な事だ。と心の中に留め、騒ぎ出した鳥達の声に耳を澄ます。まだ楓は起きてはこないだろう。

カゴの中で安全に温かく囲われている鳥。外で危険と抗いながら自由を謳歌している鳥。

どちらが正しいなどコマには分からない。どちらを取るかは本人の考え次第だからだ。

思い悩む事はないはずなのに、コマは理不尽に揺れる。

孤独の中、いつも何かに追われて生きてきた自分は、自由であったとは思わない。

しかし陽の光の下を、そして月明かりの下を、季節を感じて歩く道は嫌いではなかった。

「楓の決める事だ。オレはそれに従えばいい」

鼻をバスローブのシワの間に潜り込ませ、コマは目を閉じた。

ゆっくりと光の色が変化していく。まどろみの中、コマはもう始まりの夢を見る事はなかった。

使命として（１）

白飯の炊ける匂いに混じって、ふんわりと漂う味噌汁の香り。

シワがよった青いバスローブから、太い尾すらはみ出ない様にきつちりと座り、階段をゆっくりおりてくる楓を見つめてくるコマ。

そんな無言で何かを訴えるコマを横目で見やりながら、楓はキツチンへと顔を出した。

「おはよー、パパ」

「おはよう！ 楓ちゃん！ よく眠れたかい？」

黒の上下に、大きな赤いチューリップ型のポケットがついたくすんだ黄色のエプロンを身につけた楓父が、おたまを握りしめ満面の笑みを浮かべて振り返る。

違和感極まりない格好の楓父は、パジャマに赤いダウンジャケットをはおった楓に、しがみつくように抱きついた。

「またこんなの着て寝たのかい？ 寒かったかな、毛布をもう一枚出しておくからね？」

「……ううん、違うの。毛布を布団の中じゃなくて、外にかけてもあったかいのかな、と思って実験してみただけ」

「そうか。楓ちゃん、チャレンジ精神が出てきたんだね！ 偉いぞ！」

離れるどころか、さらにきつく抱きしめられ、さすがに楓が小さく呻く。

「パパ、それよりも、聞きたい事があるんだけど」
「なんだい？」

少しだけ腕の力を緩めて楓の顔を見下ろすと、楓は顔を上げる事もなく、

「コマさんのマツトみたいになってたアレ。パパのバスローブだね？」

「おや、気が付いたかい？」

「うん。パパとコマさん、仲良くなって嬉しいな、と思ったんだ」

表情も変えずに言う楓に、またしても腕の力が元に戻る。いや、先程よりもきついかもしれない。

頬を紅潮させて、楓父がウキウキと明るい声をあげた。

「よし！　じゃあ今日は目玉焼きも付けてあげようね」

「……パパ、味付け玉子がいいな」

「よし！　パパに任せなさい！　味付け玉子の十個や二十個、ちょちよいのちょいだ！」

嬉々とした様子で、流しの下棚を開けて醤油の一升瓶を取り出した。

これでしばらくは、三食の付け合わせに味付け玉子が出てくる事、間違いない。

楓はその様子にうなずいて、キッチンから出た。

いまだ静かに玄関横にいるコマは、楓を見つけ少し困った顔をしたくらいで身じろぎ一つしない。

楓は、コマの背中に手を置いて、人よりも高い体温に安心して少し笑顔になった。

「おはよー、コマさん」

「おはよう、楓様。毛布をちゃんとしなかったのか？」

耳を澄ます必要もないほどの大騒ぎは、コマの元にも当然届いていたのだろう。

そんなコマの言葉に、楓は素直にうなずいた。

「うん。掛け布団はがして敷き直すの、めんどくさかったの」
「そうか。ならしょうがないな」

うなずきはしなかったが、呆れた声も出さないコマに、楓は両手でコマの両耳をつかむ。

無表情で耳をつかんだまま動こうとしない楓に、コマも何も言わない。

楓が目を少し細めて、口をとがらせる。

「ずるいよ、コマさん。寒かったなら毛布使えば良かったじゃない」
「いや、これは槇原様の指示……」

コマは急に口をつぐみ、目を泳がせた。
その態度が分からずに、首をかしげて楓が無言で先を促すと、コマは渋々といった調子で口を開く。

「槇原様からの、初めての好意だから、断り切れなくてな。仲良くした方が、楓様も嬉しいのだろう？」

「そうね。コマさんが家族になれたみたいで、すごく嬉しい」
「そうか」

両耳から手を離し、コマの顔を嬉しそうに撫で回す。
目を閉じ、されるがままになりながらも気付かれないように小さく嘆息した。

「楓ちゃん、もう少ししたらご飯が出来るから。着替えておいで」
「はい」

台所からのぞく楓父に返事をして、ゆっくりと階段をあがっていく。途中、玄関を見下ろせば、まだ座ったままのコマが楓とキツチンに視線を往復させていた。

楓はくすりと笑い、階段上に目を向ける。
手すりに体重を預けながら、いつもなら辛い階段も苦になっっていない事に気づいた。

生まれた時から足が悪く、毎日がりハビリのようなもの。
コマも補助をしてくれるが、自力で階段をあがるのはひどく辛かったのに。

コマを見ると、頑張らなくてはと、何故か心が引き締まる。
自分を見守ってくれる者が増えれば、それだけ頑張りたくなるのかもしれない。と楓は思い、歯を食いしばって残りの段差に意識を集中させた。

「コマさん、散歩に行こ」

朝食後、ピンク色の細いリードと、お散歩カバンを手に持ち、オレンジ色のコートを着た楓が声をかける。

バスロープの上から解放されたコマは、伏せている状態で頭だけ持ち上げ、小さく首をかしげた。

「……いや、今日から散歩はしなくていい」

その言葉に、楓の目が見開いた。リードを強く握り、コマの傍にしゃがみこむ。

「コマさん、どうしたの？　どこか苦しいの？」

「いや、どこも悪くない」

「じゃあ、散歩行こ」

大きな獣は考えるように、困ったように押し黙る。

チラリと楓から視線を外し、楓の背後　一階奥の部屋を見たコマ。

コマの視線をたどる様に楓が振り向き、閉まっている扉越しに声をかけた。

「パパ。散歩に行ってくるね」

「ダメだ、今日は家にいなさい」

音もなく扉が開き、楓父も困った顔でそう告げる。

「誰かお客様がくるの？　大丈夫よ、近所をグルッと回ってくるだけだから」

「……コマ。ちょっと来なさい」

一歩もひかない楓に、待っておいでと声をかけ、楓父は左腕でコマと肩を組んだ。

楓に背中を向けて、声を落とす。

「お前、分かっているな？」

「はい。道路に出たら、すぐ引き返してきます」

「よし、五分待って戻って来なければ……分かっていないな？」

さらに声を低くして、組んでいる腕に力を込めた。

楓の足では、五分で戻るのは不可能だという事は、コマは理解し

ていた。

要するに五分後、帰ってくる姿が門の前から見えなければ『分かっているな』という事になるのだろう。

門の前で待っている楓父の姿を想像して、コマは嘆息を噛み殺し、声を絞り出した。

「……はい」

「パパとコマさん、本当に仲良しだね」

真後ろから声がして、二人とも内心、飛び上がりそうなほど驚いた。

態度に出なかったのは、長い年月生きてきた賜物たまものだろう。

「そうだよ。パパとコマは仲良しだ。でも一番は楓ちゃんだからね！」

コマの背中に手を置いて、笑顔で振り返る楓父。

「うん。分かってる」

楓も小さくうなずいて、コマの首輪に細いリードを繋いだ。

コマはされるがままに、大人しく従っている。

ゆっくりと玄関に向かい、楓は振り向いた。

「パパ、すぐ帰って来るから」

「すぐだからね？ 危ないモノには近付かない事、分かったかい？」

「うん。コマさんもいるし、大丈夫だよ」

コマの頭に小さな手を軽く乗せ、楓は微笑する。

楓父もそれを見て、柔らかい笑顔を浮かべた。

「ああ……楓ちゃん、そんな顔も出来るようになって！」
「うん。行って来ます」

目元を押さえ出した楓父に挨拶して、楓は黒い扉を開けた。
やっぱり行かないでという声も、扉の向こうに消える。

大きく息を吐いたコマに、楓がくすりと笑い、ゆっくり歩き出す。

「コマさんも外に出たいでしょ？　ずっと家にいると、考えなくて
もいい事。考えちゃうもの」
「……何かあったのか？」

声のトーンを落とした楓に、コマが歩みを止めず振り返った。

そんなコマの背中に手を乗せて首を振った。ショートボブの黒髪
がサラサラと揺れる。

「ううん、いいの」
「そうか」

コマはしつこく聞く事もなく、前を向く。

深くは立ち入らないでくれるコマの後ろ頭に向かって、言葉を発
する事なく、楓は小さくうなずいた。

二人とも、ゆっくりと門から足を踏み出す。

出勤、通学後であるのか、道に知った人影はない。

しかしここ数日、少し離れた空き地から、こちらを面白そうに見
てくる三人の人間がいる。こちらを見ては何やら囁き、笑い声をあ
げ、見ているだけの男達。

年の頃は、十七、八といったところか。知らぬ振りをしながらも
コマは意識の片隅には置いていた。

楓父の言葉もある。どんな若い人間だとて、見知った近所の人間

すらも、今のコマの中では、警戒対象になっている。

自然と彼らと楓の間に入るように、移動するコマ。

学生服を着た三人は、お互いの目を見てうなずき合い、気持ち悪い笑みを浮かべながら、コマと楓の方へと歩き出した。

使命として（２）

「楓、コートをくれ」

三人の学生達が近付く気配に、コマは傍でゆっくりと歩く楓に低い声で囁いた。

楓はうなずいてカバンから黒いロングコートを出して、コマにかぶせてやる。

「コマさん、寒くなったの？ それとも……」

楓が言葉を続けようとした時、男達が笑いを含んだ声をかけてきた。

振り向いた楓の茶色の瞳に、鈍く光る長い棒が映る。

「……え？」

実際は勢い良く振り下ろされたのであろうそれが、楓の目にはスローモーションに見えた。

体は硬直してしまったように動かせない。

極度の緊張の為か周囲の音が遠ざかり、悲鳴をあげる余裕もない。目を閉じるだけで精一杯だった。

しかし、来るべき衝撃は一向になく、代わりに目を閉じても感じる、光を遮って出来た暗さに、楓はそつと目をあける。

目の前には黒いロングコートの大きな背中。

それを見た時、楓は心からの安堵を覚え、今更ながらに震え出した。

「楓、もう少しだけ、目と耳を塞いでいろ」

コマの落ち着いた言葉に、返事を返そうとしたが、引きつる喉^{のど}が言う事を聞かない。震える手で、目の前にあるコートを少し引つ張るに留まった。

「大丈夫だ、すぐに終わる」

優しい声に楓はコートから手を離して、震えを止めるように両手に力を込めて耳を塞ぎ、目を閉じた。

コマは振り返る事なく、彼女の気配でそれを察し、男達へも意識を向ける。

相手は三人。坊主頭、茶髪に黒。

くだらない連中の自分を見る目が、表情が。今まで出会って来た人間と変わらず同じモノで、思わず笑い出しそうになるのをコマは堪えた。

こいつらにくれてやるのは嘲笑ではなく、獣としての鉄則だ。他人を傷つける行為は、その場で咬殺^{はんげき}されても自業自得。

コマは心の中で呟き、血がたぎるのを感じた。獣の血が騒ぐ。沸き起こる衝動を抑え、坊主頭の男が振り下ろした鉄の棒を強く握りしめるコマ。

押しても引いてもびくともしない事に、坊主頭の男は顔に恐怖の文字を浮かべた。そんな力のある者に、武器を取られるわけにもいかず、坊主頭の男は冷や汗を流しつつも、離す事が出来ない。

しかし、怒りを纏ったコマに、一番近いのも彼。残りの二人も助けるどころか、驚愕の表情を浮かべ、尻込みしている。

「……な、なんだよ。こいつ」

一連のコマの変身を見ていた彼らは、蒼白となり怖気づく。

「見ての通り、化け物だよ」

声を絞り出す男にむかって、人型に変化したコマは、口の端を持ち上げて低い声で言ってやった。

ついでとばかりにつかんだ棒を、男ごと二人に投げつける。

情けない悲鳴を上げ、三人は逃げる為に立ち上がろうと、ぶざまに暴れる。

コマは男を投げた直後に一足飛びに間を詰め、坊主頭と茶髪の後頭部をつかみ、酷い音を立てて頭をぶつけ合わせて、三人同時に昏倒させた。

金色の目を細めて立ち上がり、黒髪の近くに転がっている果物ナイフを目にした。

拾い上げ、つまらなそうに鼻を鳴らしたが、ふと面白いことを思いついたように口の端を持ち上げる。

坊主頭以外、二人の髪を虎刈りにし、ズボンのベルトを切り、上着の背中を真っ二つにする。ついでにズボンのボタン、そしてファスナー部分も切り取っておく。

コマは満足そうにうなずき、ナイフをコートのポケットに入れた。

「楓、もう大丈夫だ。家に戻ろう」

硬直したように立っている楓に優しく触れると、楓は震えながら目をあげ、コマにすがる。

そんな楓をやりわりと押し戻し、視線を合わせる為に身を屈めた。^{かが}

「家に、戻るぞ」

「……コマさん、怪我してない？」

「人間にオレは傷付けられないから、安心しろ」

楓に背を向け、ボタンを外しながら獣の姿に変貌を遂げるコマ。
黒いコートを地面に落とし、楓にくわえて渡す。

「ナイフがポケットにある。気をつけてくれ」

そんなコマの言葉に、楓が目を丸くした。

「本当に、怪我しなかった？」

「大丈夫だ。人間の、しかも子供の力でなど、オレには傷一つつかない」

ためらいながらも、楓はコートからナイフを取り出し、コートに挟み込んでカバンにしまう。

倒れたまま動かない、地肌が見えたり見えなかったりする頭になった三人組を放って、ゆつくりと元来た道に引き返しながら、コマは楓の足を気遣い、楓はコマを気遣いながら歩いた。

「楓ちゃん！」

案の定、門の前で待っていた楓父が顔を輝かせ、出迎える。

一本道だ。コマの悪漢退治は、さほど遠くないこの門前からは見えていたはずだ。

「コマ」

やはり来たかと耳を下げ、頭を低くしながら、楓父を伺う。

楓を抱きしめ目を細めた彼は、それでも抑揚なく、

「もう少し痛めつけてやれなかったのか？ まあ、仕方がないか。お前の力で殴れば昏倒では済まんからな」

「……出来るだけの手加減はしました」

「ふん、もう少し力加減を覚えておけ」

弱り声を出すコマに、楓父は不服そうに言葉を投げつけた。

楓が小さく震えながら、楓父の胸の中で呟く。

「コマさんが、怪我しちゃうかと思って、怖かったの」

楓父は、その言葉に複雑な表情を浮かべ、ただ楓の頭を優しくなでた。

そつと身を離し、楓にコマの首輪を握らせて、家の中に入るよう促してくる。

「パパは？」

「大丈夫だよ、後片付けをしてから。安心なさい」

優しく笑い、コマと楓が家の中に消えた事を確認すると、楓父は厳しい瞳で、三人へとゆっくり歩を進めた。

手を伸ばして、届くかどうかの位置まで来た時、楓父が三人に向けて声をかけた。

「出て来い」

男達は、ぴくりとも動かない。

静かだが、圧倒的な怒りを表して、もう一度だけ呼びかける。

「私を、これ以上怒らせるな。人間共もろとも消し炭にされたいか」
「……しょうがないわねえ。もう、バレちゃったの？」

三人の口から黒い霧が吐き出され、一つにまとまり、長くうねった黒髪の女性が霧の中から現れた。

赤いルージュをひいたように赤く染まった唇を、大きく左右に持ち上げ、不自然に蠢く闇と同じ色の髪を、左手で優雅に後ろへ流す。黒の霧を吸った者を、夢の世界に引きずり込み操る彼女。夢霧は、つまらなそうに小さく息を吐いた。

「あの狼クン、甘ちゃんねえ。あたしだったら生かしておくでなくて、そんな勿体ない事、絶対しないわ」

腰をくねらせて楓父に歩み寄る夢霧。

いつの間にか、静かに黒い霧が彼を包んでいた。

「ねえ？ 少しでいいの。小娘の血を、あたしに頂戴な。そしたら大人しく帰ってあ・げ・る」

艶やかな微笑を浮かべ、夢霧は右手の人差し指で楓父の顎に触れる。

楓父の胸に体を擦り寄せ、甘い言葉を吐く。

見下すように眺めていた楓父は、夢霧の瞳を見つめながら彼女の右手をつかみ、その甲に口づけた。

「消える」

楓父は口の端を持ち上げ、手を離す。

恍惚の表情を浮かべていた夢霧は、顔色を変え楓父から飛び退いた。

右手が崩れていく。その恐るべき速度に絶望の悲鳴を上げた。

「あたしに、何をしたの！ いや、いやよ！」

彼女自身は儚く弱い。それ故に、道具がなければ自分の腕を犠牲にする事も出来ない。

「何故あたしの霧が効かないの！ 闇も人も関係ない……はず」

左手を頬にやり、驚愕の表情を作った灰の像。

楓父は微動だにせず、楽しむ表情を崩さず灰の像を見つめ、すぐにでも笑い出しそうな声で像に向かって囁いた。

「貴様ごときに、私が教えるとも思うのかね？」

その言葉が引き金となり、灰は崩れ、風に吹き散らされた。

リズムを踏むかのような足取りで来た道を戻り、家の敷地に踏み込む。

「どんな者であれ、負の感情ほど気持ちの良いモノはないな」

すこぶる機嫌の良い声で、家に入る前に楓父は呟き、口の端を持ち上げた。

玄関扉に手をかけて、ふと顔を上げ誰に言うでもなく、付け足しておく。

「楓ちゃん以外だが」

一つうなずいてから、扉を開けた。心配そうに玄関で待っているだろう楓に向けての笑顔を、先に作っておきながら。

真実の追究

楓父が戻ってくるまでの間、楓はコマが本当に怪我をしていないか、確認していた。

顔を両手で挟んで上を向けさせ、アゴから胸、前足も一本ずつ持ち上げては手で触って調べる。

背中をなで、後ろ足も前足と同様にコマに協力してもらおう。

しかし腹を確認しようとする、コマは頑がんとして断った。

どんなに心配だから、確認するだけだから。と楓が言っても、首を横に振り伏せたまま動かない。

「どうしてなの？」

と聞いても、コマは困った目で楓を見つめ、口の端を苦笑するよ
うに持ち上げた。

「どうしてもだ」

「怪我、してるのね？」

「いや、していない」

埒さとが明かない。と、楓は小さく息を吐き出した。

「心配なの」

「大丈夫だ」

押しても引いても転がってくれないコマ。

なかなか引き下がろうとしない楓に、コマは深く息を吐き、言葉を続けた。

「ってゆーか、楓は背中に怪我をしたら、背中をつけて寝られるのか？」

「……寝られないと、思うけど」

楓の言葉に、コマはうなずく。

それでもまだ釈然としていない楓に、コマは言葉を付け加えた。

「そうだろう？ 怪我をしていれば、オレだって伏せのままではいられないさ」

そつと立ち上がり、腹をつけていた床を、鼻で指し示す。

血の痕跡はない。楓はやっとうなずいて、黒い扉を見つめた。

「パパは、平気かな」

「槇原様を傷つけられる奴は、そうそういないだろう」

その言葉に、楓は勢いよくコマへと振り返り、怒りの表情で指を突きつける。

「パパだって、生きてるの！ 生きてる者は誰だって傷つくんだから、滅多な事、言わないで」

「そうか、悪かった」

コマは座ったまま、楓を見つめる。力強く鼻を指さしたが、楓は表情を歪ませてコマの首にすがり、抱きしめた。

「そつだよ。生きてる者は、誰だって傷つくの。今の人達の事だって、何でかは分からないけど、私のせいだって分かってる。でも、パパは私に何も教えてくれない」

楓が話すのを、コマは身動き一つせず、静かに聞いている。

コマの表情は、楓からは見えない。もちろん、コマにとっても同じことだが。

「コマさんが、私を助けてくれる理由って何？」

「……分らない」

楓が体を離し、コマを正面から見据える。

コマも目をそらさなかった。

「パパに口止めされてるの？ 理由も言っちゃダメなの？」

「いや、そうじゃない。何と言っていいのか……感覚的な物だ。楓だからこそ、助けなければと思う。今まで生きてきた中で、他の人間には少しも思わなかった事だ」

コマは言葉を選ぶように、ゆっくりと口を開いた。

「だが、どうしても楓なのかと聞かれても、分からないとしか言えない」

楓の身が危険だと思えば、獣の血がたぎる。それも暴走しかねないほどに。

そんな力の奔流が、どうしても生まれるのか、コマ自身が動揺している部分もあった。

楓は瞳をあげらせて、うつむく。

結局は、誰も教えてくれない。分かっている事は、楓父やコマが傷付くかもしれない状況に、全て自分が関わっているという事実だけ。

「楓？」

いつまでも顔を上げない楓に、コマは訝しげな声を出した。

「ありがとう、聞かせてくれて」

楓が顔を上げ、表情のない顔で、ただ口を動かす。

コマは息を呑んだ。出会った頃の表情が、コマの頭をよぎった。無表情で、喜怒哀楽を示す事のなかった少女。

ここ一週間で、その姿は劇的な変化を遂げていた。獣の姿のコマ相手に、怒ったり笑ったり。最初は、顔の筋肉がないのかと思うほど、表情を表さなかった。恐ろしいほどに能面な顔。

コマが言葉を発するよりも先に、黒い扉が開かれた。

「ただいま、楓ちゃん！」

「おかえりなさい、パパ」

満面の笑顔で楓父が飛び込み、正面にいた楓を抱きしめる。

いつものように、されるがままになっている楓。

しかしコマの様子に、楓父は抱きしめる力を弱め、眉をひそめた。

「どうしたんだい？ 楓ちゃん、まさか怪我でもしたのかい？」

楓は首を横に振って、両手で楓父の胸を押す。

「パパ、教えてほしいの。どうしてパパとコマさんが、危ない目に遭わなきゃいけないの？」

怒りも愁いも感じられない、暗い瞳を二人に向ける。

楓父は、楓を少しだけ自分から離し、茶色の瞳と視線を合わせた。

「楓ちゃん、私達からしてみれば、あんな事は危ない内に入らないんだよ」

「危ないよ！ 前から思ってた。私の周りにばかり、あんな事が起こるの」

楓は静かな声で言い、その表情は複雑さを増している。

次の言葉を待ちながら、楓父は視線を外さない。

行き着いた楓の表情は、やはり無表情に近いものだった。

「私がいなければ、あんな事起きないの。パパやコマさんだって、わざわざ私なんかを守る事ない」

「違うよ、楓ちゃん。コマはどうだか知らないが、あれは私の仕事なんだ。楓ちゃんを巻き込んでしまって、悪かったね。怖かったろう？」

「そう。そうやってごまかすの」

楓の顔には、はつきりと怒りの表情が浮かんでいた。

「初めて外に出た時に襲ってきた、ドロドロした黒いのが言った言葉、覚えてるの」

茶色の瞳は、まっすぐ突き刺すように楓父を見つめている。

「聞き取りにくかったけど覚えてる。すぐに灰になったけど、確かに言ってた。『光がここにいた。この小娘を食べば、格が上がるぞ』って、どういう事なの？ パパ、教えてよ」

光溢れる玄関口に、重く張り詰めた雰囲気覆う。

「……わかった、コマは外に出ている」

「いいの、コマさん。ここにいて」

楓父の言葉に、立ち上がるコマ。それを楓が止める。さすがに眉間にシワを寄せ、楓父が扉を開けた。コマは楓父に従い、足を向けた。

「ダメだ。コマは知らない方がいい話だ」

「そうやって、今度はコマさんを排除するの？ 私にしたように」

楓が首輪をつかんだ為、コマは彼女を引きずるわけにもいかず、立ち止まる。

自分の手を振りほどいて出て行くかと思っていた楓は、コマを見て、また顔を上げた。

「コマさんを追い出したって、後から私が言うもん」

「そうか、ならばいてもいなくても、変わりないだろう？ 話を聞いてから、コマに言うか決めればいい」

いつもの甘やかす声ではなく、有無を言わせない厳しい声で、再度告げられる。

「コマ、外に出ろ。しばらく誰も寄せるな」

コマはゆっくりと歩を進め、楓も逆らえずに首輪から手を離し、間違った事を言っていないと示す為に胸を張った。

扉が閉められ、静まり返った玄関口で、二人は見つめ合う。

一向に目をそらさない楓に、彼は小さく息を吐いた。

楓がここまで自分を主張するのは、初めての事だ。殻に閉じこもり、何も見ず興味すら示さなかった彼女が今、楓父に立ち向かって

いる事実。

不満ながらも、コマの存在が大きい事は、承知せざるを得ない。

それでも彼女の変化の喜びを微笑に寄せ、傍に寄り、片膝をついて彼女の左手を取った。

突然かしくいた楓父に、楓は驚きを隠せない。

「パパ？」

おそるおそる顔をのぞき込んでくる楓に、彼は、静かに口を開いた。

「楓ちゃんが心から知りたい。そう思っていたら話そうと思っていたのだよ。まだ早い気もするが、話してあげよう。その後の事は…好きにしたらいい」

オニキスの様な黒い瞳に見つめられ、楓はただうなづく。

黒い瞳が愁いを帯び、楓父はそれを隠そうとするかのようにしばらく目を閉じ、次に開いた時には、真剣な強い眼差しに変わっていた。

追憶

「私は、本当の父親ではないのだよ」

楓父が最初に発したのは、この言葉だった。

白いソファに楓を浅く腰掛けさせ、楓父はまた片膝をつき、両手で楓の手を優しく包み込む。

楓は彼から一度目をそらし、少しためらってから、楓父に再度目を向けた。

「じゃあ、私は誰の子供なの？ 私も コマさんみたいに、人間じゃないの？」

「楓ちゃんは人間だよ。私が大切に想っていた女性の、ね」
「事故で亡くなったママは、人間？」

うなずく彼に、楓は静かに話の先を待つ。

楓父は目を伏せて、思案するように口を閉ざしていたが、やがてゆっくりと楓から手を離れた。

「楓ちゃんの本当のパパとママは、人間なのだよ。だが 私は、違うのだ。コマと同じ種族ではないが、人間ではない」

ああ、やっぱり。という呟きを楓が洩らし、楓父は苦笑する。
気付かないはずがなかったのだ。彼女は、人間ではない者達をも等しく照らす光。

漠然とではあるだろうが、楓の中で『何かが違う』という事くらいは、感じ取れていたのだろう。

だからこそ。

彼を父親だと思っていたからこそ、楓は自分が人間ではないのではないかという疑問をぶつけてきたのだ。

楓は混乱して喚くわけでもなく、泣き叫ぶ事もなく、波紋すら立たない水面の様な瞳は、ただ彼を見据えていた。

「じゃあ、あなたは誰？」

「私は……いや、私の名は、彼女と共に消えた。今では誰もないが、元は吸血鬼ヴァンパイアと呼ばれる種族だった」

「……だった？ 今は違うの？」

姿勢を崩す事なく、楓父 いや、元吸血鬼は顔を曇らせた。白いソファの上で、身じろぎ一つせず、楓は静かに先を待っている。

ほんの数秒の事が、長く重い。
彼は、重い口が開くのか確かめるように、ゆっくりと唇を動かした。

「楓ちゃんママは、我々みたいな者達に、絶大なる力を与えられる『光』だった」

苦しそうな彼に、楓は自分の隣に座れるように、左に寄った。
しかし、彼は小さく横に首を振り、話を続ける。

「私はコマのように、彼女を護っていた。人間は儚い生き物だが、私には彼女が大切だった。ただの『光』として見ていた彼女を、私は深く愛してしまった。」

だが、彼女の光を絶やさず、後世へと続けさせる為には、彼女は同族にんげんの者と命を育まなければならぬ。純粹で、彼女を受け入れられる、心の強さを持ち合わせた男を探すのも、私の仕事の内だった」

思い出しながら、スローテンポで語る彼は無表情だったが、黒く深い色の瞳は当時の状況を見ているかのように揺らいでいた。更に紡ぐ言葉にも、感情を排している。

「彼女を突き放したのも、私だ。私は慣習から抜け出す事が出来なかった。彼女は徹^{てい} 楓ちゃんの本当のパパと結婚し、命を育てた。その矢先に、襲われたのだ。」

私は彼女を護るべく戦ったが、一つの油断によって、車は橋の下へ転落した。彼女を助け出した時、もう、長くはないと見て取れる彼女から、光に包まれている楓ちゃんを受け取った」

彼は眉間にシワを寄せ、楓から視線を外す。
そして声の調子を変える事なく、しっかりとした眼差しで楓を見つめ直した。

「どこまで聞きたい？」

強いその言葉の勢いに、楓は一瞬、息を呑む。
しかし、彼女はもう決めた事、と小さくうなずいた。

「……全部。細かい所まで、全部」

「そうか。ならば、先に言うておくよ？ 楓ちゃんが今後、私をどう思おうとも、私は貴女から離れる事はない」

楓は、目の前にいる彼に、人ではないそれを見た。
心が震える。聞いてはいけないのではないかと、波紋が広がる。
だが楓は、しっかりとうなずいていた。

彼は自分の中の何かを吐き出すように、深く息を吐き出し、話し始める。

「ハンドルをきつたのは、彼女だった。操られた徹に襲われ、楓ちゃんを光で防護して……それでも最期の時に、彼女は私に向かって、笑いかけた。」

酷い言葉で傷つけ、突き放したはずの私を、彼女は許してくれていたんだ」

そして。と言った後の言葉が、続かない。

楓の背中に、ひやりとした感覚が伝う。膝に置いた手を、いつの間にか握り締めていた。

「……そして。彼女は、私に言った。

『私を、あなただけのものにしてほしい』と。最初に言った通り、彼女は『光』。我々の力を上げるには『光』を糧として、喰らう事。彼女はそれを望み、私は受け取った」

「じゃあ、ママを……」

「そうだ。私は彼女の血を奪い、事切れた彼女は吸血族の遺伝子が入り込んだ事で、灰となって散った」

彼は苦しそうな表情で、痛みを押さえるかのように胸に手をあて、白いシャツを強くつかんだ。

楓も息苦しさに喘ぎながら、震える声押し出す。

「だって、吸血鬼が血を吸ったら、ママも吸血鬼になるんじゃないの？ 本にあったよ？ あれは嘘？」

「私も、それを望んだ。彼女には、どんな形であれ生きていて欲しかったからね。命の灯が残っているうちに、私の全てを傷口から流し込んだ。人間を吸血族にするのは、禁忌なのだが、その時の私には関係なかったのだ。」

だが、彼女は消えた。『光』だったから、吸血化しなかったのかは、分からない」

ひたと彼女を見つめ、最後にと付け加える。

「楓ちゃんはその彼女の血を継いだ、我々の『光』なのだ。私には楓ちゃんを護り、後世へと繋げる義務がある」

彼は、終わりだとはかりに口を閉じた。

何から言えばいいのか、何と言ったらいいのか、楓には判断がつかない。

静かに立ち上がった彼に、楓は小さく肩をすくめてしまった。

それを見逃さなかった彼だが、何も言わず目を伏せ背を向ける。一階にある、奥の暗い部屋へと足を踏み出すと、楓は小さいがしっかりと声で呼び止めた。

「パパ！」

「……まだ、私をパパと呼んでくれるのかい？」

抑揚のない声が、楓の心に深く刺さる。

感情のないそれに、とてつもない絶望を感じ、楓は一瞬言葉をつまらせた。

しかし振り払うように頭を振って、楓は自分を奮い立たせる。

「だってパパは、パパだもの。私の家族は、パパとコマさんだけ」

彼がゆっくりと楓の方へと振り返った。

静かに彼と対峙する楓も、ソファから立ち上がった。

「私は彼女を喰い、力を得た。どんなモノよりも強い力を」

「私を護る為に？」

「違う、私の為にだ。彼女と生きたかったが為だけに、私は」

楓は動け、動けと足を叱咤する。

きつく目を閉じた彼の胸に細い腕を回して、楓は強く抱きしめた。

「あなたはパパだよ。ここにいて？ 私のそばにいて。お願い、ママの為でいいから」

「楓ちゃん、ずっと黙っていて悪かったね」

「ううん。だつてきつと、パパが一番苦しい思いをしていたんだもん。ごめんね？ 私、気付かなくて。あなたの子供じゃなくて。ごめんなさい」

顔を上げずに、それでも抱きしめてくれるのを、楓は待った。
いつもみたいにはいかないが、震える手が楓の頭に、優しく触れる。

「大好きだからね、パパ」

「ありがとう、楓ちゃん」

部屋には、ただ静寂が横たわっている。

ひやりと感じた空気も、今では温かい。

楓が冬特有の冷えた空気にくしゃみをして、二人が我に返るまで、親子である事を噛みしめ、確かめ合うかのように、ただ静かに抱きしめ合っていた。

来訪者

黒い扉が開かれ、すぐ横に座っていたコマは、中から頭を出した楓を静かに見つめる。

その視線をまっすぐに見つめ返し、彼女はいつもと変わらぬ笑顔に向けた。

コマは楓の様子を伺うが、愁いも怒りも彼女からは感じられない。むしろ柔らかくなった印象に、楓父との話し合いは、うまくいったのだろうと納得する。

「楓、オレは……」

「いいの。でも、一つだけ聞かせて？」

一変して固い表情で聞いてくる楓に、コマはうなずいた。
口を一文字に結んでから、楓も小さくうなずく。

「コマさんは、私を食べたいと思う？」

「……は？」

何を言われたのか、何度も繰り返し考えるが、質問の意図がつかめないコマ。

だが彼女が真剣に聞いてきたという事だけは分かる。

「楓を食べる意味が分からない」

「もし、意味があつたら？」

更にたたみかけてきた楓に、コマは目を丸くする。しばらく視線を交わした後、小さく息を吐いた。

「オレは、楓を食いたいなどとは思わない。ってゆーか、楓はオレを食いたいのか？」

「え？　だって、食べる理由がないし」

「理由があつたら？　オレを食わなくてはならない理由があれば、どうだ？」

考えもしなかったのだろう。驚きとまどいに、茶色の瞳が小さく揺らぐ。

目をそらさないコマに、楓も小さく息を吐いた。

「そつか……私も食わたくないよ。ごめんね？　変な事聞いて」

そつとコマの頭に手を置いて、嬉しそうに微笑した。

「寒い中、待たせちゃったね」

「大丈夫だ。オレには毛皮がある」

「じゃあタオル持つてくるから。コマさんは玄関で待つてね」

楓が大きく扉を開け、中に入ろうとしたコマの鋭い嗅覚が、人外の匂いを捉えた。

鼻で楓を家の中に押し込め、コマは全身を使い、外から扉を閉める。

中から騒ぐ声が聞こえたが、開けられない所を見ると、楓父が彼女を抑えてくれているのだろう。

コマは扉を背に、どんな角度から攻撃を仕掛けられてもいいように姿勢を低くした。

「あんた、誰だい？　見ない顔だね」

頭上からハスキーな女の声が聞こえ、コマは見上げるよりも早く、

その場から跳び退いた。

家が振動で揺れるほどの轟音に、コマは瞬時に振り返り、砂埃の真ん中からゆらりと立ち上がる金髪の女に唸り声を上げる。

「出て行け！」

猫科特有のツリ目を大きく見開いた金髪女は顔を歪め、悲鳴をあげて門外に跳びすさった。

肩を怒らせた金髪女は、すらりとした長い足に履いているロングブーツの高いヒールを、苛立たしげに塀に打ち付けた。

黒のハイネックに、首回りにファーの付いている茶色の皮ジャケットを上からはおり、ショートパンツを身につけた、グラマラス迫力美人。そんな金髪女が獰猛な大型獣の唸り声を上げ、怒りに満ちた声で叫んだ。

「よくも、よくもこのあたしを追い出してくれたね！ お前こそ、そこを出な！」

「何を……」

コマはここに来た当初の いや、それ以上の重圧で全身を引きちぎられる激痛に堪えながら、彼女と同じく門外へ逃げた。

それでも家が真近にあるせいか、気持ちの悪さは否めない。

「さあて、骨までしゃぶってやるから。覚悟しなよ」

「手加減してやるつもりはないが、立ち去れば追わない」

獲物を前に、舌なめずりをする金髪女は、コマの言葉に嘲笑した。鋭い爪をコマに向け、牙を見せるように口の端を持ち上げた。

「甘いねえ、あんた。獲物なんて狩って当然だろ？ さあ、あたし

の糧になりな！」

「やめて！」

楓の声が響き渡る。

コマと金髪女は、楓を見る事なく、同時に叫んだ。

『楓！ 出てくるな！』

そして、お互い訝しげに眉をひそめる。

二人の言葉など聞かず、駆け寄ろうとした楓の肩を楓父が抑えた。そんな彼が、酷く冷淡な声をかけてくる。

「お前達は、楓ちゃんを呼び捨てにしたあげく、外に出すつもりか？」

「だけどき、こいつが……」

「今、私は何と言った？」

「……わかったよ」

金髪女が不満を口にしたが、爪を人のソレと同じものに戻した。彼女なりに停戦の意思を示したのだろう。

いまだ臨戦態勢を解かないコマを、つまらなそうに青い瞳を細め、眺めてきた。

そして、もう一度コマに向けて声をかけてくる。

「それで？ あんた誰よ」

「何故、名乗る必要がある」

「コマさんよ。私がこの間、拾ってきたの」

「楓！」

慌ててコマが楓を諫めると、楓父がいつの間にかコマの傍らに立

ち、ゲンコツを落としてきた。

石頭をしているコマだが痛いものは痛い。目を細めて、痛みに耐えるコマを哀れむ瞳で見やりつつ、金髪女は楓父にノドを鳴らして擦り寄る。

「あたしがあんに頼まれた仕事をちゃんとこなしてる間に、なんでこんな野良犬引っ張り込んでるのさ」

「お前とて、野良猫だろう。楓ちゃんに救われたのなら、責務を果たすのは当然だ」

楓父が右手で彼女の顔をつかみ、引き離す。

離された手をつかむのに失敗した金髪女は、つれない彼に猫目を光らせた。

「ちえつ、相変わらずだねえ」

「おかえりなさい、ネキさん。コマさんは新しい仲間だから、仲良くしてね？」

「はあ？ こいつとかい？」

門の中から声をかけ、にこやかにうなずいてくる楓に、ネキと呼ばれた金髪女は目を丸くした。

「二人とも、寒いでしょ？ 早く中に入って」

「わかった」

「へえ？ 楓様、印象が変わったね。あんたのせいかい？」

敷地に踏み込みながら、ネキは面白そうにコマの頭やら背中やらをつつく。

時折、爪を立ててくる彼女を牽制するように牙を向けるが、返事をするでもなく押し黙る。

「ふん、まあいいさ。あたしの狙いは、あの人だけだし」

「人外が興味を持つのは、楓様なんじゃないのか？」

「あの娘は、あたしのタイプじゃないのさ。それじゃ、やっぱりあんなも楓様狙いのクズかい？」

「違う」

振り返る事もなく即答するコマに、ネキは吹き出した。

「何が違うんだい？ あんただって人外じゃないか」

「オレは、オレだ。見境なしに襲うバカと同じにするな」

「へえ？ あたしと似たような話するヤツなんて、初めて見たよ」

コマに興味が出たのか、更につく回数を増やしてくるネキ。

無視を決め込んで歩みを早めると、楓が複雑な表情でコマとネキの掛け合いを扉の前から眺めている。

「コマさん、もうネキさんと仲良くなっただね」

「仲良くなかない」

「そう？ 楽しそうだけど？ 良かったね、仲間が出来て」

楓が発した棘とげのある言葉に、コマは少しうろたえた。

仲が良いとは、どこを見て言うのだ。そう反論したかったが、無言で扉を開けられ、中に入るようにながされると、言う機会を失ってしまった。

「初々しいねえ。めんどくさいけど」

ネキは笑い、楓父の元にヒールの音を響かせる事なく駆け寄った。足拭きマットの上で座り込んだコマが、気付かれないように嘆息

したというのに、楓にくすりと笑われた。

「待ってて、タオル持ってくるから」

「すまない」

「いいの。私が飼い主なんだから」

その言葉を聞きつけたネキは、またしても盛大に吹き出した。
楓が不思議そうに首をかしげ、ネキに声をかける。

「何？ 何かおかしかったかな。ネキさん」

「楓ちゃんが、おかしい事言うわけじゃないか。大丈夫だよ。
ネキの頭がおかしいのだ」

「そう？」

反対側に首をかしげた後、洗面所へと消える楓。

楓父が笑顔で対応し、彼の細い指で即座に首を後ろをつかまれた
ネキは、蒼白になって硬直している。

ネキは助けを乞うまなざしをコマに送った。しかしコマは目をそ
らす。

「精神的な恐怖と、肉体的な苦痛。どっちがいい」

「ごめんなさい、どちらもイヤです」

「……私は、どちらがいいのか聞いている」

タオルとブラシセットを抱え戻ってきた楓が、彼に向かって声を
かけた。

「パパ。仲良しだよ？」

「……分かっているよ、楓ちゃん」

首を解放されたネキが、おそろおそろ振り向くと、笑顔の彼の目は、雄弁に物語っていた。
『次はない』と。

サイシツケ

楓がコマの足を拭いてやっている間、首をさすりながら開口一番、ネキは楓父に声をかけ、ヨレヨレの紙の束を渡した。

「そついやさ、またこの家に興味を持つてるヤツがいるんだよ」

「人間か？」

「そうだね、特に人外の気配はなかったけど。裏はまだとれてない」
渡された紙に目を細め、楓父はネキに向かって紙の束を投げつけた。

「こんなミミズがのたくっている文字など読めるか！ 書き直せ」

「ええ！ これ以上キレイになんて書けないって」

慌てて紙を拾い集め、頬を膨らませながらぼやくネキ。

そのまま差し出された、先程よりも更にシワが増えた紙の束に、楓父は大きく舌打ちをする。

「楓ちゃん。もう一回だけ、この野良猫に文字を教えてあげてくれるかい？」

「一ヶ月前までは、ちゃんと出来てたけど……」

彼の手元をのぞき込み、楓は凍りつくように動きを止めた。

楓は大きな目を細めて、ネキを見る。

なぜか胸を張り、腕を組んで褒めてもらいたそうな顔つきのネキ。

「ネキさん？ これは、何？」

「何って。日本語さ！ どうだい？ 崩し書きって言うんだってさ」

誰に教わったかは、この際、問題ではない。

楓は強く目を閉じて、何かをやり過ぎしていた。

そんな楓の頭を優しく撫でながら、楓父は申し訳なさそうに声をかける。

「楓ちゃん、二度手間になってしまって悪いね。私はこれを解読してくるから」

「ううん、いいの。頑張る」

今までの時間が全て、無駄。

そう顔に浮かべながら、楓は深くうなずいた。

それを健気な姿と受けた楓父は、強く抱きしめる。

「なんて良い子に育ってくれたんだ。楓ちゃんは、優しい子だね！」
「うん。ありがとう」

そつと楓から身を離れた楓父は、ゆっくりとネキへと振り返った。びくりと体を震わせ、叱られた小さな子供のように、ネキが肩をすくめる。

「ネキ。今度、楓ちゃんが教えた文字と違う事を書いた時は、命はないものと思え」

「い、命までかい!？」

「何か文句でもあるのか？」

渋々引き下がったネキを無視して、彼は暗い奥の自室へと消えた。楓が置いたのだろう、コマのいつもいる場所に、バスローブが綺麗に広げられている。

小さく息を吐きながら、コマはその上で座り、いつでもネキに飛

びかかれる姿勢で待機した。

「崩し書きの方が、カッコイイだろ？ 書くスピードも早いしさ」
「誰にでも読める文字じゃないと、書く意味ないでしょ？ 大体、ネキさんは自分で書いたアレ。読めるの？」

「……そりゃあ、読めるさ」
「本当ね？ 今からパパに一枚貰ってくるから」

楓の言葉に、ネキはびっくりと体を振るわせる。
それを半眼で見やり、楓は机を派手な音を立てて叩く。机に乗っていた一輪挿しが揺れ、赤いバラがくるりと回った。

「ネキさん。自分にも読めない物を、パパに渡したの？」
「……だって、教えて貰いながら書いたんだよ？ 槇原様なら読めると思うじゃないさ」
「自分でも、読める文章を、書く！」
「……はい」

図体の大きな女が、小さく可憐な少女に叱りつけられていて、しかも負けている。

コマの苦笑が、ネキの耳にも届いた。

「野良犬が！ 何、笑ってるんだい！」
「今、コマさんは関係ないでしょ。座って、今すぐ」
「……はい」

いつも静かなリビングが、とてもぎやかなものとなっている。
女性の声だけが響いているせいか、華やかで明るい。ただ、内容だけは決して華やかではないが。

厳しい声が飛び交ってはいるが、いたって平和な光景に、コマは

ゆつくりと身を伏せた。

大きな顎あごを床につける寸前、異質な風が部屋に吹き荒れる、コマは毛を逆立て一足飛びに楓を庇かばうように飛びついた。

ネキも椅子を蹴倒して、厳しい表情で身構える。

瞬間、楓父の部屋から激しい爆音。

部屋の空気を全て吸い込むような暴風が、楓父の部屋へと向かう。

「パパ！」

コマに覆いかぶされ、机に押し付けられている楓が、必死にコマをどかせようと身じろぐ。

「ネキ、代われ」

「嫌だね。槇原様の寵愛を受けるのは、あたしだよ！」

楓の細い首元に咬みついて動きを止めるわけにもいかず、狼の形態のまま押さえつけるのは、なかなかに難しいようだ。

ネキは、その様子を見て口の端を大きく持ち上げ、コマの耳に口を寄せた。

「イイ格好してるじゃないか。こっちはあたしに任せて、もっと楽しみなって」

「誰が、何を楽しむのだ？」

意外と近くから聞こえた男の声に、ネキは飛び上がる。いつの間にか吹き荒れていた風は収まり、乱れた家具も元通りになっていた。

静まり返った部屋は、何事もなかったと主張している。コマが押し付ける力を緩めると、楓は彼に駆け寄った。

「パパ、怪我はない？」

「大丈夫だよ、楓ちゃん。心配してくれて、ありがとう」

楓を抱きしめた楓父がネキへと向けた表情は、とてつもなく冷酷なものだった。

しかしゆつくりと笑顔を作り、楓から身を離す。

「楓ちゃん、部屋にいなさい」

「……うん」

奥歯を噛みしめた彼女に、楓父は片膝をついて視線を合わせ、楓の頬にそつと手を添えた。

「これは楓ちゃんのせいではないだよ。大丈夫、安心しなさい」

「でも、私がいなかったら、絶対にこんな事起こらない」

「これは、ネキが持ち込んだ物のせいなのだよ。楓ちゃんのせいでは決していない」

小さくうなずいて、楓はコマの首輪をつかんで階段を上がった。階上の柵越しに、楓はふと階下を見下ろした。

「パパ、ネキさんに酷い事しないでね」

「大丈夫だよ。楓ちゃん」

笑顔で手を振る楓父にうなずいて、部屋の扉を閉めた。即座にネキへと向き直った楓父は、怯え竦んだネキの首へと右手を伸ばす。

「ネキ、お前に『仕込んだ』奴は誰だ」

「はあ？ 何の話だい？」

「白を切るつもりか、洗脳されたか。どちらでも構わないが」

楓父が指に力を入れると、瞬く間にネキの顔から血の気がひく。その手から逃れようと、彼の腕に爪を立てようとするが、傷一つつかない。

「知らない！ 仕込んだって……」

「お前に、文字を教えたのは誰だ」

「楓様だろ？」

もう少しだけ力を入れたが、ネキは『分からない』の一点張りだ。泡を噴いて気絶した彼女を、音がしないよう静かに床に下ろす。楓父は目についた一輪挿しからバラを取り、花びらを一枚手にした。

「さあ、自白の時間だ」

階下へおりてきたコマは、床にへばりつく形に戻っているバスロ
ーブに座る。

酷く恐ろしい表情で口を笑う形に歪ませた楓父に、見ない振りを
決め込み、コマは背を向けて丸くなった。

以前、コマに酷い仕打ち いや、シツケをした時と同じ表情だ。
関わっては、こちらにも火の粉が いや、燃え盛る炎に放り込
まれるのと、同じ事になる。

コマは力を込めて、目を閉じた。

彼は言った。ネキが持ち込んだ物のせいだ、と。

ならば、彼女には償う義務と責任がある。

例えそれが、自分の意思ではなかったであろうとも。

背後から聞こえてくる、意識を取り戻した彼女の悲鳴に、コマは

毛を逆立てて身震いをした。

尋問

直立不動で身体が固まったように動かないネキ。その眉間に一片ひつらの赤い花弁をつけられて、苦しそうに身を震わせている。

冷酷な笑みを浮かべたまま、楓父はもう一片花弁を取り、振り返った。

視線の先には、こちらを見ようとせず、我関せずを貫いている灰色の獣。

それでもせわしく耳を傾けて警戒している彼に、楓父が音もなく傍らに寄った。

「……！」

コマが耳に感じた小さな痛みに頭を上げた時には、一滴の血を採られ、それを擦り付けられた花弁からは黒い煙が上がっていた。

煙の中で、歪み変化する。煙が消えた時には赤黒く怪しい光を放つ小玉となって、楓父の手に納まっていた。

「さて。自分で語れないのなら強制になるが。どうする？」

「わ、分からないものは、言いようが……ないだろ」
「そうか」

楓父が玉を手に乗せ、ネキの方へと差し出す。

コマの頭上、黒い扉の表面が盛り上がり、異質な空気を振りまきながら蝙蝠こつもとりが生まれた。

闇の色に染まったソレは、玉をくわえるやネキの額にある花弁へと一直線に飛ぶ。

すでに治りかけている耳を気にする事もなく、コマはその様子を見守っていた。

彼女の絶叫とともに、蝙蝠は黒い霧となって消え、花弁が玉を包み込み、彼女の額へと埋め込まれていく。

「楓様に、怒られますよ」

「お前達が言わなければ、分からない事だ」

コマのつぶやきも、失笑とともに流された。

結構な騒ぎの中、楓が出てこないのは楓父の仕業だという事も、以前のコマへの『シツケ』で確証を得ていた。彼女には、この騒ぎが届いていないのだ。

「ネキ。書類を書いたのは、誰だ」

「あたしだよ」

目の色には覇気がなく、虚ろである。

楓父の言葉に、震える声でゆっくりと返事をするネキ。

「書かせたのは、誰だ」

「名前は、知らない。女、で、黒い長髪の……病気、みたいな白い肌。気持ち悪い、赤い唇」

「どこで書いた」

「北の港……黒い、車の中。楨原様を、あたしのモノにし、て、くれ……るて……」

脳の限界が近いのだろう、彼女の身体の震えが大きくなる。

楓父が舌打ちをすると、ネキはその場に崩れ落ちた。

赤い花弁だけが一枚、ひらりと床に落ち霧散した。

「コマ。水でもかけて、起こしてやれ」

「……はい」

薔薇を手にしたまま、楓父は奥の部屋へと姿を消した。
それを見届けてから、コマは形態を人へと変化させる。バスローブをはおり、ネキへと視線を向け、小さく息を吐いた。

「起きる事が出来るか？ 無理なら、水をかける事になる」

「……お、鬼だね。ホントに。放つといておくれよ。あんな事されて、すぐに回復するほど、あたしは強く、ないんだよ」

「話せるのなら平気だな。人の姿で床に張り付くのは、見ていて気持ちの良い物じゃない。姿を変える事が出来るのなら、獣になつておけ」

水を汲む必要がなくなり、コマはまた狼へと戻った。

指先一つ動かせないほど疲弊している彼女は、小さく唸りながらも、大型獣へと変貌を遂げた。

金色の毛並みに、黒の縞模様。コマよりも大きく美しい毛並みをした、虎。

匂いで分かつてはいたが、初めて見るその形態に、コマは息を呑んだ。

大きな頭を床から離す事なく、宝石のように透き通った青い目を細めて、ネキは薄く笑う。

「なんだい。見惚れたのかい？」

「それはない」

きつぱりと言うコマに、さすがにネキが抗議の声をあげかけた時、楓部屋の扉が勢い良く開いた。

「ネキさん！ 平気？」

階上の柵に寄りかかって叫んでくる楓に、ネキは返事の代わりに太い尾を一度動かした。

ゆっくりと足を引きずりながら階段をおりてくる楓を、いつものようにコマが見守る。

彼女は、寝そべっているネキに歩み寄り、大きな金色の頭を優しく撫でた。

「ネキさん、大丈夫だった？ 酷い事、されなかった？」

「……大丈夫さ。少し疲れたから、ここで寝てもいいかい？」

青い目だけで楓を見返して、ネキは息を整える。

楓は大きくうなずき、コマの下に敷かれているバスローブに目をつけた。

「コマさん、ごめんね？ バスローブ借りてもいいかな？」

「ああ。ってゆーか、元々オレの物じゃないしな」

青いバスローブを、ネキの上にかけてようとすると、彼女はさすがに唸り声をあげた。

「やめとくれ！ そんな犬っころの匂いがついた布なんて、まっぴらごめんだよ！」

「大丈夫よ。毎日洗ってるし、さっき取り替えたばかりだから」

「いーやーでーすー」

息を荒くして、巨大な虎は大きな牙を剥き出しにした。

本当に咬みつくという事は考えられないが、疲れている彼女に無理強いも気が引け、茶色の瞳を困ったように細める。

コマは、小さく息を吐いた。

「元は、槇原様の所有物だぞ？」

「それ本当かい？ ……だまされないわよ。槇原様の匂いなんて、しないじゃないさ」

「……普段でも、匂いのあるヒトではないだろう」

その言葉に、ぐっと詰まる。

コマは、もう一声かけてやった。

「ってゆーか、楓様を困らせたなら『シツケ』されるぞ」

「……………分かったよ」

もう言葉を話す事すら億劫になったように、巨大な虎は目を閉じて諦める。

そつとバスローブをかけた時だけ、毛を逆立てたが、何かを言い返す事はなかった。

もう一度、小さく息を吐き、灰色の獣は話を変えた。

「楓様、少し興味があるんだが」

「何？」

普段から高いわけではない声のトーンを、更に低くし、ショートボブの黒髪を揺らして首をかしげた。

「オレの名を『コマイヌ』から取ったように、ネキも何かあるのか？」

聞かれる事はないと思っていたのだろうか、楓は目を丸くしてから、少し訝しがるように顎を引き、うなずく。

「ネキさんを見つけた時に、小さな招き猫が落ちてたの。コマさん、知ってる？ 招き猫の置物」

「……いや、見た事はない」

「そう。もう落ちてないかもしれないから……今度、見かけたら教えてあげるね」

「いや別に……ああ、その時はお願いします」

楓父が消えた部屋から、物凄い重圧を感じ、背筋を凍らせながら、慌ててコマはうなずいた。

その様子に、楓がくすりと笑う。

「どうしたの？ 変だよ、コマさん」

「これが、オレだからな」

人型であれば、冷や汗が止まらなかっただろう。
早鐘のように打つ心臓を^{まだ}宥めながら、コマは空気が変わる事を願いながら、尾を三度ほど振り回した。

「コマさんは、ネキさんの事が気になるの？」

唐突の質問に、金色の瞳で楓を凝視して、今度は彼が小さく首をかしげる。

彼女の意図がつかめずに黙れば、楓の表情がゆつくりと不快を表した。

「やっぱり。人間のネキさん、綺麗だもんね。虎になっても、すごく綺麗だし」

「……そうか」

楓の心中を押し量りながら、無難な返事をしたはずが、不快とい

う文字が色濃くなっただけだった。

コマは、幾分焦りを浮かべ、きつちりと座り頭を低くする。

「ってゆーか。楓様の聞きたい事が、いまいち分からない」

「もーいいよ！ 今日のコマさん、冷たい床で寝てればいいんだよ！」

階段をのぼる手伝いを申し出たコマ。

しかし、それを楓はぴしゃりと断り、部屋に入る時にも振り返る事はなかった。

冷たいと言われた床とて、外の生活に慣れているコマにしてみれば、まだ温かい。

もう奥の部屋からの重圧は、なくなっていた。

灰色の頭を小さく振って、コマは溜息を吐いた。

ただ目を閉じていただけだったのだろう。ネキが、ノドをくつつと鳴らして笑った。

「……つたく、バカだねえ。少しは女心を勉強するがいいさ」

「お前と話をすると、楓様の機嫌が悪くなる事は分かった。特に用事がない限り、オレに話しかけるな」

「はいはい」

ネキは楽しそうに青い目を細め、ノドを鳴らして笑った。

いつまで？

静かな寝息を聞きながら、コマも定位置で丸くなる。目を閉じれば、北風の高く低く泣く声が耳についた。静寂を保つ空間は、コマの感覚を鈍らせる。

「いつまでここにいた方がいいか」

そう自問する声に、答えは見出せない。

楓から離れられるものか、と言った楓父の言葉を思い出し、奥の扉に目をやれば、待っていたように音もたてずにゆっくりと開く。

「コマ。お前に仕事だ」

「オレが、ですか」

「この家の様子を窺う人間がいるようなのだ。その真意を探れ」

唐突に言ってくる楓父に、コマは小さく首をかしげた。

楓を守る事が仕事だと言い、今回は楓から離れても構わないと言
う。

だが結局は、どちらも彼の命令に違いはない。

コマは逆らえるわけがなく、うなずくしかなかった。

「いつから、どの形態で？」

「その時がきたら分かる。それまでは高貴な狼を気取っているんだ
な」

口の端を持ち上げて笑い、楓父は部屋へと消えた。

ネキが持ち込んだ情報からなのだろうか、コマはとにかく運動不足気味な身体を伸ばし、大きく振るわせた。

楓部屋の扉を眺め、目をそらせば大きな凶体で横になっている巨虎。

奥の部屋には、得体のしれない生物。

「オレは、この家に入り込み過ぎてはいないか？」

誰も答えてはくれない。

無言で考えを巡らせても、答えはでない。

弱々しく頭を振った。

「ああ、バイト先にやめると伝えなくてはいけなかったな」

籐のカゴに入れてある服がある事を確認して、人型に戻る。
服を身に着けてから、楓の部屋をノックした。

「楓、コートを貰えないか？」

扉の隙間から楓が覗き、人型になっているコマを見て、眉間にシワを寄せた。

大きく手前に扉を開けると、黒いロングコートを手渡しながら、訝しげに聞いてくる。

「どっか行くの？」

「店にバイトをやめると伝えてくる」

「電話じゃダメなの？」

「失礼な態度を取れば、後々までこんな奴がいた、となりかねない。
人の中に存在を残したくないからな」

突然の辞職ともなれば、電話であれ直接であれ、失礼である事は
変わらないのだが。

コマは真剣だった。

楓も小さく息を吐いて、

「分かった。やめるの、私のせいでしょう？ 私もついて行く」

「いや、大丈夫だ。すぐに戻る」

「コマさんがどんな所で働いていたのか、ずっと興味があつたんだ。ダメ？」

断ればまた機嫌が悪くなるのだろうか。コマは困った顔で言う。

「槇原様の許可があるのなら、連れて行こう」

「ホントに！」

楓の顔が輝いて、コマは戸惑う。

やめるようなバイト先に連れて行くだけの事が、どうしてそんなに嬉しいのか、コマには分からない。

腕を借りて階段をおりる楓は、すでにオレンジ色のコートを身につけている。

「パパ！ パパ、ちょっと出かけてくるから」

軽くノックをすると、扉が開き変わらない暗闇の中から、楓父が姿を現した。

コートを着た人型のコマ。同じく楓を見て、首を振る。

「ダメだ」

「どうして？」

「三人組に襲われた事を忘れたのかい？ 今日は家にいなさい」

「明日ならいいの？ 明後日なら？ ずっと怯えて暮らすのは、イヤだよ」

言葉に詰まる楓父は、またしてもコマを手招きした。
楓から少しだけ離れた場所で彼女に背を向け、男二人は肩を寄せ合う。

「……何の用があるのだ？ 楓ちゃんよりも大事な用事だろうな」

「バイトを断りに行こうかと」

「電話で十分だろう」

「いえ、店長が前に言ってたんです。急にやめるのはもつてのほかだが、更に電話辞職など、許せない。と。ずっと人の頭に残るのは困りますし」

怒りに顔を歪めた楓父に、コマは大きな身体を出来るだけ小さくした。

楓父が眉間に手をあてながら、珍しく提案してくる。

「私が特別に、区域一帯の記憶操作をしてやる。楓ちゃんを外へ出そうとするな」

「いや、しかし」

「他にも何かあるのか？ 私の提案を蹴ってでも、大切な事が。いい度胸をしているな」

闇色の瞳が、赤く光る。血のように深く、危険をはらむ色。

コマの脳神経が危険信号を発すると同時に、慌てて首を横に振った。

ゆっくりと振り返ったコマは、複雑な表情で楓に声をかける。

「用事はなくなった。手伝うから、部屋に戻るといい」

「どうして？ そんなに私をお店に連れて行きたくないの？」

「いや、行かなくてもよくなったのだ。槇原様が協力してくれてな」

声にならない悲鳴をあげ、驚きに目を丸くして楓はコマの隣に視線を移した。

いつもの黒い瞳を細めて、楓父は笑っている。

二人の男を交互に見やり、楓は声をしぼり出した。

「パパ、熱はない？」

「心配してくれるのかい？ 大丈夫だよ、楓ちゃん。コマに協力したら、楓ちゃんが喜んでくれると思ってね」

「うん、嬉しいよ。でもコマさんのお店も見てみたいの」

真剣な表情を崩さない楓に、楓父は決して首を縦には振らなかった。

「いいかい？ 楓ちゃんは今日、得体の知れないモノに襲われたんだよ？ 危険が去ったわけじゃない。今日はおとなしくしていなさい」

「もう危険な目にあったもの。今日はもう大丈夫だよ」

「駄目だ、部屋に戻っていなさい」

珍しく楓に厳しい口調で言う彼に、コマは悪くなる一方の空気に手の打ちようもなく、そつと息を吐く。

歯を食いしばって怒りを堪えている楓は、それでも身を翻して階段に向かった。

楓父も、無言で奥の部屋へと姿を消した。

「……手を貸そうか」

居たたまれずコマが声をかければ、楓は振り向きもせず、うつむいて低い声を出す。

「私が、コマさんの飼い主なのに」

「そうだな」

「……じゃあなんで、コマさんはパパの言う事ばかり聞くの？ おかしいよ！」

「犬は、人間サマの言う通りにしておけば良いとでも？」

感情を排した声が酷く心に刺さり、楓は慌てて階下を見下ろした。声と同じくらい無表情で佇む彼が、獰猛な獣が威嚇するように、金色の瞳を冷たく光らせている。

気持ちの悪いくらい、静まり返った白い空間。

先に凍りついた空気を破ったのは、コマだった。

「悪かった。オレは楓に助けられたんだっただな。リーダーに従おう。

どこに行きたい？ 望みのままに連れて行こう」

「違う、違うよ」

「何が違う」

コマは階段の途中で動けなくなってしまった楓に、手を差し出した。

複雑な感情が、楓の顔に浮かんでは消える。

ショートボブをさらりと揺らして、首を横に振った。

「ごめんなさい。私、飼い主じゃなくてもいい。コマさんは友達だよ、大事な友達」

「ってゆーか、犬にはリーダーが必要なんだ。楓なら安心だ」

「でも、イヤだ。私がコマさんの自由を奪ってるんでしょ？ 本当は出て行きたいんでしょ？ 時々、そう思うの。コマさんは、自由にしていいんだよ」

真っすぐな茶色の瞳に、コマは目を丸くした。

そんなにも分かるくらい表情に、態度に出していたのだろうか。彼は、思わずといった調子で苦笑する。

「野生としては、致命的だな」

「この家にいる事が？」

「いや、違うよ。オレ自身の事だ」

分らないと首をかしげた彼女に、コマは笑った。その笑顔に、楓も安堵の表情を浮かべる。

「コマさんには、ずっとここにいて欲しいけど。本当にコマさんの好きなようにしてね？」

「大丈夫だ。まだここから出ようとは思っていないからな」

差し出したままのコマの手を取った楓は、そのまま抱き上げられる。

「それで。店に行きたかったんだよな」

「うっん、それはもういいよ。今日は部屋に戻ってなきゃ。明日、また散歩に行こうね？」

「ああ、分かった」

至近距離でふわりと笑われ、コマも口角を少し持ち上げた。

本来なら、楓のリハビリに補助として手を貸すだけなのだが、抱き上げたまま階段をのぼる。

楓部屋の前でおろし、コマは黒のロングコートを手渡した。

「何かあれば、声をかけてくれ」

「うん。ありがとう、コマさん」

コートを握りしめ、楓の嬉しそうに笑う姿が、細められた金色の瞳に映っていた。

強弁

次の日には、ネキさんはいつものように人型に戻り、パパに媚こびを売っていた。

獣の特性として回復力は早いが、コマさんやネキさんのような獣人と呼ばれる人は、その上をいく早さで完治する。

何事もなかった振る舞いは出来るものの、恐怖心は消える事はない。

だが彼らは根底にある恐怖に縛られる事はないようだ。

強きょうこうしん靱な精神力で支えられるのは、永い時間の中で息を潜め、身を隠し、抗ってきた成果であると言えるだろう。

「……楓様。それは何だ？」

「え？ これ？ ネキさんとコマさんの記録」

「何の意味がある？」

分厚い辞書を広げながら、楓は何度も消しゴムをかけながらノートに書き込んでいた。

コマやネキをちらりと見ながら思い出したように書き込む為、さすがに気になったコマが声をかけたのだ。

彼女は少し首を竦めて、悪戯がバレた時の笑顔を作る。

「漢字の勉強にもなるんだよ。私、学校行ってないから自分でやらなきゃ」

「そうか。ってゆーか、俺や虎女の事を書いても楽しくはないだろう」

「そうでもないよ。書く事で、何か私でも出来る事が見つかるかもしれないし」

「楓様は、何がしたいんだ？」

コマは楓の傍らに座り、ローテーブルにあるノートを覗き込んだ、小さな手はさりげなくノートを閉じる。

文字を見ても読めはしないのだが、その行動に違和感を感じて灰色の獣は小さく唸った。

「見ても分からないが、俺に見られると困る内容か？」

「……そんな事、ないけど」

楓は少しだけ視線を泳がせたが、観念してコマへと視線を戻す。

「だって日記を人に見られたら恥ずかしいでしょ？」

「そうなのか。日記って何だ？」

「えーと。その日にあつた大事な事とか、自分が思つた事とかを書くの」

「……そうか。大変だな」

緩やかな永い時間を生きているコマには、考えられない事だ。

野生として生きてきた彼にとっては、その日を生き抜く事こそが大切で、書き留めておくなど自分の足跡を残すようで、意味が分からない。

しかし、不意に襲われる天敵もなく建物に守られている人間と、激減した森や林に身を隠しては、減る事を知らない人間や魔物に追われるコマ達を比べる事こそ意味がないだろう。

彼らとは根本から違うのだ。それに悠久の時をノートに書き込む事を考えると、どれほどの紙の束を持ち歩かなければならないのか。コマは何かを振り払うように、首を振った。生きる術など、自分の身に叩き込めばいい話だ。

「どうしたの？」

「いや、何でもない」

「あのね、私のせいで皆が戦わないといけないのが、すごく嫌なんだ」

「それぞれに役目がある。気にする事はない」

それでもショートボブを左右に揺らし、強い光を湛えた茶色の瞳はコマを見据える。

「私だって、何か役目があるはずでしょ？　だったら、皆の役に立ちたい。もう見てるだけじゃ、助けて貰うだけじゃ嫌だよ」

「そうか。じゃあ何が出来そうだ？」

「……まだ、見つかってないの」

コマの言葉に、楓は動きの鈍い自分の足を見つめ考え込んだ。

白いソファに身を沈めながら、奥の部屋から閉め出されたネキの情けない声を聞く。

母親譲りの光があっても、使い方なんて分からない。

「使い方が。パパが何か分からないかな」

背もたれから身体を離して、立ち上がる。

それを待っていたかのように、呼び鈴が家中に響き渡った。

近所の奥様が回覧板を持って来るくらいしか、滅多に鳴らない呼び鈴に、コマも立ち上がる。

「斉藤さんかな？」

「楓様は、ネキのそばにいるんだ。俺が出る」

「……その姿で？　大丈夫、コマさん心配しすぎだよ」

「ダメよ。楓様は、ここにいろの」

楓父に袖にされたネキが、後ろから抱きつく。

「ごめんください。と、どっしりした黒い扉の向こうから低い男の
声が聞こえてきた。

楓が動けない事を確認し、コマは扉越しに声をかけた。

「どなたですか？」

『ワタシの犬が、こちらに迷い込んだと聞きましたね』

楓の息を呑む音を背後に聞きながら、犬という単語に、コマは眉
間にシワを寄せる。

何か言おうと口を開く前に、いつの間にか隣に出現した楓父が、
笑顔で黒い扉を開けた。

「ご主人ですか？　こちらに灰色の毛並みをした犬がいると聞きま
してね」

「どなたかと、私は聞いたはずですがね」

聞いたのはコマだが、見知らぬ人間の前で文句を言えようはずが
ない。

笑顔で優男に見える楓父に、笑顔の中年男。

貼り付けたと分かる笑顔の応酬に、コマは困り顔で楓とネキを振
り返った。

無言で首を横に振られたが。

「ああ、これは申し訳ない。内田と申します」

「内田さん。我が家の犬が、そちらの飼い犬だったという証拠でも
？」

「もちろんですとも！」

「ごつい手で見せられたのは、一枚の写真。」

興味を示した楓とネキは、楓父の後ろから覗き込んだ。

「何、これ」

「コマだな」

「なんだか、薬品臭そうな場所に見えるわね」

銀色の檻に入れられたコマは、どこか別の場所を見ている写真。

「パパ、近くでよく見たいの。写真貸して欲しいんだけど」

「娘がこう言っているのだが、借りてもいいかね？」

「ええ、もちろんですよ」

二人とも牽制するかのように笑顔で応対をする。

背後に写真を回し、楓は小さな声でコマに尋ねた。

「コマさん、見覚えはある？」

答えようと顔をあげれば、笑顔の楓父の視線を感じ、彼の言葉も思い出す。

渋々といった調子になりながらも、コマは口を開いた。

「……ああ、そうだな」

目を見開き大きく息を吸い込んだ楓だが、声を出す事が出来なかった。

ネキも、何も言わない。

握りつぶしかけた写真をネキが彼女の手から掠め取り、楓父に戻す。

「うそ。嘘だよ」

呆然として、楓は声を何とか絞り出したが、ネキも、コマでさえも言葉を返してはこない。

楓父は写真を男に返し、コマを呼んだ。

灰色の獣はゆっくりと歩を進め、楓父と男の間に座る。

「ダメだよ！ コマさんは、あの写真の犬じゃないよ！ だって、コマさんは犬なんかじゃ……」

「楓ちゃん。どちらを選ぶかは、コマ次第だろう？」

楓の言葉を遮り、彼女の肩を優しく触って黒い瞳を残念そうに細めた。

しかし、怒りの表情で首を横に振った楓は、楓父の腕をつかんで必死に訴える

「あんな檻に入れられた写真を持つてるなんて、おかしいよ！ 本当に大事なら、どうして一緒に写ってる写真じゃないの？」

楓の言う事ももつともだとうなずいて、楓父は内田を訝しげに見つめる。

「娘の言い分が正しい。悪いが、引き取ってはくれないか？」

「悪いが、こちらも娘が大好きだった犬なのでね。簡単に『はい、そうですか』とは言えないですよ。分かっただけは貰えませんか？」

「では、その娘を連れてくるといい」

楓父の言葉に、コマは内心、首をかしげていた。

潜入捜査ではなかったのか。裏に何かいるのかを探るのではなかったのか。

彼に任せておけば良いのだろうが、コマは板ばさみの状況で、た

だ座っていた。

「……娘は、病弱でね。連れ歩けないですよ。ここの所、体調が思わしくなくて、この犬は娘のお気に入りだったから、探していたのです」

この大根役者が。

楓父とネキは、言葉にこそ出さなかったが心の中で毒づいた。

内田がうまく言えばコマを仕込むのも楽であるというのに、ヘタクソ過ぎてそのきっかけにもならない。

しかし説明を聞いてうつむいてしまった楓は、複雑な顔をする。

「でも本物じゃないと、意味ないと思う」

「だから、探しているんだよ。それにこの犬はまさしく娘の犬に違いない」

「じゃあ、その犬の名前は？」

「偶然なのか驚いたんだけどね、コマと言っただよ」

さすがにここまでくると、怪しいを通り越して滑稽だ。

あまりにもお粗末な茶番劇に、楓父は苦笑する。出直してこいと蹴り出してやりたい衝動を我慢した。

出会っモノ

何も言ってこない彼らに、内田はもう一押しだと思ったのか、更に熱弁をふるう。

「コマは、娘が好きだった回る方の独楽こまが由来だね。娘はそりゃあこの犬を可愛がっていたんだよ」
「そうなんだ」

内田が何気なくコマの頭に手を置き、気安く触るなとばかりにコマは小さく唸り声をあげた。
瞬間、よろけた振りをした楓父がコマの尾を踏んだ為、声を即座にかみ殺したが。

真剣な顔で、楓は内田を見つめる。

「コマさんを連れて行くなら、私も行く。少しの間だったけど、飼い主だったんだから、内田さんの娘さんにも挨拶したい」
「ダメだ！」

楓の言葉に、内田が厳しい口調でにらみつけた。

その勢いに怯えたように小さな肩をすくめ、ネキは彼女を後ろから抱きしめた。

張り付けた笑顔はそのままに、黒い瞳を一瞬赤く光らせて、楓父はゆっくりと声を吐き出す。

「私の娘に、そのような汚い顔を見せないでくれたまえ」

「は？」

「ああいや、言い間違えました。人の娘を脅すような態度はどうかと思いますかね」

「そう見えてしまったのなら、申し訳ない。娘は今、集中治療室に
いましてね、家族以外、面会謝絶なんですよ」

これもセリフとして考えてきたのだろうか。言い淀むわけでもな
く、さらりと返してくる。

さすがのコマでも矛盾に気がつき、気づかれないように小さく息
を吐き出した。

「……集中治療室にいるのならば、コマを連れて行く理由にはなら
ないのではないのかね？」

あからさまに呆れた声を出した楓父を、予想の範疇だったのか内
田は鼻で笑い飛ばす。

「どちらにせよ、コレはワタシの犬なのでね。引き取らせていただ
きますよ」

「悪いが、断る」

「では、警察沙汰にしても構わないんですね」

「警察を呼ばれて、困るのはどちらかな？」

内田は穏やかな笑顔を一転させ、尊大な態度をとった。

だが、尊大さではひけをとらない楓父は、長身にモノを言わせ、
切れ長の目を細めて見下した。

「パパ。娘さん、苦しいけど頑張ってるんだよ。コマさんを見たら、
元気になるかもしれない。あの……またコマさんに会わせてくれる
？ おじさん」

「あ？ ああ、もちろんだとも。娘の容態が落ち着いたら、きつと
連絡するよ」

「本当？ ありがとう！」

楓はネキの腕から抜け、ゆつくりとコマに近づいた。
小さく振り返ったコマの横に座って、灰色の毛皮に顔を寄せた。

「……………」

「コマさん？ 私なら大丈夫だから、これから行く女の子の傍にいてあげてね」

「……………」

顔を動かさず、金色の瞳をそつと伏せる。

ほんの数秒の事だったのだろうが、楓が離れた時、心の一部が悲鳴をあげた。

その動揺は、固く目を閉じてやり過ごす。

「またね、コマさん。生きていれば、絶対に会えるんだから」

「……………」

「絶対に、会いに行くから」

楓父が立ち上がった彼女を支えるように手を貸し、楓も震える手が白くなるくらい力を込めて袖を握っていた。

満足気な表情を浮かべた内田は、灰色の首に黒い首輪をはめた。

首輪と太い鎖からは、はっきりと感じ取れる血のニオイ。それでもコマは、引かれるままについて歩く。

振り返る事もなく。

シルバーのバンの前に立ち、内田は喜びを隠す事なくトランクを開けた。

窓には黒い布がかけられており、大きく汚れた鉄製の檻^{ケージ}が、コマを待ち構えるかのようにばかりと口を開けている。

思わず後ずされば、首に鋭い痛みが走った。身体は痺れるが、頭は冴えている。男の仕業だと身を低くして歯を剥き出せば、先程よりも激しい痛みが襲う。

「乗れ」

蔑んだ笑いを含みながら首輪をつかみ、檻へと押し込んだ。

コマは音を立てるほど奥歯を噛みしめ、痺れた自分の身体を呪う。ギラギラと金の瞳を光らせて、男の顔と二オイを叩き込んだ。怒りが身を包み、コマからすればこんな簡素な檻など簡単に破れたが、自分の使命を反芻させ思いとどまっていた。

やがて、車が走り出す。コマさん、と叫ぶ甲高い声は遠くに消えた。

「まったく！　なんて奴らだ。この俺がどれだけ苦労して低姿勢に努めてやったと思ってるんだ。くそっ！　馬鹿にしゃがって！」

煙に包まれるほどのタバコの量と、走り出してからひっきりなしに続く愚痴に、痺れの取れたコマは辟易する。

タバコの二オイは、コマの鼻を刺激し続け苛立ちは増す一方だった。

三時間ほど走った所で緩やかなカーブを曲がり、車は停止した。

トランクが大きく開かれ、コマはひどく安堵する。

鬱蒼とした木に囲まれた、二階建ての白いコンクリートの古い建物。

横に長く作られているそれは無機質で、小さな窓が取り付けられている。

陽が傾きかけ、ほんのりと赤く染まった建物は、鼻屑目に見ても廃屋としかとれない。

白い服を着た人間が三人ほど覗き込み、白髪の四人目が内田に金を支払っていた。

コマは彼らの手で檻ごと降ろされ、そんな彼らに興味を示すでもなく内田は車に乗り、砂煙を上げて消えた。

「へえ。あんなクズでも、本当に人様の家から飼い犬を引つ張ってこられるのか」

「あんなクズだからこそ、だろ？」

「違いねえな」

栄養状態の悪そうな眼鏡をかけた男と、正反対に首がないほど太っている男は下品に笑う。共通点といえば、白い白衣と陽にあたった事などなさそうな、白い肌くらいか。

黒髪を後ろで束ね、同じく檻降ろしを手伝っていた、おそらく戦力にならなかったであろう細腕の女が厳しい声で男達の無駄口をやめさせた。

「誰かに見られたらどうするの！ さつさと中に運びなさいよ！」

「内田くんの言う通りだ。三番の部屋でいいか、運ぶんだ」

白髪の男性に仕切られ、二人は肩を竦めコマを運んでいく。

檻の中に彼らの指が入ってきているが、そ知らぬ振りで大人しい犬を演じる。

建物の中に入った瞬間、コマの鼻は違和感を覚えた。

人や、魔物のニオイとも違うが、普段知っている犬猫のニオイに近くとも遠い。

ざわりとコマの背筋に得体の知れない何かが伝い、警戒を強める。

「こんな凶体なのに、よっぽど人間に懐くように育てられたんだな」

「そりやでかい奴ほど、シツケに力入れるだろうしな」

呆れた声を出す眼鏡の男に、太った男が知ったかぶりで口の端を持ち上げた。

先に行く内田と呼ばれた女がまたジロリと振り向けば、男達は押し黙る。

白髪の男が鍵の束から一本取り出して、小さく「3」と書かれた扉を開けた。

消毒の二オイと、それに混じる『違和感』の二オイ。
コマは思わず顔をしかめた。

正面の鳥かごに入れられている赤いオウム。
せわしなく頭を動かし、身体を揺らす。

太い鳥の足元には、平行に取り付けられている太い木の枝。不自然なのは、四足であるという事実。

「先生、とりあえず角でいいつすよね？」

「そうだな、そこでいい」

電気を消され、外から鍵をかけられた音が聞こえてくる。

小さな部屋には、大小様々な檻が置いてあるが生き物の気配はない。
い。

鳥かごと正面にある、コマが入れた檻よりもはるかに小さい檻以外は。

「新しい仲間だね！ おにーサン、だれ？」

「……名はない」

「そっか、だからここにいらんだもんねー。ボクもそうだよー」

小さな姿の彼は、犬でも猫でもない。まだ子供なのだろう事くら

いは分かる獣だった。

全身は茶色で耳は垂れ、口や鼻の辺りは黒い毛で覆われている。犬のように見えるそれには、猫の尾と暗闇でも光る双眸がついていた。

「何をされた？」

「何にも。ボクは気がついたら一人だったもの」

新参者がそんなに嬉しいのか、彼の猫のような尾を犬のように振っている。

コマは暗闇で光る彼の目を見つめ、ぎりつと奥歯を噛みしめた。

この状況が示すものは、動物実験と生命そのものの禁忌。

彼は猫と犬の『あいのこと』なのだろう。ならば、コマの鼻が嗅ぎ取る違和感にも説明がつく。

「お前一人なのか」

「うん。ギャーサンとボクだよ。最初はいっぱいいたけど、今は二人だけ」

「そうか。いつからだ？」

コマの言葉に、彼は可愛らしく首をかしげ、ギャーサンと呼ばれたオウムを見上げる。

暗闇で鳥目が利くはずもなく、オウムは静かに目を閉じていた。

「いろいろだよ。出てったりー、入ったりー。動かなくなったり！いろいろ！」

「……そうか」

「ほかに？ ほかに何か聞きたいことないの？」

茶色の垂れた耳をコマに向け、しきりに尾を振ってくる。

「この人間はどうなんだ？」

「どうって……ご飯くれるよ。時々注射つてやつで、血を採られるくらいだよ。ほかには？ まだ聞きたいよね？」

「この部屋を出た事はあるか？」

そんなコマの言葉に、彼は意気消沈とばかりに尾を床に垂らした。
「一回だけ。なんか変な箱の前でゴロゴロして終わったよ。ねえ、本当はわかって聞かないんでしょー？」

「何をだ」

心底分らない、という表情を見せたコマに、彼は大きく身体を震わせる。

「もう！ ボクの名前だよ。聞きたいでしょ？」

「興味ない」

「ど、どうしてさ！ みんなそう言うんだよ。ボクは聞いて欲しいのに！」

よっぱど暇を持て余していたのだろう。コマは大きく息を吐き出し、無言で続きを待つてやった。

見つめてくるが何も言わないコマに、彼は嬉しそうに尻尾を立て胸を張る。

「人間はボクを『せーこーれー』って言うけど、長すぎると思うんだ！ だからね？ 『セイ』ってどうかな？」

「いいんじゃないか？」

「ほんと！？ ギャーサンはくだらないって言ってたけど、悪くないよね？」

適当にうなずいてやれば、小さな身体で狭い檻の中を器用にくりと回った。

セイから聞きだせる事は、もうないだろう。彼の世界は、この中だけなのだ。

ゆっくりと伏せ、顎^{あご}を前足の上に乗せる。

逃げる事は造作もないが、その為にここにいるわけではない。コマは、ゆっくりと目を閉じた。

それぞれの思想

夜が明ける前の静寂は、コマの気持ちを穏やかにさせる事は出来なかった。

ヒーターでも入れているのだろう、底冷えするような冬の凍つきはなく過ごしやすいが、狭い箱と前を遮る檻だけがコマの神経を逆撫でていた。

目だけで正面の小さな檻を見やれば、小さく不恰好な獣は何を疑う事もなく、幸せな顔で眠っている。

四足のオウムが入っている鳥かごより、上にある小さな窓には鉄格子がはめられ、コマのどのような形態でも通り抜けられそうではない。いざとなれば、どうしてもなるだろうが。

無用心に廊下を歩く音を聞きつけたコマは、気配を動かす事なく様子を窺う。

足音はコマ達のいる房の前で止まり、大きな音を立てて鍵と扉を開け放つ。

「さて、狼くん。検査の時間だよ」

痩せた男がつまらなそうに声をかけ、太った男が大きく口をあけ、これでもかと欠伸を繰り返している。

「ふふあーあうう、うむ。いいから早くそっち持てよ」

「まったく。先生も時間帯考えて欲しいよなー。年寄りには早起きかもしれないけどさ」

「……早く、そっち持てって!」

渋々、コマの檻を二人で持ち上げる。

こんな大騒ぎで起きない犬はいないだろう。コマはとりあえず頭だけ上げて見れば、セイと目が合った。

猫目の彼は暗闇の中、黒目を大きくさせてそつと囁く。

「おにーサン、戻ってくるよね？」

コマはただうなずいてやった。

だが、それが檻の揺れによるものかは、セイには理解が難しいほどの小さなものになってしまったが。

廊下に出れば、煌々《こうこう》と白く冷たい蛍光灯が縦に同じ空間を開けながら配置されている。

外観を思えば、二階建てだったはずだが階段が見当たらない。一直線の通路には、同じ扉が並ぶ。

その一つを瘦せた男が開け、疲れたように声を出した。

「先生。持つてきましたよ」

「何をぐずぐずしていたんだ。すぐに準備しないか」

「……はい」

まだ身体が起きていないのか、緩慢な動作で痩せと太つちよは続き部屋へと消えた。

先生と呼ばれていた白髪の男は、細い筒を近くの台に乗せ、少しのズレも許さないとばかりにわずかに斜めに置かれていた器具を神経質そうに眉をひそめて直している。

コマはただ静かにその様子を見守った。

「小口くん！ 中橋くん！ 何をやっとするのかね！」

焦燥に駆られるように声を上げ、コマの檻を覗き込んでくる。

どちらがオグチで、ナカハシであるかなど興味はないが、コマは名前も覚えておく。

この建物の中、そして周辺からも人外の二オイも気配もない。

以前の三人組にまとりついていたような、人のそれと違う雰囲気も、人間達からは感じられない。

どうしたものか。と、コマは思案する。

人外が絡んでいないのであれば、こんな所にいる理由などないのだ。

「まったく、あいつらは……こんな事は滅多にないというのに。どれだけ貴重なのか、分かっておらん！」

覗き込みながら独りごちる彼から金色の瞳を逸らす事なく、コマはそのくだらない人間を見下していた。

その態度も気に入ったのか、白髪の男は血走った目を輝かせて傍にセットした刃物に手を伸ばし、コマの檻の前でゆっくりと振る。

「ハイイロオオカミをこの手で解剖出来る機会など、そうそうないよなあ」

待ちきれないのか、細い筒を握りしめて檻の前を腹を空かせた熊のように行ったり来たりし始めた。

やっと着替えて戻ってきた二人を怒鳴り散らし、筒を細い男に渡す。

(……麻醉か)

コマは目を細めて、口の端を気付かれないように持ち上げた。

高貴な狼を気取れ。

楓父の言葉の通りに胸を張り、金色の瞳を細めて蔑む眼差しを向ければ、白髪の男はより狂気の入り混じった恍惚の表情を浮かべた。

その時、勢いよく扉が開かれた。

コマから見る事は出来ないが、ニオイと荒い息使いで女の内田だと知る。

「佐伯先生、何をしてるんですか！」

佐伯と呼ばれた白髪の男は大きく舌打ちをし、苦々しげに言葉を吐き捨てた。

「見ての通り、解剖だよ」

「そんな！」

「君は呼んでいない。帰って寝たらどうかね」

続けなさい、と二人をうながす。

「……こんな貴重な個体を、簡単に解剖するなんて！ それこそ無駄だわ！」

「内田くんに何が分かるのかね？」

「分かります！ だってそうでしょう？ 今後、出会えるとは思えません。だったら生きている間に実験出来る事なんて、山ほどあるでしょう？」

静まりかえる室内、怒りに顔を赤く染めた佐伯に、麻酔を持った男二人も居心地が悪そうに身をよじった。

抗議の声を、幾分抑えて内田が諭すように続ける。

「ハイイロオオカミですよ？　こんなチャンスは、もう二度とないんじゃないですか？」

「……小口くん、中橋くん。中止にする」

「は？　まじですか？　こんなに早起きしたのに？」

小口と呼ばれた細く眼鏡の男が、目をみはった。

太った中橋も、頭痛でもするのか眉間にしわを寄せて大きな溜息を吐く。

「じゃあ、内田さんがこいつを部屋に戻しておいて下さいね」

「……何を言ってるの？」

「そうだな。反対してるのは内田さんだけなんだし、後はよろしく」

多少の怒りがこもった声を吐き、台に麻酔の筒を投げ捨て、小口と中橋はコマの目の前から消えた。

「では、ここの後片付けもしておくように」

コマは静かに、身を伏せた。とりあえず山場は去ったと考えていいだろう。

大きな音を立て、何かを蹴りつけた音が響いたが、男連中が戻ってくる事はなかった。

怒りに顔を歪ませながら、内田が正面に回り、コマを見つめる。

「あんた、人に慣れてるわよね。出してあげるけど、大人しくしてるのよ」

近くにあった刃物を檻に差し込みながら、内田はゆっくりと鍵を外した。

襲おうと思えば簡単だが、自分の任務はそんな事ではないし、無駄に人間を殺せば、後々やっかいな事になるという事も分かっている。

第一、『造られたモノ達』を置いていくのは忍びなかった。

そこでふと気付き、思わず苦笑する。

いつから自分以外のモノを気にするようになったのか。以前の自分には考えられない事だった。

自力で生きられない者は、淘汰されていく。
そうあるべきだと生きてきたのに。

「ほら、出るのよ。分かる？ おいで！」

内田が急^せかして、側面を何度も叩く。

コマは小さく肩を竦め、静かに床へと飛び降りた。
小さな刃物を構えながら警戒する内田を、面白そうな目で眺めてやれば、やがて肩から力を抜く。

「……遊びたそうね。こんな箱に押し込められれば、仕方ないかもしれないけど」

刃物を台に戻し、コマの正面にしゃがむ。

手の平を上に向け差し出してくる内田に顔をしかめれば、彼女は小さく笑った。

「あんたの家族が、どんな手を使ってオオカミを取り寄せたかなんて知らないけど。大切にされてたのね」

ここに来たコは皆そうだけど。と呟き、しばらくコマの顔を複雑な表情で見つめてから立ち上がった。

檻に鍵をかけ、柵をつかんで派手な音を気にもとめずに引きずりだす。

ついてくる素振りを見せないコマを振り返れば、灰色の獣は手術台の上で座り込んでいた。

「……そこは、もう関係ないんだから。ほら、おいで！」
「……お前は、何を憂う」

低くしゃがれた聞いた事のない声に、内田は警戒して辺りを見回す。

コマは胸を張り、静かな声でもう一度問う。

「後悔するくらいなら、何故この場に残る？」

「誰？ 誰かいるの！？ 小口か中橋ね！ こんないたずら、悪趣味だわ！」

「答える。ここにはお前しかいない」

彼らの声ではない事が分かっている彼女は、更に混乱した。
金色の瞳が、彼女を捉える。

震えながら驚愕を隠す事なく、内田はコマを見た。

決意

楓は、今更ながらに後悔していた。

何の愛情も感じられない内田が持つリードの引き方に。そして、車にコマを押し込む時の違和感に。

あの男は笑顔で礼を言っただけ、楓の中で得体の知れない不安が込み上げていた。

彼の娘の為に、楓はコマを送り出した。

その娘の幸せと、心から元気になればと思ったからこそ。

それなのに拭い去れない、この不安

「私、間違えたのかな」

暗くなってきた二階の自室。ベッドにうつ伏せになりながら、日記に書き留めた物を読み直していると、不安と焦りが更につのる。楓父は、車を追って飛び出そうと体勢を崩した楓を支えてくれた。あいつの娘に挨拶をしたら帰ってくるから、大丈夫だ。そう言っ

て笑ってくれた。

でもコマは、一度も振り返らなかった

「コマさん……」

いつだって耐えるような、困ったような顔をしていた彼を思い出す。

楓は、自分は正しい事をしたのだと思う反面、押し潰されそうな

自分の心に戸惑っていた。

ベッドから身を起こし、座ったまま部屋をオレンジ色に染める窓の光を目で追った。

徐々に濃くなっていく窓型の空は、楓の気持ちまで変えてはくれない。

「コマさんを見て喜んでくれたらいいな。違うって分かったら、ここまでまた送ってくれるのかな？ もし、コマさんが人狼だって知られたら……」

冬の寒さではない寒気を感じ、楓は身震いした。

コマを想えば酷く胸が痛み、また一緒に暮らせればと思う。でも、男の娘が元気になれば嬉しい、という気持ちは嘘じゃない。

そんな葛藤が脳を支配する。

その時、配慮のかけらもなく扉が大きく叩かれ、楓は驚いて肩を竦めた。

「楓様、ご飯だよ。降りといで」

明るいネキの声に、楓はどれだけ自分が沈んでいたのか思い知る。こんなに悩んだ事なんて、今までにはなかった事だ。一つ溜息を吐いて立ち上がり、扉を開けた。

「ネキさん。パパはまだいる？」

「ああ、いるよ。何だい？ おねだりかい？」

「そうとも言えるし、ちよつと違うかも」

「じゃあさ、あたしのおねだりも付け足しといってくれないかい？」

楓様からの『お願い』って事でさ」

いつもとまったく変わらないネキに、楓は少し苛立った。

「……ネキさんはコマさんの事、心配じゃないの？」

唐突な質問に、猫撫^{ねこな}で声を引つ込めて楓の顔をまじまじと見つめる。

少し怒りの雰囲気を漂わせた小さな彼女に、ネキは思い切り吹き出した。

「あたしが心配？　アイツを？　冗談も言えるようになるなんて、ホント驚きだねえ」

「冗談なんて言っていないじゃん！」

「……冗談じゃなきゃ、何だい？　楓様が行って来いって言ったんじゃないか。野良犬がどうなったって、あたしが心配する義理なんて、これっぽっちもないんだよ」

人差し指と親指をぴたりくつつけて言うネキの、鋭く細めた青い瞳に気圧^{けあ}され、楓は言葉に詰まる。

顔をのぞき込みながら、ネキはポリウムのある金髪を揺らし大きく口角を持ち上げた。

「そうだろう？　それに大体、あたし達みたいなのがどうなろうと、人間からしてみたらどうだっていいんだからさ」

「違う、違うよ！　それは違う！」

「どう違うんだい。人間のくせに」

冷たく切り捨てるようなネキの言葉に、大きな茶色の目を見開いた。

「……どうだっていい生き物なんて、いないんだよ。人間だからじゃないくて、どんな生き物だって幸せな方がいいじゃない」

「ただ生きていたってだけの幸せを奪うのが人間だって言ってるのさ。世間知らずの……」

ネキの言葉は、最後まで続かなかった。

銀色のお玉が一閃し、ネキは柵向こうへと投げ出された。

「ネキさん！」

楓が慌てて頑丈な柵に^{すが}縋りつけば、見事に着地したネキが乱れた金髪を丁寧に直している。

今までネキが立っていた場所には、黄色のエプロンをした楓父が立っている。曲がったお玉を軽く直しながら。

「パパ！ あんな事、危ないよ！」

「大丈夫だ。あいつは猫だから、これくらいの運動が必要なのだよ」

「……ネキさん、平気？」

柵から身を乗り出せば、ネキは赤く丸い痕がついた首をさすりながら、無言で手を上げた。

安心したように、楓父へと真剣な眼差しを向ける。

「パパも、人間はいない方がいい？」

「楓ちゃんさえ無事なら、後は構わない。私の立場からしたら、そうも言っていられないがね」

「……そう」

楓はうつむき、唇を噛みしめた。

しかし、強い光を帯びた瞳で、楓父へともう一度目を向ける。

「パパ、お願いがあるの。私がママと同じ『光』だと言うなら、そ

の力の使い方を教えて欲しいんだ」
「何の為に？」

途端に笑顔が消えた楓父に怯みながらも、目を逸らす事はない。
これまでになく強く望んだ、楓の意思。

「私だって、皆を護りたい！」

楓父が眩しそうに目を細め、厳しくした表情を緩めた。

「いいだろう。だが、いいかい？ 自分を犠牲にする使い方だけは絶対にしないと、約束しなさい」

「でも、そういう事が必要な時だってあるでしょ？」

「ない。万が一そんな事態が起こったとしても、まず自分を護る事を第一に考えると誓わなければ、教えない」

「でも、ママは……」

楓の言葉に、楓父は奥歯を噛みしめる。

続く言葉を慌てて飲み込んだ楓だったが、さすがに小さな声で謝った。

それでも困ったような笑顔で楓の頬を優しく包み、彼は柔らかく諭す。
「さ」

「いいかい？ 楓ちゃん。我々よりも、人間というものは脆く弱い。皆を助ける為には、まず自分が生きていなければ始まらないだろう？」

「うん」

「ならば、まず如何なる事があれ、一人だけでも生き残る術を身に付けなさい。私もネキも、コマだってそれは身についている事なのだよ。」

だから私はコマを心配などしていない。あいつは一人でも生き残れるからだ」

彼の言葉に、楓は小さくうなずいた。

「だから、まず楓ちゃんはどうな事をしてでも生き残れるようにならなくては。どんな悲しい出来事が目の前に起こっていてもね」

「……分かった」

きゅつと口を結び真剣にうなずく楓に、満足気に楓父も笑う。

「さあ、ご飯にしようか。まずは何があっても食べなくてはいけないよ。体力がなければ、何も出来ないからね」

「うん！」

力強くうなずいて、楓は最初の難関、階段へと歩を進めた。

お玉に引っ掛けられ、痛む首を擦りながら、ネキは呆れて目を細める。

野良犬の心配など、彼がしてるはずはない。コマを外にやったのだって、本当に仕事かどうか分からない。

実際、内田と名乗った男と会った上で『いるかどうか、分からない敵』など、楓父ともあろう者が分からないはずがない。

と、ネキは最初から踏んでいる。

ただそれを楓やコマに言う筋合いもなければ、義務もない。

（体よく丸め込んだだけじゃないのさ）

決して声には出せない言葉を浮かべては、楓父への焦がれと葛藤

する。

一瞬、垣間見えた楓の光にネキは小さく嘆息した。ネキにとっては眩し過ぎる光。

楓父に認められる為ならば、彼女をいくらかでも護ってやれる。だが、光への耐え切れない欲求など、ネキにはない。

「何でこんな小娘を欲しがるのかねえ」

思わず呟けば、お玉が飛んでくる。

甘んじて受けなければ、他に何をされるか分からないとネキが頭を突き出せば、そのまま昏倒する事となった。

次の日の朝、楓に揺り起こされるまで

見限ったモノ

人工的な白い光が、一室を染める。

極度の緊張と、奥底から湧き上がってくる高揚に身震いをした女。その衣擦れの音すら大きく聞こえるほど、あたりは静寂に包まれていた。

コマは手術台に座ったまま、彼女から視線を外す事はない。

「何を迷う事がある？」

「……何も、迷ってなどいないわ。口の利ける獣なんて どんな構造になってるのかしら」

かすれた声で、内田は小さく独言どくげんした。

足を踏み出し、手を伸ばした先に彼はいる。その現実には彼女の研究心が揺さぶられる。

「どこまで言葉を理解しているの？ あいつら、知ってて解剖しようとしたのかしら。こんな研究材料を実験もせずに切り刻もうとするなんて、本当に潮時のようね」

「……………」

爪を噛む内田を、ただ静かにコマは見つめる。

心を見透かされるような金色の瞳に気付き、内田は眉をひそめた。

「何よ？ 何か言ってみなさいよ。あいつらも、知ってるのよね？」

「いや、知らないだろう」

「……本当に、受け答えが出来るのね！」

感嘆の声を上げ、コマのほうへと細い指先を伸ばした。

「私について来る気はないかしら？　ここから出してあげるから」
「ない」

「どうして？　ここにいたら、解剖されるのよ。私についてきたら、実験はするけど生きていられるわ」

笑顔を作り、白衣を揺らしながらコマに近づく。

微動だにしなかったコマが、歯を剥き出して小さく唸る。

触れる寸前に敵意をぶつけられ、内田は素早く手を引つ込めた。

「解剖の意味が分からないのね？」

「関係ない。俺なら、いつでも逃げられる」

コマの言葉に、目を丸くしてから相貌を崩した。

口を押さえ、細身をくの字に曲げながら、必死に大声で笑うのを堪えている。

「馬鹿ね。この施設から獣が出られるはずないじゃない。いかに頭の良い獣でもね」

彼女が落ち着くのを静かに待ちながら、コマはただ冷たく見つめていた。

大きく息を吐き、内田は白衣を脱ぎコマの横に置く。

「私はね、あいつらの馬鹿さ加減に愛想が尽きたのよ。実験だと言わりに、データの取り方も甘いし。何かと言えば解剖、解剖！」

目を細め、吐き捨てるように言う彼女は怒りを纏っている。

「ここを見つけた時は、普段出来ない研究が出来ると、それは喜ん

だわ。嬉しかった。人道に反する、なんてくだらない事を言われな
いもの。何も出来ない人間が、私を蔑むのが許せなかった。それが
ここでは許されるのよ？　なのに……」

ぎりつと奥歯を噛みしめ、コマを睨みつけた。

「ただの解剖好きな、くだらない集団だったわ。データを取るとい
う名目だけ。意味のない事ばかり書き留めて、ただの無駄よ。冗談
じゃないわ！　私の知性と能力が発揮されない場所なんて、意味な
いのよ！」

「へー。やっぱり僕らを裏切ろうとしてたのか」

驚きに飛び上がった内田は、驚愕の表情で振り返り、扉の前に立
っている彼を見た。

眼鏡をかけた細身の男は、彼女を蔑む目で見つめている。

「ど、どこから聞いて……」

「あんたが狼相手に愚痴つてるところからだよ。寂しい女だな。喋れ
ない動物相手にしか話す相手がいないんだからよ」

下品に笑う小口を尻目に、内田はちらりとコマを見やる。

うんざりとした表情で見返したコマに、彼女は思わずくすりと笑
った。

「どこ見てんだよ！　あんたも逃げられないように、檻に閉じ込め
てやる。生きた人間の解剖が出来ると先生が知ったら、大喜びだろ
うな」

「やっぱり、くだらないわね。ちゃんとしたデータも取れないくせ
に」

「データより、実績だよ。先生がいつも言ってるだろ？　解剖の数

さえこなせば、解析なんか頭に残る」

「それで、適当で目分量なデータになるのね。科学者の風上にもおけないわ！」

目を吊り上げて怒りを表す彼女に、小口は小さく笑った。

「まだ科学者きどりだったのかよ。どうせ解析した物を提出したって、使えないもんばつかだろ？ それを要求してくる上の連中だって、賄賂だなんだって大騒ぎしてるだけだし。ちゃんとした物出しでも、見てないんだから意味ねーんだよ」

それくらい、知ってるだろ。と鼻で笑い、彼女の胸倉をつかんで勢い良く棚に突き飛ばす。

激しく叩きつけられた彼女は、そのまま昏倒した。

非力に見える細腕でも、男の腕力は備わっているようだ。

「檻に入れ。ハウス！」

小口が檻の扉を大きく開け、その側面を叩く。

しばしその光景を眺めていたが、コマは大人しく従った。

暗い部屋に逆戻りして元の位置よりかは扉側に落ち着けば、小さなセイが安堵の声を漏らす。まだ意識を失ったままの内田も床に転がされて部屋の鍵は閉じられた。

「ど、どうしたの？ なにがあつたの？」

コマと内田を交互に眺め、うるたえた声を出す。

「この女は知ってるな？」

「うん、もちろんだよ。ゴハンくれる人なんだ、良い人だよ！ な

にがあつたの？」

「仲間割れだ。この女は、殺される」

コマの言葉に、猫目を大きく見開いたセイは息を呑んだ。

犬のように鼻を鳴らしながら、セイは怯えた表情で訴える。

「どうしたらいいの？ どうしたら、いいの？」

「なるようにしかならない。負った罪は、いつか清算されるのだ。してきた事と同じ目に遭うのが道理だろう」

「でも、ボクは助けられたんだ！ おなじ目にあうんだったら、ボクはおねーサンを助けられるんでしょう？」

強い意志を帯びた緑色の目が、キラリと光る。

小さく嘆息し、コマは狭い檻の中で立ち上がった。

「この女がいつか、お前を殺すかもしれないとしてもか？」

「そんな事知らないよ！ ボクを残してくれたのは、おねーサンだもん。助けられるんなら、助けるんだから！」

「そうか」

コマが彼女を助ける義理などない事は確かだが、鉄製の檻を子猫の細い歯でかじりついているセイには、重大な出来事なのだろう。

変わるものだ。と苦笑して、コマは体当たりして扉を打ち壊した。派手な音に、セイは檻の奥まで逃げていつてしまったが、コマは気にする風もなく内田の傍に寄り、前足で彼女の肩を押す。

動かない事を確認し、コマは人型に戻った。小さな悲鳴が檻の中から聞こえてきたが、無視をする。

誰かが音に反応して近づく気配はない。

コマは鍵のかけられた扉に両手を当て、力を込める。

軋む音と金属が擦れる音がしたかと思えば、金属製の扉は大きくひしゃげて折れ曲がった。

傾いた扉は使い物にならなくなったが、そんな事はコマの知る所ではない。

「さて……」

手術台のある部屋へと戻り、奥の部屋をのぞけば手術着が整然と並んでいる。

大きめの一着を手に取り、それでも窮屈そうに身に付けた。

彼らの二オイは二階から動かない。寝直してしまったのだろう、と判断をつけてセイのいる部屋に戻る。

「起きろ、ウチダ」

軽く顔を撫でるが、反応はない。

興味津々、檻に顔を押し付けて、セイが大きな目を更に大きくしてコマを見つめてくる。

「ねえ！ おにーサンなんだよね？」

「そうだ。静かにしている」

「助けてくれるの？ おにーサンも、助けてもらっただね」

「……静かにしろ」

セイの扉を壊して開けてやり、ギャーサンのいる大きな鳥かごにセイを押し込む。

彼女を肩に担ぎ上げ、鳥かごを片手にそつと部屋を抜け出した。

正面玄関へと足を向ければ、来た時と同様に、他の部屋からもザワリと生き物の気配が広がった。

「セイ。お前のようなのが他にもいるのか？」

「知らない。ボクはだれにも会わなかったもの」

とにかく、ここから出て人間の警察とやらに通報してやれば、後
は何とかしてくれるだろう。とおおよその見当をつけて足を踏み出
した。

しかし、すぐに何者かの気配を感じてコマは立ち止まる。

「止まれっ！」

背後から聞き慣れた男の声が響き、火薬のニオイをコマの鼻は嗅
ぎ取った。

帰還

「かごと女を降ろして、手を上げる」

かごとの中でセイが竦みあがり、コマはゆっくり鳥かごと内田を床に降ろした。

ジリジリと近づく足音を聞きながら、両手を上げる。

嗅ぎ慣れた銃器の二オイに顔をしかめ、コマは小さく唸り声をあげた。

「馬鹿め、こんな所で泥棒かよ。こいつらを連れ出されたら、こっちの身も危なくなるんだ。不運と思って、死んでくれ」

小口がその引き金を引く瞬間の音を聞き取ると同時に、コマはその身を反転させ身を屈め、驚くべき身体能力で小口へと飛びかかった。

二度目の引き金を引いても、その凶弾がかする事もなく、コマの右手が小口の首を捉え、左手は銃を持った彼の手をへし折っていた。悲鳴をあげたくともあげられない状況に、小口はパニックに陥る。怯えとも驚愕ともとれるその表情に、コマは冷ややかに笑った。

「力加減が難しくてな。首を折らなかつたのは奇跡だよ」

力を込めたわけでもないのに、泡を噴いて小口は白目を剥く。

発砲音に、閉じ込められているモノ達がざわめき、二階からも慌ただしい足音が響いた。

小さく舌打ちをしたコマは、小口の襟をつかみ、手近なドアノブを軽く引く。

扉は大きな音を立ててコマの手に収まり、渋い顔をしながら小口

を中に放り込み、扉を塞ぐように立てかけた。
その時、階下に辿りついた佐伯が、ひしゃげた鉄製の扉に絶句した。

「せ、先生。一体何が……」

息を上げて追いついてきた中橋も、その惨状に思わず後ずさった。
セイが甲高い声で鳴き、内田を起こそうと試みているが、だらりとして動かない彼女。

コマは、顔を歪めながら銃を拾い、小口を真似て銃口を彼らに向けた。

「なんだね、君は。小口君はどうした」

コマに気付き、倒れている内田に眉をひそめ、声を絞り出す佐伯に、コマは引き金を出来るだけ優しく引いた。
乾いた音して、佐伯の頬に銃弾がかすめる。

「意外と難しいものだね」

納得するかのようなコマの言葉に、佐伯は顔面蒼白のまま腰を抜かしたようだった。

中橋に至っては、階段に身を隠し、顔をのぞかせようともしない。
コマは手術室へと弾を撃ち込み、空になった銃を投げ捨てた。

「こ、ここは研究所だ！ 金目の物など、ない。ないぞ！」

腰を抜かしたまま、近付いてくるコマへと嘆願するように悲鳴をあげる。

ゆっくりと歩み寄りながら、コマは口の端を持ち上げた。

「自分が死ぬのは怖いのか」

「当たり前だ！ 死ぬのが怖くない人間なぞ、いない！」

「だが、お前達は殺し過ぎた。その報いは受けてもらう」

灰色の短髪がザワリと揺れ、人の顔だった部分が歪に盛り上がっていく。

着ていた緑の手術着は耐え切れずに裂け、人の皮膚ではない灰色の毛皮がのぞく。

二足歩行で歩くソレは、力を持て余している獣の姿をした化け物。破壊の衝動を溢れさせるかのように、ソレは周りが震え凍りつくほどの怒りの声をあげた。

目の前で人ならざる者に変貌を遂げたコマに、佐伯は恐怖に目を見開き、叫ぼうにもヒイと小さく息を吸い込む音しか立てられず、ただその身を震わせていた。

影から見ていた中橋は、それでも這いつくばるようにして階段をよじ登って逃げる。

「お前達は、ここで恐怖に包まれるのだ」

涙と鼻水でぐちゃぐちゃになった佐伯の首をつかみ、持ち上げる。知性ある金色の瞳は、冷酷に狂乱し始めた佐伯を見据え

階上から、乾いた音が鳴り響いた。

コマは、右腕と脇腹の激痛に佐伯を壁に叩きつけ、下肢の筋肉を最大限に使って階上へと跳びあがった。

中橋を確認するまでもない。銃器を持ち、自分を襲いくる者。

コマにとって、反撃する理由はそれだけで良かった。

「なんで……！」

中橋の言葉は、そこで途切れた。
家具が壊れる派手な破壊音と咆哮。その後は、気味の悪いほどの
静寂が辺りを包む。

セイは、初めて知る恐怖に身震いをした。

人間になる動物もいるのかと、最初は驚き懂れた。自分もいつか、
そうなるのだと思った。

だが、人でも獣でもないソレを見た時に感じたものは、純粹なる
恐怖。

ここにいと、自分も危ない。と、幼いながらも備わっている
本能に、セイは内田を起こそうと震える声で必死に呼びかけた。

おにーサンが、上から降りてくる前に。

おにーサンが、戻ってくる前に。

こわい、こわいこわい……こわいよ！

「……ん」

必死の呼びかけに、視線が定まらないながらも内田は呻いた
目の前にある鳥かごをぼんやりと見つめ、とてつもない吐き気に
嗚咽を漏らす。

「目が覚めたか」

狼の姿に戻り、姿を現したコマに、セイは小さく悲鳴をあげた。
そんな事は気にも留めず、内田は頭を押さえてゆっくりと起きる。

「……私、どうしたの？」

「気を失っていた。あいつらは片付けておいた。警察に通報しておいてくれ」

乱れた黒髪を直しながら、ところどころ血で染まっているコマに手を伸ばす。

「怪我を……したの？」

「いや、何でもない」

触られないように威嚇をし、鳥かごを持つよう顎で指し示した。

内田はよろめきながらも立ち上がり、鳥かごの中で吠え続けているセイに首をかしげる。

「おかしいわね。こんなに吠えるなんて」

セイの言葉は、内田には分からない。

異質なモノへの恐れと、内田を守る為の威嚇が入り混じり、半狂乱の叫びがコマへと降り注ぐ。

小さな部屋に寄り、鍵の束をもちだし、彼女は普段、目にしない物に眉をひそめた。

正面玄関のガラスには、弾痕が白く残っていた。

割れて粉々になっていないところを見れば、防弾ガラスなのだろう。

内田が表情を固くして、伸びて床に転がっている佐伯を振り返った。

「本当に、最低だわ」

鍵を開け、一人と三匹は外に出る。

上空では、低く高く風が泣き、朝陽を呼んでいる。

白々と東の空が色を変え、刺すような冷気が一人と三匹を包み込んだ。

「調べたい事は、たくさんあるけど。送っていくわ、あなたの家に」
「不要だ」

白い小型車の扉を開け、黒髪をなびかせながらコマを見る。

「でも、待つてる人がいるんでしょう？ 早く帰ってあげるべきよ」
「そんな物に頼らない方が、早く着く」

コマの脚力を知らない内田は、呆れた表情を浮かべる。
背を向けて歩き出すコマが、ふと振り返った。

「俺を連れてきた男も、内田と言ったが……親なのか？」
「あいつが？ やめてよ！ あいつは佐伯の弟よ。私の名を、騙ってるのね」

さすがに怒りの表情に変え、許せないところぶしを車の扉に叩きつける。

それを横目で見て、コマは無言で、振り向く事もなく走り出した。

*

眠れず、窓の外を眺めていた楓は、山側の道で動く物を目にした。かなりの速さで近付いてくる小さな物体に、楓は思わず立ち上がった。

「コマさん！」

慌てたせいで足がもつれ、転びそうになる。

心ばかりが早くと急かし、早鐘のように大きく胸を打つ。

帰ってきてくれた嬉しさで、楓は、胸が一杯になった。

病気の女の子の事なんて、頭から抜けていた。

ただ、嬉しくて。自分の心が震えた。熱いものが込み上げてくるが、楓はそんな感情にうろたえる。

初めて感じる想いに戸惑い、玄関を開ける手にためらいが生まれた。

心の中の戸惑いは、嬉しさと熱に交じり合い、一つの言葉が彼女の中で大きく居座る。

コマさんが、好き。

急激に顔が火照り、楓は冷たい指先で熱くなった顔を覆った。

小さく悲鳴をあげ、洗面所に飛び込む。身も切れるような冷水で、何度も顔を冷やすがうまくいかない。

コマは扉の前で待っているだろう。

楓が起きてきた事だって、彼ならば気がついていいるかもしれない。

「パパだって、ネキさんだって、大好きなのに。なんでこんな特別みたいななの？」

かじかんで真っ赤に染まった手をタオルで包みながら、玄関を窺う。

開けなかったら、コマは寒い外ですつと待つのだろうか。

パパが帰ってきたら、きつと一緒に入ってくるのだろうか……

寒空の下、気付いているのに入れてあげないのは、楓も辛い。でも今は、コマの顔が見られない気がする。

楓は、玄関の前で途方に暮れた顔で立ち尽くしていた。

気持ちの行方

床に大の字で転がっているネキを、楓は揺り起こそうとする。
なかなか起きてくれない彼女に、焦りを覚えたその時、小さく肩を震わせてネキが目を開けた。

「……楓様？」

「ネキさん！ よかった、起きてくれて」

明かりもつけておらず、ひんやりとした朝も早い時間の空気に、ネキは身体中をバネにして跳ねあがった。

楓を庇うように左腕で抱え込み、青い瞳を光らせて闇が明ける青い影に染まった室内を警戒する。

ただ静まり返っているだけの室内に、ネキは腕を緩めた。

「なんだい、こんな時間に。お子様は寝る時間だろう？ 怒られるのはあたしなんだからさ。ほら、寝た寝た！」

眉をひそめて、階段へと追いつてくるネキに、楓は慌てて首を振った。

「ち、違うの。お願いがあるんだ！ コマさんが帰ってきたみたいなんだけど……入れてあげてくれない？」

「あたしがかい？ やなこった。飼い主は楓様なんだろう？ だつたら、自分でやりな。最後まで責任を持つんだね」

優雅に腰をくねらせて、白いソファにダイブする。
背もたれが邪魔になって、ネキの姿は膝から下しか見えない。

「ネキさん……」
「もう寝たよ！」

小さく呟く楓の声にも、ぴしゃりと言葉を叩きつけてネキは拒絶した。

ソファに横になって、目を開けたまま様子を窺えば、かなり近付いた場所からまた声をかけられる。

「あの、あのさ……」

しかし、そこから先が続かない。仕方なく上半身を起こし、背もたれから楓を見れば、途方に暮れた表情を浮かべる楓がネキをまっすぐ見つめている。

痛む頭と喉を順に擦り、ネキは玄関に目をやった。

「で？」

「え？」

「だから、なんで野良犬を入れたくないのさ。楓様が家に入れたくないようなのを、あたしだって入れるわけにはいかないだろう？」

「誰も家に入れたくないなんて、言っていないじゃない！ 私は、ただ……」

途端に口ごもり、暗さの残る部屋でうつむく。

だが、ネキの目には顔を赤らめる楓の姿がはっきりと見えていた。背もたれで口元を隠しながら、にやりと笑う。

「ただ。なんだい？」

「ただ……今はコマさんを見たくないって言うか」

「そう。じゃあこのままでも構わないじゃないか。さ、寝てください？ 楓様」

ネキの含み笑いに気がついたのだろう。楓は少し顔をしかめてネキをにらんだ。

「ネキさん！」

怒りを含んだ言葉に、小さく肩を持ち上げてネキは笑った。

「悪かったよ。だけど、何を恥ずかしがる必要があるんだい？ 野良犬の事が好きなんだろう？ だったらあたしみたいにアプローチしたらいいんだよ」

「ネキさん、みたいに？」

ソファの端から見えるスラリとした足を、優雅に組み替えて、軽くウェーブがかかっている金髪を後ろに流して、挑戦的な視線を楓に送る。

「そうさ。大体、人間なんて限られた短い命だろう？ 迷ってる時間なんかないと思うけどね」

「そうは言っても、人間にとっては長い時間だよ」

「野良犬にとっては、息を吐くほど短いさ」

押し黙り思案する楓に、ネキは冷たく澄んだ空気に白い息を吐き出した。

その白く染まった空間は、一瞬の内に儚く消える。

息を呑んで見守っていた楓が我に返り、そっと扉を見やった。しかし、すぐに目を泳がせてうつむいて。可哀想なほど首まで赤く染まってしまふ楓。

舌なめずりをせんばかりに含み笑いを押し殺して、ネキは助け舟を出す。もちろん、面白半分で。

「簡単だろう？ 楓、コマさんがなくて寂しかった！ 大好き！
って抱きつければいいだけさ」
「だけって！」

近所迷惑にならないくらいの小さな悲鳴をあげ、出来ないとはかりに首を振る。

背もたれに肘をつけて身を乗り出し、淡い青色に周囲を染め出した光にも勝る青い瞳を光らせた。

「あたし達はね、あんたを護る為に命かけてるんだよ。いつだって死と隣り合わせさ。もたもたしてる内に、どっちかが消えてるかもしれないねえ」

「そんな言い方……」

「酷いとも言いたいのかい？」

身軽に背もたれを支点として跳びあがる。楓の目の前に金髪をふわりとなびかせて顔を寄せた。

小さな両肩をつかんで逃さず、ネキは威嚇するようにのどを鳴らす。

「バカだね。人間だって、そうじゃないヤツだって。明日が来るかどうかなんて分からないだろう？ 今を大事にしなくて、どうするのさ」

「……今が、大事？」

「そうさ！ あの野良犬はそーゆー面に関しては、すごく鈍いだろ？ だから、楓様から押していくんだよ」

分かるかい？ と、耳元に低い声で吹き込んでくる。
口を一文字に結び、茶色の瞳には決意の色が浮かんた。

刺すほどの冷気は、心地良い涼を楓に与えている。恥ずかしさが形を潜め、楓は力強くうなずいた。

「ネキさん。ありがとぅ、そうだね！ 私、頑張る」

「その意気だよ！ あたしは楓様に協力するからさ、楓様も協力しとくれよ？」

「……協力？」

輝く猫目に、楓はあからさまに眉をひそめる。

「当たり前だろう？ あの野良犬の仲を取り持つ代わりに、槇原様とあたしの仲を取り持つ。人間の言葉でなんて言っただけ、取り持つ取り持つだっけ？」

「持ちつ持たれつつて言いたいの？ でもいい。だってそれじゃあネキさんが私のママになるって事でしょ？」

「豊富な胸で抱きしめてあ、げ、る」

両腕を広げて待ち構えるネキ。猛獣が口を開けて待ち受けているように感じた楓は、口をへの字に曲げた。

「いいらない！」

怒りに足音を響かせて、黒い扉を勢いに任せて大きく開く。

横の芝生に身体を丸めようとしていたコマが、怒りに燃える小さな少女を見て目を丸くした。

「おかえり、コマさん。早く中に入って」

「眠れなかったのか？ 何があった？」

背後で聞こえよがしに騒いでいる金髪女に目もくれず、コマは下

から楓の顔を覗きこむ。

心配してくれる彼　狼の形態ではあるが　と目が合った瞬間、
楓は顔が赤くなるのが分かり、思わず背を向けた。

「タオル！　持ってくるから、中に入ってて」

声が裏返った事に、更にパニックを起こし、楓は逃げるように足を引きずって奥へと歩いていった。

ネキが小さく舌打ちをして、洗面所へと消えた楓の後を追う。
何がなんだか分からないコマは、頭を少しさげ彼女を見送った。
言い争う小さな声が、静まり返った家の中に響く。

どうしてさ。

放っておいて。

時間を置けば、もつと言えなくなる。

たたみかけるようなネキの言葉に、耐え切れなくなったのである。
う。しばらく黙っていた楓は近所迷惑をかえりみず、金切り声に近い叫び声をあげた。

「うるさい！　うるさいっ！　うるさーいっ！！」

手にしていた水で濡らしたタオルと犬用のブラシをネキに投げつけ、肩を震わせる。

何事かと駆けつけてきたコマを振り向きもせず、楓は首まで赤くしたまま、ネキをにらみつけた。

「ほつといてよ！　絶対にパパとの仲を取り持ってなんてあげないから！　だから私で遊ばないで。これ以上この事に口出してくるなら」

一旦、口を閉じた。

楓が怒りをぶつけたところで、ネキには何の痛みも感じないだろう。

今でもからかい半分な彼女の表情に、楓は震える唇をゆっくりと動かした。

「ネキさんがママになるなんて、絶対に嫌だってパパに言うからね」

その言葉を聞いたネキの表情が、一変して厳しくなった。

楓の怒りなど物ともしないほどの重圧が辺りを包み、ネキの身体が歪に膨れ上がる。

「あたしの恋路を邪魔する奴は、たとえ楓様だって容赦しないよ！」

猛獣の発する轟くような声に負けず、楓も胸を張った。

コマが二人の間に割り込み、今にも爪で切り裂きそうな勢いの虎女に唸り声をあげる。

だがその後ろから楓は叫んだ。

「私だって！ 私の気持ちをないがしろにするのは、許せない！」

二人は怒りをぎりぎりで抑制していた。このまま暴力に持ち込んだとしても、楓が負けるのは誰の目にも明らかだった。

楓本人が一番分かっている事だろう。だが少女は、引き下がろうとしない。

一触即発となり、コマが仕方なくその牙をネキに照準を合わせた時、背後から不機嫌な声かけられた。

「こんな時間に、何をしている」

闇を身に纏っているかのような黒いマントに身を包み、一見紳士に見える彼は、眉間にシワを寄せ、血のように赤い瞳を冷酷に光らせた。

楓が振り向けば、その瞳は深く吸い込まれそうなほどに黒いそれに変わり、笑顔が作られる。

「楓ちゃん、大丈夫かい？ 怪我はないかい？」

「うん、大丈夫。こんな朝早くに起きてて、ごめんなさい」

「いいんだよ。のどでも乾いたのかい？ ココアでも入れてあげよう」

「ううん、もう寝るから。ありがとう、パパ」

そう言いながらも、意味ありげにネキに視線をやる。

コマを引き連れ、楓父の横をすり抜けていく楓に苦々しげな表情を作り、持っていたブラシを棚に放り込んだ。

「ネキ」

低く疲れた声に、怯えたように身体を震わせる。

半分本気で楓に牙を向けたのだ、ただで済むはずがない。と蒼白になった顔で、重い身体を軋ませながら楓父へと向き直った。

無表情で手を伸ばしてくる楓父に戦慄を覚え、だが目を瞑る事も許されぬ圧力に、ネキは確実に起こるだろう事柄に、歯を食いしはる。

「パパ！ ネキさんに酷い事、しないでね！」

「大丈夫だよ、楓ちゃん。安心して寝なさい」

現実には引き戻されたかの違和感に、ネキは冷や汗が吹き出した。

彼の手が眼前からゆっくりと離れていく。

「死に損ねたな、楓ちゃんに感謝するがいい。次は止められる前に消す」

黒いマントを翻して、奥部屋の闇に消えた。

取り残されたネキは、いつの間にか止めていた息を大きく吐き出し、立つ事も困難なほど震える膝を床に押し付ける。

いつものシツケと違い、楓父が本気でネキを消そうとしてきた事実に。そして自分を救う為か、恩を押し付ける為に楓が声をかけてきたのか。ネキは後者と取り、大きな牙をギリと鳴らして大粒の涙が床を打つ。

声をあげるでもなく、彼女は震えが収まるのを待った。

愛しているのでしょうか？

すべて任せてくれれば、悪いようには

「……うる、さい」

いつでも来なさい。

私はいつもここにいるのだから

頭の中にしつこいほど響く声は、雌雄の区別がつかない。だが、確実にネキのひび割れた心に染み込んでいく。

白々と陽がのぼる直前。鳥の鳴く声に誘われるように、泣き腫らした目をそのままに、ネキは緩慢な仕草で立ち上がる。

昼頃、楓が目を覚ました時には、ネキの姿は邸宅の中から消えていた。

当惑1

十二月に入り、より一層寒さが厳しくなる。

楓は居室にいる時、窓の外を見る事が日課になっていた。

ネキが姿を消してからすでに一月も時が流れてしまっている。今までもフラリと出かけては半月以上も帰ってこなかったりもした。

しかし、今回だけはケンカ別れしてしまった事もあり、楓の心には尋常ではない不安が渦巻いていた。

玄関横に座っているコマのそばにクッションを置いて、楓は不安を紛らわすかのように、彼の灰色の背中をなで続ける。

「どうしよう、コマさん」

この言葉も何度目になるのか。だがコマは呆れるわけでもなく、口を開いた。

「猫とは、そういうものだ」

「……私、仲良くなったと思って、調子に乗ってた。何を言っても許されると思ってたんだ。ネキさんを、傷つけちゃったんだね」

楓は、自分でも声が単調になるのを感じた。嫌な感情が胸からせり上がってきて、呼吸が難しくなる。だが彼女には、この感情が何であるのか分からない。

見つめる背中では、ゆったりとしていて揺るがない意思を感じられる。

コマを家に連れて来た当初であれば、その背中にしがみついたり、意味不明な気持ちを押し付けるように頬を寄せたり出来たのだろう。

自分の気持ちに気がついて一月。

最初はコマに不審がられるほどギクシャクしてしまっただ、無理をする事などないと気付いた今では、多少遠慮する場面も増えたが普通に接する事が出来ていた。

光の加減で、銀色にも見える背中の中の毛をつまんでは軽く引つ張る。コマも違う言い方をしてきた楓を訝しがりながら、慎重に言葉をかけた。

「二度としないと心に留めればいい。間違いは誰にでもあると開き直るよりかは、悩んで気をつけるようになればいい」

「うん。ネキさんが帰ってきたら、ちゃんと謝るね。それで自分で頑張るって、ちゃんと言う」

ゆつくりとうなずいた楓に、コマがやつと振り向いた。

金色の瞳が楓の心を探るように見つめてくる。

「ってゆーか。楓は何に頑張るんだ？」

「なんでもないよっ！ コマさんには、関係ない事なんだから！」

澱^{よど}んでいた茶色の瞳が大きく見開かれ、楓は慌てて手を振り口をイーッと横に開いて見せた。

コマは小さく肩をすくめ、鼻を鳴らす。

また前を向いてしまったコマに、しまったとばかりに顔をしかめる楓。

手を背中に戻して、ごめんね。と囁いた。

返事の代わりなのか、気にするなと言うようにクルリと片方の耳を動かしたコマを見て、楓は嬉しくなり、コマに気付かれないよう微笑した。

「コマさんは、優しいね」

「そうか」

唐突に呼び鈴が鳴らされた。

楓がゆつくりと立ち上がり返事を返せば、聞き慣れない女性の声がする。

「楓、少し待っていてくれ」

籐の箱から服をくわえ、洗面所へと消える。

けたたましく鳴らされる呼び鈴に、戻ってきたコマは閉口しながらも楓を自分の後ろにさがらせた。

「誰だ」

「水沢ですけどお。猛たけるさんいますう？」

甘ったるい喋り方に、コマは怪訝な表情を浮かべた。猛という名前には聞き覚えがある。

バイトをしていた時に名乗っていた名前ではあるが、楓父によって記憶操作されて、自分の存在は消えていたはずだ。その人間が、この場所に現れるはずがない。

扉を開けるべきか思案していたが、楓はコマの横をすり抜け、止める間もなく扉を開けた。

そこに立っていたのは、香水の匂いが強く原型が分からないほどの厚化粧を施した女。

色を抜いた長髪には、ゆるくウェーブがかかっており、ファーのついたブロンズ色のコートをはおり、ミニスカートにロングブーツ。そんな女が笑顔で立っていた。

香水臭さに眉をひそめて、楓はにらみつけるように彼女をみつめる。

「どなたですか？」

「あ、猛！ 久しぶりい！ 何この子、妹？」

「……呼び捨て、ですか？」

自分の声に棘が混ざるのに気付かず、ただコマさんと言わないように気をつけるのが精一杯だった。

コマは無表情のまま、抑揚なく言葉を返す。

「化粧臭い女か。何故ここに来た」

「はあ？ 綾^{あや}って前から言ってるじゃん」

「何をしに来た？」

「えー？ 久しぶりにバイト言ったらあ、皆して猛の事知らないって言うからあ。前にこっそり見た履歴書の住所覚えててえ。それで来たのぉ」

「迷惑だ」

何がどうして綾という女から記憶が消されなかったのかが分からないコマ。

久しぶりと言うくらいだ。楓父はバイト先しか記憶操作を行わなかったのだろう。長期間バイトに来ていなかった彼女は、頭数に入られてなかったに違いない。

そう思い至り、コマは聞こえよがしに嘆息した。

「呼び捨てにしてたけど。その、猛さんとはどういう関係なんですか？」

頭越しに会話が進む為、良い気持ちのしない楓は話を戻した。

こつてりと盛ったマスカラのせいで作り物のように見える目が楓に向き、表情筋を動かせば化粧がポロポロと落ちるんじゃないかというほどファンデーションやら塗った顔は、笑顔の形に変わる。

「猛との関係？ そんなの決まってるじゃん？ 彼氏い。妹さんも
お、お姉ちゃんって呼んでくれていいし」

「そんな変なお面かぶったお姉さん、いらないから」

「お面？ 何言ってるの、あんた。超ウケルー」

何がそこまで笑う言葉に繋がったのか、けたたましい笑い声をあげながら、手を叩いている綾に、楓は困惑した。

人間関係に慣れているわけじゃない。どちらかと言えば、近所に住む数人くらいしか交流がない楓には、初めて見る人種についていけなかった。

目を白黒させながら言葉に詰まってしまった楓は、コマを見上げる。

「彼氏って、何？」

コマが答えに逡巡すれば、笑いを引つ込めて呆れた声を出す綾。

「何？ うつそお、彼氏も知らないの？ どれだけ純情ぶってたって話い。猛と綾が好き同士って事でしょお？ 猛が彼氏でえ、綾が彼女って事」

「そんなの嘘！」

「えー？ 綾、初対面で嘘つき呼ばわりされちゃうわけえ？ 何、妹サイテー」

たたみかけられ、楓は顔から血の気が引いていく。

混乱する頭でもう一度コマへと振り返れば、青筋を立てた楓父がコマの後ろ頭を片手でつかみ、邪魔だとばかりに横に放り投げていた。

ソファやローテーブルを巻き込み、酷い音をたてて転がったコマ

に、楓が悲鳴をあげる。

「パパ!？」

「えー！ こっちも超イケメンじゃん？ 今日の綾って、超ラッキー！」

「どちら様かな」

コマに駆け寄る楓を見送って、笑顔を崩さず静かな声で尋ねながら、楓父は家の中へと一步踏み込んでいる綾の肩をやりわりと外に押し出し、自分も外へと出て、後ろ手に扉を閉めた。

嵐が過ぎ去った後のように、部屋に静寂が戻る。

呻きながら起き上がったコマに、心配そうに見つめる楓。

無事である事を見届け、安堵した楓は眉をひそめて低い声を出した。

「コマさん、あの人と付き合ってるの？」

酷く痛む後ろ頭をさすりながら、コマは金色の瞳を嫌そうに細める。

「あんな鼻が曲がりそうな女、世界に女がアレだけだったとしても断る」

「そんな事言ったって、彼氏……なんでしょ？」

「ってゆーか、名前も覚えてなかったんだぞ？ 記憶にすらない人間なんかのせいで、こっちはとばかりを受けたんだ。恨みこそすれ、あんな人間を好きだなんて誰が言うか」

「……人間とは、付き合わないの？」

楓が発する声のトーンが変わった事に、コマは眉根を寄せ、それでもうなずいて見せた。

「あたりまえだ」

「あたりまえ、なんだ」

あからさまに沈み込んでしまった楓の理由が分からずに、コマは再度うなずく。

「そうだろう？　いくら人間の形をしていても、俺は化け物だぞ？」

「違うよ。コマさんはコマさんだよ。私にとって、コマさんは化け物じゃないよ」

「人間でもない」

きつぱりと告げるコマに、楓は黙り込んでしまふ。

耳がおかしくなりそうなほどの静けさが、二人を包んだ。

そんな重苦しい空気を動かそうとしてか、コマが立ち上がる。

「狼に戻る。槇原様が出て行っただ。もう人型の猛には用がなくなるだろう」

「コマさん、私……ね？」

床にしゃがんだまま、コマを上目使いで見上げてくる楓の頭に、大きな手を慎重に優しく乗せた。

先を続けようとする楓に小さく首を振った。

「大丈夫、楓が気にする事じゃない。これが現実だからな」

分かっているとばかりに笑い、人外である自分を慮ったが為のフオローが続くと勘違いしたコマ。

楓は、コマの中にとてもし深い人間との溝がある事を感じ、奮い立たせた告白への勇気が急速にしばらくでいった。

今、この時に告白しても、コマを困らせるだけなのではないか。
困らせるどころか、今の近付けた距離すら壊れてしまうのではないか。

嫌われたくない。同じ屋根の下、コマが離れていく事は、想像の中でさえ耐えられそうにない。

楓は無理に笑顔を作った。

いつか、自分の気持ちをコマに伝えられる日が、きっと来ると信じて。

当惑2

ある程度落ち着きを取り戻したように見える楓に、コマはその不自然さに気付きながらも洗面所へ足を向けた。

狼の姿で居間に戻れば、楓はまだ冷たい床の上に座り込んだままにいる。

「楓。冷たい場所に座り過ぎると、余計に足が悪くなるぞ」
「え？ あ、そうだね」

酷く疲れた笑顔のまま立ち上がった楓は、それ以上口を開かない。何が悪かったのかわからないコマは、服の入った籐の箱を隅に押しやり、とりあえず定位置に座った。

楓父が少し乱れた前髪を後ろにかきあげながら、黒い扉から入れば、不自然な笑顔で立っている楓が目映る。

「楓ちゃんが立っているというのに、お前は何をのんきに座り込んでいるのだ」

と、コマの前を通り過ぎるように見せかけながら、楓からの死角で前足を踏みつける。

呻き声をあげる事もせず、コマが立ち上がれば、また呼び鈴が鳴らされた。

先程の鳴らされ方よりかは、幾分控えめで短い。

「どなた様かな」

楓父が内側から声をかければ、ためらうような女の声が返ってくる。

「こちらに、シンリンオオカミがいると聞いてきました。内田と申します」

「……内田」

「以前、調査の件で報告した女です」

「あれか」

首の後ろの分厚い毛皮を猫掴みし、持ち上げる。

「何故その女がここにいる」

「何故と言われても」

前足を力なくダラリとたらし、後ろ足で立ち上がりながら彼の怒りを受けるその姿は、第三者の目から見れば滑稽に映るのだろう。楓も例外なく、しかし少しだけ悪いかなと思いつつも、くすりと笑った。

「本当にパパとコマさんって、仲良しさんだね」

思いもよらない所で、仲良し判定を受けてしまった楓父は、苦笑いしながら手を離す。

深くため息を吐き、黒い扉を開けた。

目の前に立つ女性は白衣ではなく、えんじ色のブラウスに黒いタイトスカートを身に着け、犬だか猫だか分からない生き物を抱いている。

だが、楓父は特に興味を示すでもなく笑顔を張りつけた。

「内田さんと、言っ たかな？」

「はい。その節は本当に失礼致しました」

「何の事でしょう？」

「ですから、こちらのシンリンオオカミを……」
「家に、オオカミなんぞ存在しませんかね」

楓父の言葉に、はつとして内田は彼の目を見る。

張り付いた笑顔の中で、目だけは笑っていないように感じ、彼女は頭を下げた。

「ご、ごめんなさい！」

「あなたは、コマさんを連れに来た内田さんの娘さんなの？」
「違います！ あんなのと一緒にされるだなんて……」

楓父の後ろからのぞく楓に、内田が声を荒げたが、以前コマとした別れ間際の話进行出し口をつぐむ。小さな彼女に、その説明がなされていないのだと一人納得し、うなずく。

「コマさんの知り合い？」

「知り合いというか。私もよくは覚えていないのだけど、その、コマさん？ というオオカミ……いえ犬に助けられたのよ。それは間違いない事だと思うわ。あなたの大切なコマさんを誘拐した男もちゃんと警察に捕まったから、安心してね」

今度は楓が息を呑む番だった。

たしかに何かがおかしいと、漠然とだが思っではいた。

コマが帰ってきてしまったのに、病弱の娘の為にと言っていた男は、一月たった今でも、まったく姿を現す事もなく連絡もない。

それにコマを連れ去る時でさえ、その男からはコマへの愛情は微塵も感じられなかったのだ。

誘拐だったと聞いて、どこか納得のする自分も嫌だった。
だとしたら、楓はうっすらとではあるがその可能性に気付いてい

た事になる。そしてわかっていてコマを送り出した事になる。

静かに身をひそめるコマの方へ、楓が目を向けた。

コマは少し青ざめた彼女に、怪訝な表情を浮かべ小さく首をかしげて見せる。

それにすら思わず目をそらし、小さな手で楓父の黒いセーターの裾を握りしめた。

そんな彼女の肩を抱き寄せ、楓父は大丈夫だよと微笑みかける。

「その話はもう済んだ事だ。貴女がここに来る事で、彼女の心が痛む事を考えなかったのかね？ お引取り願おう」

「……でも、私は知っているんです。そのコマさんが喋る事が出来る事実を」

余計な事を、と思わず悲鳴をあげなくなったコマだが、かるうじて飲み込んだ。

だが楓父から発せられる、強烈なオーラに前足を一步だけ後ずさった。

「それが事実だとしたら、面白い話だ」

「事実です」

「本当に話せると思うのかね？ 呆れたな。さあ楓ちゃん、中にお入り。こんなおかしい人間の言う事を間に受けてはいけないよ」

扉を閉めようとする楓父に、内田は必死に声をかけた。

「本当に彼は話せるんです！」

「帰ってくれ」

「どうして内田さんもコマさんを彼って言うの？」

半分ほど閉じた扉から頭を出して、食い下がった楓。
それ以上扉を閉めるわけにもいかず、楓父は仕方なく前に出る楓を押し留めながら扉を押さえた。

「どうしてって。彼は雄でしょう？ 動物だけど、話が出るから……ごめんなさい、何かおかしかったかしら？」
「彼って使うのは、彼女の人が使う言葉じゃないの？」

楓の言葉にこもっている感情は、あきらかな怒り。
怪訝な顔で、内田は慎重に言葉を選ぶ。

「いいえ、その括りは正しいものとは言えないわ。例えば、表の道を歩く名前も知らない男性がいたとして、その人を指す言葉は『彼』ではないかしら？ 女性であれば『彼女』ね」
「でも、さつき来た女の人が言ってた。彼氏と彼女は好き同士なんだって。それにコマさんは知らない男性じゃないでしょう？」
「たしかにその意味にも使われるわ。でもよく考えてみて？ コマさんは犬でしょう？ 彼氏にするのなら、いくらなんでも私は人間の方がいいわ」

言葉に詰まる楓に、内田が優しく微笑する。

「あなたはコマさんの事が、すごく好きなのね。大丈夫、きっと彼もあなたの事がとても大切なのよ」
「そろそろお引取り願おう。二度とこの土地に踏み入らないでくれ」
「この近くに越してきたの！ もし何かあったら……」

内田の目前で扉が閉められた。

楓は、顔を耳まで赤くして黙り込んでしまう。内田の言葉は、近くにいたコマにも聞こえていたはずなのだ。

知られてしまった、どうしたらいいのか。

コマの顔が見られず、避けるように一歩踏み出せば視界がぐるりと歪んだ。

あれ？　と思うよりも早く楓は気を失い、楓父が慌てて抱きとめる。

最後に聞こえた楓の名を呼ぶ声が、果たしてどちらのものだったのかを、楓が判断をつける前に、暗闇へと意識は沈んでいった。

招来

楓父はそつと楓を抱き上げる。

燃えるような熱を全身に帯びている彼女は、正反対に酷く震えている。楓父は自分の失態に齒軋りした。

コマを仕事に出してからというもの、楓の眠りが浅くなっている事には気がついていた。

その上ネキの事や、ここ最近気温が急激に下がっている事も起因しているのだろう。

女達の来訪での内容も、考えたくはないがストレスの一部になっている。

その理由から考えれば

「コマ」

「……はい」

神妙な顔つきで楓父を見つめている事から、反省はしているようだ。

「この状況を作った事は私にも要因はある。だが、敵を招くとは何事だ」

「俺は何も」

「しかもだ。お前が話せる事を知っている。その事についての報告はなかったが」

「……申し訳ありません。アレは医者のようなので、楓様の役に立つかもしれません」

きつちりと座り、やや頭をさげて楓父に伺いを立てる。

しかし彼は振り向く事なくふわりと浮き立ち、二階通路へと降り立った。

「貴様は……何もするな。出来れば息もしないでくれると助かるのだがな」

楓の部屋へと二人は消え、コマは静かに首を竦める。

二度と会う事などないだろうと高をくくっていたのが間違いであった。

闇に紛れ襲う事も一瞬の内に脳内を駆け巡ったが、渋い顔で首を横に振る。

楓父は『何もするな』と言ったのだ。どんな内容であれ、行動するわけにはいかない。

張り詰めた空気の中、黒い扉の定位置へと戻った。

瞬間、急激に気圧が下がったかのように、コマは酷い耳鳴りに襲われる。

小さく唸り顔を上げれば、ネキが以前にシツケされた時と同様に黒い扉が歪に盛り上がった。

一際大きな盛り上がり方に、コマは侵入者を警戒し臨戦態勢を取る。

黒い塊は徐々に形を成し、冷たい床で駄々をこねるように左右に転がって、激しく咳き込む。

「んなつ、なんだ！？ 今度はどこだつてんだっ！」

聞き覚えのない高めの声に、コマは逡巡した。

扉から生まれたという事は、楓父が出した物体かもしれないからだ。

下手に攻撃も出来ず、とにかく跳びかけられる距離を保ち威嚇する。

「……お前が呼んだわけでも、なさそうだな」

完全に姿を現した黒ずくめの青年は、黒い瞳でコマをつまらなそうに見やり、左側の一房が青く染まっている黒い短髪をわしゃわしゃと掻く。

唸り声をあげるコマを見て、彼は身を低くし、鋭い鳥の声をあげた。

「カラス、無駄な時間があると思うな」

楓の部屋からいつ出てきたのか、手すりの向こうから冷ややかに階下の二人へ声をかけてくる楓父。

カラスと呼ばれた青年は、ひょいと身体を起こし、小首をかしげた。

「やっぱりあんたか。俺にも用事つてもんがあるんだから、呼ぶなら前もって言ってくれよ」

「緊急以外で、お前が必要か？」

「……あー、まあいいさ。で？ 患者は誰だ」

コマは、とりあえず定位置に身体を戻した。カラスもすでにコマの存在を無視している。

顎で上がって来いと指し示せば、カラスの背が盛り上がり、黒い羽が形成された。

羽ばたけば強風が部屋中に吹き荒れ、家具が風で煽られて軋む。浮き上がったかと思えば、突然羽が消え、カラスは驚愕の表情を隠す事なく酷い音を立てて床に転がった。

コマはとばつちりを防ぐべく、そっと身を伏せる。

「足で上がって来い」

怒りに満ちた楓父の言葉に、口の中で悪態を吐きながらカラスは痛む身体を起こして立ち上がった。

渋々といった調子で、部屋に入ったカラスは更に脱力する。

「あーそうだ、思い出した。ここの患者は人間だった」

「即刻治せ」

「前にも言っただろう？ 人間とは身体構造が違っつてな」
「御託はいらんと、前にも言っただはずだ」

扉の前に立ち塞がる楓父に、カラスはやれやれとばかりに肩を竦め、楓の部屋の窓を大きく開け放つ。

楓の傍らに寄り、額に右手を、^{へそ}臍の下に左手を当てて深く息を吸い込み、止めた。

細められたカラスの瞳が青く光る。

しばらくするうちに、楓の荒かった呼吸が幾分か和らいだ。

額に大粒の汗を浮かべ苦しげな表情のカラスは、楓から手を離れた。

酷く重そうに足を窓際まで運び、外に向かって大きく息を吐き出す。

黒いもやのようなものがカラスの口から吐き出され、最後の一片が外に出た所で、カラスは震える手で窓を閉じた。

一房だけだった青い髪の毛が、いまや半分を占めていた。

「これ以上は、何も出せない」

「原因は？」

「ストレスだろう。他に病気はないが、足だけは前にも言っただように治らないからな」

「お前の腕が未熟だからだ」

楓父の言葉に、黒く戻っている瞳が見開かれた。

「おいおい、治してもらつといてそりやないだろう！ 大体、俺が人間を診るっただけでもありがたく思つて欲しいね」

「ふん。十年もたつのに、足すら治せない奴が大きな口を叩くな」

「光を治すのが、どんなに困難か！ あー、なんなら人間の医者に見せてみるよ。刃物で切つたり針を刺したりされたあげく、原因不明だと言われるのがオチだろうけどな」

「それで治されたら、お前の商売はあがつたりだな」

鼻で笑われたカラスだったが、怒りをぶつけるところか呆れ顔で楓父を見つめる。

「どんな症状でも、一日で治せる人間の医者がいたら連れて来いよ。大人しく教わつてやるさ」

「……ラス、先生？」

二人の言い合いに割り込んだ小さな少女の声に、カラスはあからさまな渋い顔で声のした方へと振り返る。

茶色の瞳を黒ずくめの彼に向け、起き上がった。

「私、倒れたんだっけ。あの、ありがとうございます」

「言葉はいらない」

「ビジネスって、言つてたね」

ベッドから降り、机を開ける。

何かないかと探せば、横から覗き込んだカラスが大きめのグローブを摘まみあげた。

青いガラスと透明なガラスを組み合わせで作られ、金で縁取られたステンドグラスのブローチ。

「これでいい」

「あ、でも……」

それは楓父から貰った物で、とても貴重なのだと聞いていた。シヨートボブを揺らして振り返れば、彼は小さくうなずいて見える。

「楓ちゃんにあげた物だ、好きにきなさい」

「……うん。ごめんね？ パパ」

「気にする事はないよ。いくらでもプレゼントしてあげるからね」
「うん。パパは優しいね」

そう微笑んで見れば、楓父が楓に駆け寄り抱きしめた。その様子を半眼で見つめながら、カラスは、どこがだと小さく呻く。

とてつもなく嫌な予感がして、半分青く染まった頭を横にずらした。今まで頭があった場所にスリッパが飛んでいき派手な音を立てて壁に当たった。

へこんだ壁は、ゆっくりと元の形に戻っていく。
それを見つめながら、カラスは深く息を吐いた。

「もう用はないよな。これからは無理に呼び出すのはやめてくれ」

「カラス先生、治してくれてありがとう」

「人間に感謝されてもな」

肩を竦め、ノブを回したその背中に、思い出したような声がかけられた。

「カラス。下でお前が動かした家具、当然直してから帰るだろうな」
「……は？」

ぎこちなく振り返った先には、貼り付けた笑顔の中の笑っていない目とぶつかる。

問答無用の雰囲気、先程とは違う汗をかく。

「力仕事は、下にいた人狼が専門じゃないか」

「ああ、だが今あいつには何もするなという命令を入れてある」

「自分がした事なら、自分で解決しなくちゃいけないんです」

楓も口を挟めば、カラスが冷酷に青い目を光らせた。

「人間が口を挟むな」

「楓ちゃんにそんな口を利く事は許さん」

楓父の瞳も赤く光り、短髪がざわりと揺れ動く。
即座に負けを宣言したのはカラスの方であった。

「わかったって！ やって帰ればいいんだろ？ 力比べで『特別』
なお前と張り合えるとは思わないが、人間に親しくされたくない事
だけは覚えといてくれ」

「……ごめんなさい」

「この青黒い男が謝りこそすれ、どうして楓ちゃんが謝る事がある
ものか！」

「あー、腹黒いみたいな言い方しないでくれ」

親子愛だかなんだかわからないスキンシップを見せつけられながら、声をかけたが返事はない。

カラスは深くため息を吐いて、面倒臭そうに部屋から出て行った。

緊迫の気配

階下の状態は、特に異常は見られなかった。

待機していたコマのみ、その変化は見知った物であった。

誰の手も触れず、全ての物があるべき位置へと戻っていく。

この家の中では至極当然の出来事であるが、その不自然極まりない状況は、コマの気分を複雑にさせている。

だが文句を言う立場ではない為、目を閉じ、音をも聞かぬ振りをしてやり過ごすしかなかった。

「なんだ、やっぱり戻す必要はないじゃないか」

扉から出て来た時よりも、青い髪になったカラスに視線をやり、階上に姿を現した楓を見て、コマは少し安堵した。

そんなコマを見て、つまらなそうに鼻を鳴らし、カラスは白いソファに指を滑らせる。

「そうだプレゼントの日はまだ少し先だが、今回は何がいいのか言え。当日ここに来られるとは限らないからな」

そんなカラスの言葉に、階下へとおりてきた楓は父と共にカレンダーへと目を向けた。

十二月二十五日のクリスマスには、太い赤線で大きく丸がつけられている。

楓の母がいる頃からの取り決めで、この日は楓がプレゼントを貰える日になっていた。

「言えとはなんだ。楓ちゃんに命令する気か」

「……あー、めんどくせーな。もう俺とは関係ないから、やる必要もないのに声かけてやってるんだろぅが」

「そういう態度でのプレゼントなど、貰う側も気分が悪い」

「パパ！ いいの。だって、カラス先生は光が嫌なんだから！」

険悪な雰囲気の二人を、楓が止めに入れば、眉間にシワを寄せたカラスが睨みつけた。

それを見て、楓父が口の端を持ち上げる。

「そんな態度をとっていれば、当然の結論だな」

「うるさい」

からかう楓父の口調に、カラスは呻くように声を出した。

楓は余計に険悪にさせてしまったと、目を丸くする。

「あの、プレゼントなんですけど。ずっと聞きたかった事を、聞いてもいいですか？」

「へえ。だいたい自分の意見を言えるようになったのか。なんだ、言ってみろ」

「仰おつってください、お願いします。と言え」

即座に訂正を要求する楓父に、カラスは聞こえない振りを貫く。

楓は言いにくそうに小さく口を開いた。

「どうしてクリスマスが、プレゼントをくれる日になったんですか？」

「……そんな事か？」

呆れた顔で楓を見て、楓父へも視線をやれば無言で視線を返される。

自分に聞かれなかった事を、答える気などさらさらないのだろう。カラスは大きく息を吐き出した。

「お前の母親が決めた事だ」

「でも、理由があるでしょう？」

「……本当に分からなくて聞いているのか？ 少しは自分で考えろ」
「考えたの。この前聞いた事で、そうじゃないかな。思った事はあるの」

ゆつくりとカラスから目を離さずに、言葉を続ける。

カラスは目を細め、先を促した。

「それは、パパが吸血鬼だから？ クリスマスは神様の日なんでし

よう？ パパやカラス先生が人間じゃないから、ママはそう考えたのかな」

「……そうだろうな」

「そうに決まっている。彼女は私の為に、その日を作ってくれたのだ」

「お前だけの為じゃねーだろ」

深くうなずき肯定する楓父に、カラスが強い調子で詰め寄った。

楓はその様子に、閃く物を感じ取る。

「カラス先生も、ママの事が好きだったの？」

突然の発言に、楓父に掴みかかっていたカラスは酷くぎこちなく動きを止めた。黒い短髪がザワリと逆立つ。

怒りとも取れる複雑な表情で振り返ったカラスに、楓は大きくうなずいて見せる。

「そうよ。他に好きになってくれる人がいてもおかしくないもの」

「ふざけるなよ。彼女は光だ、その力を俺が狙ってただけの話だ！」

「でも、ママにプレゼントしてたんでしょ？」

さらに顔が赤くなるカラス。ネキがいれば、凶星ねと言い切っていた事だろう。

「そうだ。だからなんだ？ 光の力を手に入れる事が出来るなら、何でもするさ」

「そうだったな。別段用もないのに、怪我をしていないか。病気になるっていいないか、しつこいくらい家に来ていたな。だが、最終的には彼女は私を選んだが」

「……俺は、もう十分答えた。これ以上は誰が話すものか！」

「カラス先生。ごめんなさい」

ネキにされた事と、同じ事をしていると気がついて。楓は神妙に口を結んだ。

大きく舌打ちをしたカラスが、楓父を睨みつつ、

「断固として、抗うべきだった。来年のプレゼントはない物と思え」
「そうになると、庚^{かのえ}が悲しむだろうな。今までと変わる事なく、楓ちゃんにも愛情が注がれる事を望んでいた」

白々しく肩をすくめ、楓父は楓の肩に手を優しく乗せ、カラスには一言、帰れと告げた。

彼は片手で青い髪を乱すように掻き、ふと思い出したように話をかえた。

「そうだ、くだらない事で忘れる所だった。あの神経質なおっさんとの連絡が取れないぜ」

話を変えさせないように、たたみかけようとしていた楓父は眉をひそめる。

「ジャロック卿とか？」

「そうだ、それに吸血族の住処のキナ臭い噂が飛び交ってる。何かが崩れた、とな」

「ジャロック卿が……いや、まさか。そんなはずはあるまい」

「あー、とにかく伝えたぜ」

さつさと黒い扉に手をつき、水に沈みこむように扉の中へと身を滑り込ませ、消えた。

厳しい表情で思案する楓父は、心配そうな表情を浮かべる楓に気がつかない。

「パパ？ どうしたの、大丈夫？」

我に返り、楓を見下ろせば真つすぐな瞳とぶつかる。

固い表情は崩れぬまま、それでも楓父は笑って見せた。

「楓ちゃん、いいかい？ 大切な用事が出来てしまったね。私が戻るまで、何があっても絶対に、この家から出ないと誓ってくれるかい？」

尋常ではない様子である事は、楓にもはっきりと分かる。

真剣な顔でうなずいた楓に、少し待っておいでと自室に消えた。

嫌な予感に、楓は本人が気付かぬうちにコマの横に立ち、小さな手を灰色の毛皮を頼るように置いていた。

一分もかからず姿を現した楓父は、黒のタキシードに黒のマント。シルクハットを身につけている。

ピンク色のマフラーとミトン型の手袋をその手に持ち、楓に手渡した。

「パパ？」

「これはね、プレゼントの日にあげようと思っていた物なのだよ」
少し青ざめた顔で、楓は慌てて両手を後ろに回し、ショートボブを揺らして首を振る。

「どうして？ どうして今なの？ その日に貰うから、今はいらない！」

「そうはいかなくなってきたのだ。この布地には、楓ちゃんが危ない目に遭わないようにまじないをかけている。私が帰ってくるまででいい、出来れば寝る時も傍に置いて、いつでも身に着けておきなさい」

「……すぐ、帰ってくるんでしょう？」

「当たり前だろう。私が楓ちゃんから何日も離れた事があるかい？」

横に、首を振る。

「そうだろう？ 安心なさい。夕飯までには、必ず戻るから」
「パパ……」

マフラーを楓の首にかけてやる。

緩慢な動作で、前に出した両手にミトンを握らせた。

大きな手を重ねて、彼女の瞳を優しく見つめる。

「大丈夫だ。約束してくれるね？」

「うん」

大きくうなずいた楓の頭をなで、カラスと同様、閉まっている扉に手をついた。

黒い扉の表面が大きくさざめき、古い石造りだが美しく飾られた部屋が見えた。楓とコマが認識した瞬間に、彼とその映像は消える。

楓は、住み慣れた温かいはずのこの家が酷く寒々しく感じ、ミトンを握りしめながらコマの傍に身を寄せた。

残された者たち

いつものように陽が暮れて、暗く冷たい空気が周囲を占める。
電気もつけず、扉の横に座るコマに寄り添って座り、楓は彼の帰りを待った。

陽が完全に沈み、急激に冷え込むその中で、さすがにコマが口を開いた。

「楓。ここにいては足に障る」

「大丈夫。だってコマさん、あつたかいから」

上の空で呟きながら、茶色の瞳は黒い扉へと向けられる。
銀色の獣は、空気を動かすように立ち上がった。

「コマさん？」

楓が慌てて小さな手をその背に置けば、金色の瞳が返ってくる。

「俺はしばらく食べなくても平気だが、楓はそうもいかないだろう。育ち盛りだからな」

コマの言葉に、楓が目を見開き思わずふき出した。

何故笑ったのかは知れないが、とにかく楓の笑顔に安堵してコマは服をくわえる。

「……コマさんも、どこかに行くの？」

「いや。ヒトは火を通さないと物が食べられないんだろう？ だって俺が何か作ってやる」

「私が、育ち盛りだから？」

「そうだ」

真面目に返してくるコマに、楓は声をあげて笑いながら、固くな

ってしまった関節をゆっくりと伸ばすように立ち上がり、電気をつけた。

人工的な光でも、暗闇の中にいるよりか、幾分気持ち落ち着く気がする。

白い息を吐き出して、楓は自分の身体が冷え切っている事に気がついた。

「コマさん、料理出来るの？」

「とにかく食べられそうな物を切って、火にかければいいのだ。バイトでやっていたから、なんとかなる」

「そうなんだ。私でも出来そうだね」

「ああ、そうだな……ってゆーか、やっぱり駄目だ。楓が火や刃物を使うのは槇原様がいる時だけにしたほうがいい」

「……パパに怒られるから？」

「そうだ」

笑いを堪える楓を尻目に、コマは服をくわえなおし、洗面所へと消えた。

それを見送って、まだ少しだけ残る不安を心に押し隠しながら、楓は台所の電気をつけた。

暗い部屋が、光で満たされる。

家中の電気をつけて回りなくなる衝動を堪え、台所へと足を踏み入れた。

牛乳を大きなマグカップに入れ、電子レンジにかければ、低い電子音が当たりに響く。

オレンジ色の光から目をそらせば、人型になったコマが顔を出す。

「冷蔵庫を勝手に開けても、シツケをされないだろうか」

神妙な顔で楓に問うコマに破顔して、大丈夫だよと返した。

私が許可したって言えばいいんだからと付け加えれば、コマは納得したようにうなずいた。

小気味いい音を電子レンジが発し、楓は用意しておいたココアの粉を取り出したマグカップに入れる。

あちらこちらと棚を開け、包丁やら食材やらを取り出しては適当にぶった切りにしていくコマの後姿を見つめながら、銀のスプーンを動かす。

コマさんは、気にしていないのだろうか。

楓は心の中で、複雑な気持ちをコマにぶつける。

もちろん気がつくはずもないのだが、楓は振り向きもしない彼に、少しかだけ口をとがらせた。

コマが世話になったらしい、犬のような生き物を抱えていた女。その女性が言った言葉は、そばにいたコマにも聞こえていたはずなのに。

それについて、コマは楓に何か言うわけでも、聞いてくるわけでもなかった。

聞かれたところで、楓にとってうるたえてしまっただろうが。

スプーンの動きが、少しだけ早くなる。

コマに、自分の気持ちが図らずも伝わってしまったはずなのに。彼にとって、そんなにもこの気持ちは容易に聞き流せる内容であったのか。

ただの好意としか思えなかったのだろうか。

楓は、下を向いていたくなくてマグカップから目を離れた。

目の前には、せわしなく動くコマ。とはいっても切った食材を、

鍋に移しているだけなのだが、思わず目で追ってしまう。

「コマさん、ちょっとだけ聞きたい事があるんだけど」
「なんだ？」

大きな鍋に適当に水を入れ、蓋をしてから、コマはやつと楓を見た。

声をかけてはみたものの、どうやって切り出したらいいものかと楓は言葉に窮する。

それでもコマは言葉の先を急かすわけでもなく、台所の入り口に背中を預けた。

こんな時間に誰かが尋ねてくるはずもないのだが、この場所なら玄関も見渡せる。

「コマさんは、どうして人間と距離をおこうとするの？」

考えた結果、結局その言葉しか見つからなかった。

別段、驚くわけでもなくコマは腕を組み、楓を伺っている。

「前にも言ったでしょう？ コマさんは人間とは付き合わないのが、あたりまえだって」

「たしかに言ったな。距離……か。そうだな、それは俺が人間ではないからだ」

「でもそれは！」

楓を金色の瞳で制し、言葉が続ける。

「人間は、年月がたつと年をとる。だが俺はそのままだ。俺が姿を変えれば、人間は恐れ、追い立てる。それが、いかに仲の良い人間だったとしても、例外はなかったよ」

楓は、息を呑んだ。

どれだけ長く生きてきたかは分からないが、彼がどれだけ深く傷ついてきたかは伺い知れるほどに伝わってくる。

「ネキさんが、人間の一生なんて息を吐くほどに短いって言ってた」
「……そこまでじゃないけどな」

「傷ついたり、傷つけられたりした事は、年月なんて関係なく。ずっと残るんだよ。その人が思っている以上に、きつとずっと」

真摯に見つめてくる楓に、コマは小さく肩をすくめた。
何も言ってこない彼に、小さな手を強く握りしめる。

「でも、でもね？ これだけは信じて欲しいの。私は絶対にコマさんを裏切らないから！」

「そうか」
「そうかって……嘘だと思ってるでしょう。私が言うんだから、本気なんだからね！」

ココアが半分ほど減ったマグカップを、机に音を立てて置き、その勢いのまま立ち上がった。

苦笑するように金色の瞳は細められ、口の端が小さく持ち上がる。

「わかった」

強い火力に、蓋が激しく暴れ始め、中身が吹きこぼれる。

コマは慌てず騒がず、火を止めた。

人参やらの根菜類が全て生煮えで、散々な出来ではあったが、楓は味のないソレに調味料を駆使してやりすこす。

どうしても食べられなかった物は、手をつけていない物だけ大量

に残っている鍋に戻し、また朝にでも煮直す事になった。
大きな図体を、出来るだけ小さくしながら、コマは酷くうなだれた。

「……すまない。こんなに味がついていない物だとは思わなかった」
「いいよ。だって、明日も同じのなら、味がついてなければ違う味で食べられるじゃない」

「そういうものかな？」
「そうだよ」

力強くうなづく楓に、コマは少しかり救われた気持ちになる。
風呂を済ませた 沸かす作業は、ボタン一つなので助かった
楓を部屋の前まで送り、強く約束される。

「いい？ パパが帰ってきたら、どんなに遅くてもいいから起こしてね？」

「分かった。安心して寝るといい」

「……コマさんは、本当にどこにも行かないよね？」
「そんな事をしたら、後でどうなると思う？」

お互い、真剣な眼差しで見つめ合い、低く唸る声に楓は笑った。

「コマさん、そんなにパパが怖いのか？ 最近じゃ、だいぶ仲良くなってきたのに」

「仲良く……ってゆーか、力の差がありすぎるんだ」

「そうなの？」
「そうだろう」

獣の姿に戻っている彼に、楓は気のない返事をして部屋の扉を閉めた。

静かに扉の前で座っていたコマは、ベッドに入る音を確認し、階下へと戻る。

何の変化もなく佇む黒い扉を眺め、コマは定位置につく。まだ眠りについてはいないだろう楓の部屋の扉にも顔を向け、目を細めた。

全てに恐れられる。自分でも異形と思うようなそんな姿を、楓に見せた事はなかった。

血がたぎり、自分でも抑えきれない力が、どんな事態を引き起こすか。

それは過去の経験から分かっていた。気がついた時には、血だまりの真ん中で自らも返り血に染まり、破壊しつくされた家屋や自然の中にいた。

その時の記憶など、定かではない。

定かではないはずなのに、狂乱状態の自分が本当の自分なのではないかと思わせるほどに高揚していた事は分かったのだ。その状況を楽しんでいたのではないかと思うほどに。

もちろん我に返った時、変わり果てた周囲を見て、自分自身に絶望したのだ。

かつて自分を愛してくれた人間をも、この手に、牙にかけた事もある。

自分を殺そうとしてきたのだ。しかし、だから仕方ないと思えるほど、自分の持つ力の制御が今よりも出来ていなかった。

「俺は……」

楓父がいる事で、自分にも歯止めが利いていたのだらうとも思う。万が一の事があったにせよ、彼なら自分を止められるという事実

に。

だが、根底にある自分が、いつか楓も傷つけてしまうのではないか。という危惧にいつも自制を強いていた。

好意を寄せてくれる者でも、いつかは自分を敵視するようになる。

コマは強く目を閉じた。

一人の者に執心してはならない。そう、絶対に忘れてはいけな
事だ。

自制しなくてはならない。我を忘れるような、あんな酷く邪悪な
高揚感など、一度でも好意を見せてくれた者に与えてはならない。

たとえ、その時がこようと。

力を緩めて、目を開ける。

暗く沈む部屋の中で、金色の瞳は揺らぐ事なく、冷たく光ってい
た。

過去との対峙

白々と夜も明ける頃。

コマは外からの気配を感じ、薄く目を開けた。

気配というよりかは、においだ。懐かしくもあるが、相対したくない者の。

敷地内からではない。それは、いかに『彼』が力ある者だとしても、この土地に入り込んだりは出来ないだろう。

風上にいるのか。位置が分かるほどの場所に立つなど、酷く神経質な『彼』にはありえない。

どのようにして居場所を知ったのかは分からないが、あからさまにコマに向けて存在を主張してきている事は確かだ。

「……出て来いとも言っ気か」

そんなつもりは毛頭なかった。もう自分とは関係のない者だ。

現に、はるか昔に『彼』と離別した時、次に会う時は敵同士だと思えとさえ言われたのだ。

ここから動かなければ、侵入すら出来ない『彼』は諦めざるを得ない。

「今更、何を？」

ふと楓の部屋へと目を向け、ギリと歯を鳴らす。

狙うべきものは、彼女しかないだろう。

自分をどこかしらで見て後をつけ、光と呼ばれる彼女を発見したに違いない。

身を潜める事が得意である『彼』にとって、尾行などお手の物だっただろう。

いつからなのかは、この際問題ではない。

とにかく、楓を守りきる事が先決である。とコマは立ち上がった。

コトリと二階の一室で音が鳴る。

瞬時に総毛立ちながら、コマは一跳びに二階通路へと降り立った。

「楓！」

力加減などせず部屋の扉を後足で蹴破り、中へと転がり入る。

大きく開けた窓に手をかけたまま、驚いて振り返る楓。

コマは全身を使って窓際から引き剥がした。

「何をしている！」

「何って、コマさんの知り合いだっていう狼さんが外にいるの」

「いない！俺に知り合いなど、存在しない。いるのは敵だけだ」

「嘘！あの狼さんは、コマさんの事よく知ってるみたいだったよ」

「まさか、許可をしてないだろうな？」

「パパもいないのに、そんな事しないよ！」

抗議の声をあげる楓に低く唸りながら、ベッドから毛布を引きずり出して身体をくるむ。

人型に変化して、窓の外を用心深く窺った。

薄闇の中、たしかに一匹の大型狼が赤い瞳を向けている。

くすんだ灰色の毛並みは、所々に黒い毛が混ざり、コマよりも一回り大きい体格をしている。大きく違う点は、左耳がなく大きく古い傷が頭に残っているという事くらいか。

「出てこい」

疲れたような低くかすれた声は、はるか昔に聞いたものと酷似している。

「そんな義務はない」

酷くのが渴く。思わず引きつるような声になってしまったが『彼』は、構わなかったようだ。

コマの緊張が伝わったのか、楓が毛布を小さく引つ張る。大丈夫だとうなずき、手で楓に下がるよう指示をした。面白そうに低く笑う声が聞こえてくる。

「狼が義務を語るのか。威厳を忘れたか、イチの子よ」
「……俺は」

齒軋りをして、小さく楓を顧みる。
見守るかのように返ってくる茶色の瞳は、全てを包み込んでくれるかのように澄んでいた。

彼女なら、もしかして
そう思いかけ、頭を振った。

『希望』など、この世のどこにもなかった。そう、どこにもだ。

「俺は、人間だ。人の子として生まれた！ 貴様のせいで、この有様だ！ 今更……何をしに来た！」

背後から息を呑む声が聞こえた。
信じられない事実だったのだろう。一人の人間が、一匹の獣のせいで化け物に変貌するなど、誰だって信じたくなどない。
コマは振り返らなかった。彼女の顔を見られなかった。
どうしようもなく、窓の外に目を向ければ、狼が静かにこちらを

見ている。

以前にも、こんな事があった。
そう。もういつの記憶だったのか思い出せないほどの頃に

おぼろげにある、一番古い記憶。

部族同士の争いの中で、両親を失い、焼け出され、森へと逃げ隠れた。

冷たく暗い森の中で、死にかけていた小さな自分。

川の浅瀬に放り込まれて目を覚ませば、岸には『彼』がいた。

水がこんなにも大切な物だったと、初めて気付かされたのも、この時だった。

『彼』の隣には、大きな白く美しい狼。

つがいの彼らに、助けられたのだ。彼らが話す人の言葉を不思議に思いつつも、意思の疎通が出来る事に、安堵する。

彼は彼女をイチと呼び、彼女は彼をタイと呼んだ。

「お前は、私の息子になるの」

そうイチは言い、次第に自分の傍から離れなくなっていくた。

生きていく為には、彼らについていくしかなかったし、親しくしてくれるのに離れる理由などない。

深い森の中で教わった事は、棘を避ける歩き方。昼間でも暗い森に口を開けている深い溝の避け方。そして、一番強烈だったのは、大きな芋虫の食べ方だった。今では何の違和感も吐き気もないが。

幼かった自分に寄り添うイチには、子供がいたそうだ。

それが人間に殺された。それなのに自分を拾った事に、タイは辟易し、自分と関わりを持つとはしない。

その事も幸いしてなのか、イチは自分に傾倒していく。

そして、彼女は自分に秘密を明かした。人間にも変身出来る事、狼でも人間でもない事を。

だが、自分にはそれすらも関係なかった。

必要最低限しか命を奪わない彼らと、何の糧ともしないのに平気で殺す人間と、どちらにつくかと問われれば、彼らに決まっていたから。

しかし、人間である幼い自分が日に日に成長していくのに、イチは気の焦りを感じたのだろう。

彼女たちよりも、遥かに短い生命の現実には。

ある冷たい夜。

木々が激しく震えるほどの咆哮に、飛び起きた。

深く闇をもたらす森の中でさえ、差し込む強く白い光。満月の夜。

獣の姿だが、二本足で立っている白く美しい彼女は、荘厳ささえも感じられる金色の瞳を光らせて、熱い息を吹きかけてくる。

その場にタイがいたかどうかなど、分からなかった。

剥きだしになった大きな牙が、目前に迫り、右肩に走る激痛の中で意識を失った。

目を覚ませば、血まみれのタイが酷く疲れた顔で少し離れた場所から見つめている。

イチの姿が見えない事が、その時の自分には救いでもあった。

タイは何も言わず、自分も何も聞けなかった。

しかし、その時から自分は人ならざる者になってしまったのだ。

変化は疑惑を生み、年月が経つことに怒りや憎しみへと変わる。

タイは育てる気などなく、自分は彼にただ必死についていくしかなかった。

長い年月の間に森が少しずつ減っていき、その端を狼の形で歩く機会も増えれば、人間と触れ合う事も多くなる。

人間が、とても恋しいのだと痛感もした。

その時から、人の姿でいる事が増えたが、タイは何も言わず顔をしかめるだけ。

自分が愚かだったのだ。

親しくなった人間の子供に、いつかのイチのように秘密を明かせば、人間は自分を追った。

見世物にする為、そして従わなければ平気で殺そうする。

そんな人間の性質を知っていたはずなのに、それでも人間を信じたくて、親しくしてくれた彼に助けを求めようと逃げ込めば、悲鳴をあげられ、鎌を振り上げてきた。

その時の目の前が暗くなるほどの絶望と、湧き上がってきた怒りに声を上げた事までは覚えている。

しかし次の瞬間には、崩れた家屋に広がる血の海の真ん中に、自分は立っていた。

血まみれになった自分の下には、血肉の塊がどす黒い海に沈み、むせ返る臭いに息が出来ない。

目の端に映る、見知った顔。生きてはいないと見て取れるソレに近づく事も出来ず、ただ逃げた。

自分は人間の傍にいられる者ではなかった。

力の差がありすぎるのだ。

だが、それでも人間を見かければ、胸がしめつけられ、叫びたくなるほどの思いが湧き上がる。

しかし、傷つけない思いから人間とは極力関わらないようにしているのに、人間は自分たちを追いつめてくる。

獣の縄張りなど関係なく、平気で場を踏み荒らし、鉛玉を打ち込んでくるのだ。

油断し、追い詰められたタイが容赦なく彼らに牙を向ければ、自分が間に入り、とにかく逃げた。

そんな人間贖身が気に入らなかったのだろう。

「増え過ぎた獣は、狩り減らさねば悪影響しか及ぼさない。現実を見る、森はなくなり、獲物は減った。それは誰のせいだ？ 獲物が人間に代わった所で、何が悪い」

彼とて、半分は人間で。

おそらく自分よりも遙か昔は、人間であつたはずなのに。

タイは横暴で身勝手な人間に、牙を剥き始めていた。

それでも、人間と共に歩める道を選びたいと言えば、タイがはつきりとした敵意を自分に向ける。

「イチの子と思い、我慢していたが……限界だ、目の前から消える。次に会った時、お前は敵だ」

手酷い怪我を負わされながら、彼から必死で逃げた

そのタイが、自ら姿を現した。

コマは、今立つ所が、彼には踏み入れる事が敵わない場所だと分かっている、思わず身構えてしまう。

タイのような者でも、光に引きずられてしまうのか。と、舌打ちをした。

「何も『特別』な人間に興味があるわけではない」

心を読んだように、低いハスキーな声をかけられる。

それを素直に信用するはずもなく、金色の瞳を逸らさない。

一瞬、赤い瞳が憂いのようなゆらぎを見せたが、瞬きによってすぐに消える。

「凶悪な者たちが、その家を取り巻いている」

厳しい口調でそう言えば、何かを察したように毛を逆立て、空を仰ぎ見る。

すぐさま身を翻したタイに、コマが眉を顰めた。

「何を……」

コマの声にも、振り返る事なく彼の姿や気配までもが消えた。

この家にいる事で、感覚が鈍ったのかもしれないが、コマにはタイが感じ取った気配を感じ取る事が出来ない。

とりあえずしっかりと窓を閉め、考える。

警告の為だけに、現れたとでもいうのか。

すぐに治ると見越していても、なお酷い傷を負わせたタイ。

信用してはならない。だが、警戒はしてしかるべきなのだろう。

彼が危険だと言えば、それはいつだって正しかったからだ。

一人で生きていた少し前の頃と比べれば、感覚は酷く鈍っている。

だが、楓を護らなければならないと、気が引き締まる。

振り返ったコマに、楓が複雑な表情で見つめ、

「コマさんは、人間だったんだ」

「……思い出せないほど、昔の話だ」

重い口を開き、楓の本心を探るように目を逸らさずにいれば、思いがけずも彼女は嬉しそうに笑った。

「良かった!」

コマは意味が分からなかった。

聞き返してくる人間などいなかった。曖昧に誤魔化されたいと思いきすれ、まさか笑顔を向けられるとは思わなかったのだ。

面食らって、思わず聞き返す。

「何がだ」

「何って! 覚えて、ないの?」

「何をだ」

「だから、その……」

楓の顔が真っ赤に染まり、みるみるうちに表情が怒りを表している。

くるくると変わる彼女の表情と、普段とまるで変わらない態度に、コマは困惑した。

「コマさん、知ってて分からない振りしてるんでしょう!」

「だから、何をだ? ってゆーか、まだ早い時間だから。大声は近所迷惑だぞ」

「うるさい、うるさいっ! コマさんが一番うるさい! もういいよ、寝るから出てってよ!」

更に大声で喚いて、楓は毛布を巻いたままのコマを追いつ出した。

蹴破られた扉は、今の騒ぎの間に不思議な力のおかげで元通りになっている。

そんなけなげな扉を、また激しく音を立てて閉めた。

「コマさんのバカ。好きって……そんなに、流されちゃうような事？」

小さな呟きも、コマの耳をもつてすれば届いているかもしれない。楓は聞こえてもいいつもりだった。

だが、きっと彼は聞こえない振りをするのだろう。もう人間ではないのだから。と、そんなつまらない理由で。

それじゃあ答えにならないよ。

楓は、心の中でそう呟いてベッドに潜り込んだ。

楓父に貰ったマフラーとミトンを握りしめる。

同じ状況にあったはずの、写真でしか顔の知らない母を想いながら、楓はきつく目を閉じた。

夜を越えても、楓父は帰らなかった。

コマは狼の姿に戻り、定位置に身体を丸める。

楓の呟きは確かに聞こえていた。だが、だからといって応えられない事も分かっている。

ならば何も聞かなかった事にするのだ。それも、いつもの事だ。

コマは、小さく焼け付くような痛みを胸に感じる。

それを宥めるように、誤魔化すように鼻を尻尾の下に入れる。彼女を護る為に戦うという事に異存などない。むしろ本望だ。

だが、これから煮えない野菜にまた悪戦苦闘する事を考えれば、
思わずしかめ面になってしまうのであった。

囚われた獣

太陽の光が海に乱反射している昼日向。

埋め立てられた一画に、建ち並んでいる倉庫の群れ。そこにはヘルメットをかぶった人間やフォークリフト、トラックが忙しく行き交っている。

しかし、一度夜という闇の幕が辺りを包み込めば、そこには誰一人いなくなり、黒く染まった海の波音だけが寂しく響き渡る。

その中の一棟に、蛍光灯とは違った柔らかく揺らぐ光が灯っていた。

四つの蠢く影は、頑丈な鎖で幾重にも縛られ、動きが封じられている一人の女を囲んでいる。

足がつく程度に吊るされ、力なくうな垂れている金髪の女 ネ
キはまぶたを閉じたまま身動き一つしない。

「起こしなさい」

甘く絡みつくような少女の声が、埃っぽい室内で響く。

蠟燭の火が、それに合わせるかのように小さく揺れる。

暗がりの中から、美しい少女が歩を進める。印象的なのは、大きな目だった。鳶色の長髪はゆるく巻かれており、同じ色の長い睫毛に包まれたオニキスのような黒い瞳。

黒色のレースで作られたドレスは、とても彼女に似合っていて、見る者に清楚で可憐な印象を植え付ける。

彼女の小さな手を取り、エスコートしている黒い長髪をした長身の男が、その言葉に従い空いている手を横に払えば、積み重ねられている大きな金属部品の一つが空を切り、ネキの脇腹をえぐるように強く打つ。

声にならない声をあげ、ネキは目を大きく開いた。

見開かれたその青い瞳は怒りに燃えあがる。少しでも近付けば、八つ裂きにされそうな眼差しも気にする事なく、少女は困ったような表情で小首をかしげた。

「あなたがいけないのよ？ 私だって、こんな酷い事したくないの」

ネキが鎖を引いても、ちょうど届かない位置に彼女は立つ。

淡いオレンジ色のルージユをひいた、美しい少女は楓と同じくらいの年齢にも見える。

つまらなそうな表情で、怒りに震え唸り声をあげるネキに向け、ため息を吐いた。

「一言だけでいいと言っているのに、どうしてそんなに聞き分けがないの？」

「イレイン、これの腕を落とそうよ」

「マノ。そんな品性のカケラもない発言、控えて欲しいわ」

イレインと呼ばれた少女は、嫌悪の表情で金髪の少年を睨む。

おどけるように舌を出した少年　マノは、小さく肩をすくめた。

「そうだぞ、考えなしだな。簡単に腕を落とすとか言うなよ？」

「バディックなんかに、言われたくないよ！　一番ヴァンパイアらしくない奴が、なんでここにいるんだよ、消えろよ」

美しく柔らかいブロンドを肩まで伸ばし、白くなめらかな肌に大きな金茶の瞳が人形のように煌いている。その少年から吐き出される言葉は、酷く幼く、冷酷である。

タキシードをその身にまとっているというのに、黙っていればイレインに負けないほどの美少女と思われるほどだ。

一方、バディックと呼ばれた男は、その風体とは真反対だった。浅黒い肌に、硬そうな白短髪を後ろに流し、筋肉質な体つきの上にまとっているのは、ジーンズに黒のシャツ、白のスカジャンを羽織っている。

マノに比べ、彼ははるかにヴァンパイアには見えず、あっけらかんとしている。

それ故かマノの言葉に怒るでもなく、バディックは灰色の目を細め楽しそうに笑った。

「だからガキだっていうんだ。よく考えろよ、腕をその都度落としていたら、アレだ。普通、腕足は四本しかないだろ？ あつという間に切る場所がなくなるだろうが。大事な言葉を聞き出すまでは、頭を落とすわけにもいかんしな」

なんでもない事のように明るく話すその内容は、果てしなくえぐい。

鼻を鳴らし、マノは彼を無視してイレインの傍に寄る。

「なあ、イレイン。こんな面倒くさい事してないで、やっぱり他の人間を操って光を誘い出したほうが早いんじゃないかな？」

「ダメよ。あの建物に入れないという事は、敵という事になるわ。

これは試練なの、自力で光を取り込めたら、あの方はきっと私を認めてくださる」

「だったらよ、こいつを操って……」

「ばっかじゃないの？ それがそんな簡単に行くなら、こんな苦労してないっての」

バディックの言葉を遮って、マノが冷たく嘲った。

少女の隣に立っていた長身の男が、重たい口を開く。

「この女には、何かしらの呪がかけられている」

「グレッグでも解くのが無理だって事は、あいつがかけたんだと思うけどね」

「マノ。あの方を、そんな言い方で呼ばないで」

イレインがたしなめれば、金髪の髪をサラリと揺らしてもう一度肩をすくめた。

「じゃあやつぱり、力づくってこつたな」

「そういう事」

マノがうなずいて見せれば、バディックが指を鳴らし、舌なめずりをするように、鋭利な牙を剥き出しにして笑った。

ふと気付いたように、バディックは振り返る。

「ところでよ、何の言葉が知らねーけど。聞き出してどーすんだ？」

「さっきイレインが言っただろ？ イレインはあの方の傍にいたいだけなのに、敷地にすら入れないからさ。まず入る事が出来さえしたら、あの方との恋路に一步前進ってやつ」

「そうか。そりゃ難儀だな」

「だろ？ それに、こういう役目はあんた好きそうだし？」

マノの流れるような言葉に、褐色の彼はなるほど唸った。

「じゃあ、こいつの鎖を外してもいいか？ 虎と戦えるなんて、よっぽどねえからな」

「ダメよ、逃げられたらどうするの？」

「逃がしやしねーから！」

「ダメったら、ダメ！ せっかく捕まえたのに、万が一にも逃げられたらと思うと……卒倒しそうだわ」

小さな両手で顔を覆う彼女の肩を優しく抱き、グレッグは切れ長の目を細め、バディックを睨みつけた。

「イレインが倒れたらどう責任をとるのか」

「……分かったよ。睨むなって！ まあ、縛り付けられた獣を殴ったところで、楽しくもなんともないんだがな」

深くため息を吐き、肩を回した。

そのやり取りを、ネキは静かに聞いていた。彼らの顔をその目にしっかりと焼き付ける。

昼間には出てこられない彼らのその隙に、鎖を切ろうと何度も試みた。

虎の姿になっても、抜け出す事は難しかったのだ。

普段のネキならば、こんな鎖くらい糸を切るほどに容易い。それなのに切れなかったという事は、何かしらの呪がかけられているとしか思えなかった。

声を上げて、磨りガラス越しに見える人影が反応する事はなく、諦めざるを得なかった。

逃げられはしない、だが何かしなくては腹の虫が承知しない。

こんな奴らと付き合うよりも、楓に頭をさげて猫なで声を出したほうが、どれほどマシか。

つまらなそうに、ゆっくりと近付いてくる図体の大きな男に向けて、ネキは低く獰猛な唸り声をあげた。

爛々と目を反抗的に光らせて、敵愾心を燃やす。

「お前に恨みはねーが、頼まれ事だからよ。死にたくなけりゃ、さっさと吐いた方が身の為だぜ？」

言うが早いか、大きな拳が細く締まった身体にめり込む。
金属の塊とまったく同じ所だ。ネキは歯を食いしばった。

「あたしが……自由になったら、お前らまとめて殺してやる」
「おう。そーなったら、俺も本気出せるんだがな」

気楽に喋るバディックが、もう一度同じ所に蹴りを叩き込む。
乱れた金髪を直す術もなく、低く呻く。バディックの背後から無表情に見つめてくるイレインを、暗い瞳で睨みつけた。

こんな仕打ちなど、効きはしない。

ネキは今まで散々されてきたシツケを思い出して、口の端を持ち上げる。

思えば、鍛えられたものだ。ひょっとしたら、その度にどうやったのかは知らないが彼に強化されていたのかもしれない。

いくら獣人の治癒能力が高いとはいえ、鉄の塊を酷くぶつけられて、血も吐かなかったとは自分でも信じられなかったからだ。

「何故、笑っているの？ 気分が悪いわ、やめさせて」

「バディック。何を手加減してるんだよ」

「してねーって！ 虎女は、こつも頑丈なのか？」

節々が盛り上がった両拳の関節を鳴らし、バディックは笑う。

頭まで筋肉で出来てる奴を扱うのは、簡単でいいな。

そうマノは心の中で呟き、舌を出した。

血族の城主

楓父は、黒い扉を抜けた先で静かに佇んでいた。

鳥の声一つしない鬱蒼とした森の手前に、古びた城が常闇に包まれ悠然と構える。

視線を上に向ければ、蝋燭の灯であろう温かなオレンジ色の光が、この冷たく凍りついたような城の所々の窓で揺らめく。

そんなちぐはぐさに、訪れる度に苦笑して、楓父は草を踏みしめた。

建物をぐるりと囲っている灰色の高い塀に沿って進む。

飛び越えて潜入する事も簡単だが、ジャロックの状況も分からずに騒動を起こす事はためらわれた。

生き物の気配すらしない森と陰湿な建造物に挟まれた、道なき道の先を見る。

一步一步、ゆっくりと足を進めながら、神経を研ぎ澄ます。

ジャロック卿の失踪がすぐさま楓父の耳に入り、この場へと訪れる事など見抜いているだろう。

白髪で、彫りの深い端正な顔立ちをしているジャロック。

いつも洪面で寡黙な彼から、時折発せられる低く響く声には、不思議と逆らえない独特な魅力がある。

永い時を生きる彼らの中には、感覚が鈍くなり、血を浴びてただそこに存在するだけの者や、正気を失い同族、人間関係なく襲い始める者。

そんな者たちを統べているのがジャロック卿だ。

彼が普通の吸血鬼だったならば、事は簡単に済んだだろう。

こんな形だけの塀など飛び越え、彼の痕跡を辿り、助け出して恩

を着せればいいのだ。

だが、そんな簡単ではないだろうと楓父が警戒する一番の理由は、彼も『特別』だからである。

普通の血族どもが、太刀打ち出来るような人物ではない。そのはずなのに

「お待ちしておりました。ジョイス・フィネガー様」

一枚岩を切り出した大きな門の前で、足首まで闇色のマントで覆い、同色のフードをかぶった女が声をかけてくる。

それに返事をするでもなく、楓父　ジョイスは、ただ切れ長の目を細めた。

期待などしていなかったのか、女はマントを翻して城へと続く石組みの橋を渡っていく。

堀と呼ばれるには底の見えない裂け目にかかる橋は、誰が乗った所でびくともしない。

豪奢なフロアに足を踏み入れた所で、マントとシルクハットを外し、身なりを整える。

「勝手知ったる城だが」

脱いだ物を預かろうと伸ばした手を断り、冷たく瞳を光らせた。

「いつから血の臭いが充満するような作法がまかり通っているのか」

漂うなどとは程遠い、臭いの渦にジョイスは顔を顰める。

女は答えに逡巡したが、答える事はなかった。

「ご案内致します。少々、お待ちください」

そう言い残し、彼女は隣の侍従部屋へと消えた。

ジョイスは吹き抜けになっっているフロアへと目を向ける。眼前には敷き詰められた美しい緋色の絨毯が広がっているはずであった。今ではどす黒い汚れ目がまだらに広がっている。

大きなシャンデリアの蠟燭も所々消え、大理石で造られた壁も気持ち拭き取られているだけで、なにかが飛び散った様ははつきりと見てとれる。

本当に、いつから墮落していたのか。

踏み出せば、確実に革靴が痛みそうなその湿った床に、さすがのジョイスも眉間にシワを寄せた。

整然とした美しさを誇るこの城が、嫌いだった。

錠に縛られ、それを押し付けられる事に反発もした。

この城を出てからというもの、爆音を撒き散らす人間の集団を、八つ当たり気味に潰しまくった。

それで何かが変わったかと言えば、ただのウサ晴らしなだけであつたが。

いつまでも続くと思っていた城が、このざまか。

しかし実際この無様な状態を見てしまえば、以前の華やかさがこんなに名残惜しくなるものかと、ジョイスは軽く見回しながら、苦虫を噛み潰した。

「これだから平常心を失った輩は……革靴が汚れても構わなくなつたら、お終いだな」

侍従部屋に消えた女は『待っていた』と言った。

画策した者は、卿の話がジョイスの耳に入りさえすれば、すぐに

でも現れると思っていたのだろう。
事実、その通りになってしまったが。

「ショーは、始まったか」

この場所で、自分の持つ力を隠す必要などあるはずがない。
冷酷に光る深紅の瞳は、いつになく楽しげに輝いていた。
音もなく浮かび上がり、階上に降り立つ。

足場の気持ち悪さは、どの階も同じなのだろうか、眉間にシワを
寄せ辟易するしかない。

この城にジョイスが入り込んだ事など、当に知られているだろう。
赤黒く染まった、白の扉に手を触れる事もしたくない為、力で扉
を開ける。

現実には、吹き飛ばしたわけだが。

蠢く血族どもの姿は視覚としては見えないが、はっきりとこちら
を窺う様子が感覚として分かる。

一際、二オイの強く集まっている気配の一室で立ち止まった。

『入っていいぞ』

声ともつかない声が、ジョイスの脳に語りかけてくる。

金で造られたドアノブに触る事なく、先程と同じように吹き飛ば
してやった。

それはもう気持ちが良いほどの勢いで扉が弾け飛ぶ。

中からその状況を喜ぶように、一人の血族が手を叩いてジョイス
を招いた。

その広い一室には、他のどの場所よりも血の二オイが充満し、数
名の血族が陶醉するように微動だにしない。

カウチに横になる者や、豪華な椅子にもたれかかり動かぬ者。

ただ一人、奥の椅子に腰掛けた二十歳前後にも見える男だけが足を組み、その惨状を眺めるように座っていた。

「思っていたより遅かったな」

「……コートニー。ジャロック卿はどうした」

まだ子供のような声で、楽しげに笑う男　コートニー。

用事を早く済まそうという雰囲気隠す事もなく、ジョイスは言葉の口にする。

「グレッグは、何をしている」

「やーだな。何だよ、結論なんてどうだっていいじゃないか。せつかく『オモテナシ』しようって用意したのにさ、そんな堅苦しいマントと帽子なんて捨てて楽しもうぜ」

コートニーはワイングラスを持ち上げ、中に入った赤い液体を回して見せる。

横に備え付けられている小さなテーブルに、とりあえず手持ちの物を置き、呪をかけた。

家にかけているモノと同じ、何があっても『在り続ける』類の呪を。

「私にはそれは必要ないと、ジャロック卿から聞かなかったのかね？」

「あいつはこの地位を降りたんだ。そんな奴の話に耳を貸す事なんて、ないだろう？」

ジョイスは、その部屋に一步踏み込んだだけで、席につこうなどとは思うべくもなかった。

この男の事は、城を離れる前から知っている。

ジョイスを慕い、しつこく後について回っていた。

血族の力としては、特に突出していたわけでもないコートニーが、何故ジャロックを陥れる事に成功したのか。

この踏み込んだ一歩とて何かの罠かもしれないが、ジャロックとは違い、ジョイスには例え城を粉碎しようとも、目の前の血族を何十人と消すことになろうとも、なんの気兼ねもない。

力を思う存分使えるだけ、ジョイスのほうが自由である。当然、その点もコートニーは分かっているはずなのだが。

「なんだ、本当に飲まないんだ？」

「もう一度だけ聞く。ジャロック卿とグレッジはどうした」

つまらなそうに首を竦め、コートニーは唇をとがらせる。

「あいつらはあいつらで、お楽しみの真っ最中さ。邪魔は出来ないぜ」

「それが答えになっていると思うているのか？」

「ふん、だからなんだよ。俺はこの城主になっただ、言う事を聞いてもらおうか」

「断る」

言い出す言葉は、分かっている。そう言いたげにジョイスは考えるまでもなく却下する。

コートニーは苦笑し、ワイングラスをテーブルに戻した。

「そう言われてもな。城主として皆を統べるには、光が必要なんだよ」

「お前は、その器ではない」

「それは光の力がないからだよ。だからこの液体で皆の心を掴むしかないじゃないか」

「そんな粗末な考えしか浮かばないのだろうか？　くだらん」

鼻で笑い、ジョイスは目の前に存在する物全てが邪魔だとも言うように右腕を横に薙いだ。

ぐったりと動かない者どもと家具が、容赦なく壁に叩きつけられる。

コートニーはそれを見ても、楽しそうに手を叩いた。

再会

「やあ！ やっぱりジョイスのやる事って、楽しくてしょうがないよ」

自分の前からテーブルが吹き飛んだというのに、コートニーは椅子に座ったまま、感慨深げに何度もうなずいている。

コートニーごと、薙いだはずだった。ジョイスは少しだけ眉を寄せ、気を張り巡らせる。

さもおかしいとばかりに黒い短髪を揺らしながら、笑い声をあげた。乾杯でもするようにグラスを目前に掲げ、小さく首をかしげてジョイスを見る。

「力比で勝った事なんてないけどさ、今度は俺の番だよな」

身構えるまでもない、子供っぽい彼に『特別』な自分が負けるはずがないのだから。

だが、なぜコートニーは床に転がっている同族共と同じ末路をたどっていない？ 疑問が脳裏に浮かんだ瞬間、彼が楽しげに声を発した。

「いつてらっしゃーい」

吹き飛ばした同族共が、ゆらりと立ち上がる。粉々に消し飛んだ蠟燭の灯もなくなった、薄暗い部屋の中で、いくつもの赤い目が陰湿に光っては消えていく。

まっすぐに立っているはずの視界が大きく歪んだが、ジョイスは嘲るように口を持ち上げて、誰よりも強く瞳に怒りの灯をともした。
「幻覚か」

眩いた瞬間　瞳が捉えた物は、陽の光をたつぷりと浴びた見慣れた邸宅。

だが、慌てず騒がず、ジョイスは右手を正面に向け、見えなくなったコートニーに対して声をかけた。

「加減はやめだ。城もろとも消えるがいい」

恐ろしいほどの瘴気をまとって、力を解放しようとした瞬間、黒い扉が開く。

中から出てきた人物に、ジョイスは驚愕に目を見開いた。

「ジョッシュ、お帰りなさい！」

楓に似ているが、柔らかそうな黒髪は腰まで長く、妙齡の女はジョイスを見て、輝かんばかりに笑顔を向けてくる。

「……かの、え」

死んだはずだった。

彼女を守りきれず、自分に全ての力を託して消えたはずの彼女が、目の前にいる。

溢れ出す嬉しさを隠す事なく、軽やかに走ってくる^{かのえ}庚に、ジョイスは来るなどなんとか声を絞り出した。

ジョイスの胸に飛び込む前に立ち止まり、彼女は首をかしげて不満そうにふつくらとした唇をとがらせた。

「ジョッシュ？」

子供が拗ねるようなその物言いに、懐かしさと愛しさで心が満たされる。幼い頃、庚はジョイスと言えず、舌つ足らずな声でそう呼び、大人になってもその呼び方は変わる事はなかった。彼女だけが、自分をそう呼んでいた。

振り上げた右手は、握りしめられ　だが、下げるわけにもいかない。自分の中で、こんなにも強く彼女を慕う心があったのかと、葛藤に奥歯を噛みしめた。

「ジョッシュだったら！　楓も待ってるのよ、パパ遅いねって」

黙りこんでしまったジョイスに、可愛い顔に怒りに染めてのぞきこんでくる。

一歩も、動くわけにはいかない。そうしてしまえば、後はコート二丁の思いがままだろう。

「楓の父親は、どうした」

かすれる声に、心の中で舌打ちをしながら庚に声をかければ、何故そんなに驚く必要があるのかと思うほど、彼女の顔が表情豊かに変化した。

「あなた以外に、誰がいるって言うのよ」

そんな事実など、現実にあるはずがないというのに、胸が高鳴った。

ずっと望んでいた夢幻が、ここにある。

「いつもどこでお仕事してるのか分からないけど。私だって、心配するんだからね？」

そう言って、ジョイスに抱きついた。その柔らかい身体に、覚えのある花の香り。

ずっと望んでいた目が眩みそうな状況に、思わず彼女の背に腕を回した。幻覚とは思えないほどの感触が、彼を包む。

だが、幸せな表情で目を閉じた庚とは反対に、抱きしめたまま彼は苦悶の表情を浮かべていた。

「……庚」

「ジョッシュ？　ちよつと、痛いよ」

強く抱きしめれば、庚が小さく悲鳴をあげる。きつく閉じていた目を開け、少しだけ力を緩めた。

現実では、決してない。

「ジョッシュ？　どうしたの？」

この甘い声も、柔らかい身体も、滑らかな黒髪も。現実ではないのだ。

震える手で彼女の髪をなでれば、嬉しそうにジョイスの胸に頭をすり寄せてくる。生きていた彼女が結婚する前にしていた、幼い頃からの仕草。

全て、自分の心が反映した世界。

心深くに沈めていた思い出を引きずり出され、都合の良いように捻じ曲げられた世界。

大切にしていた者を、踏みにじった世界。

「庚。また会えて良かった」

「もう、何の話をしているの？」

苦しそうなその声に庚が顔をあげれば、オニキスの瞳が優しく、だが憂いを含んで見つめていた。

離さぬように抱きしめたまま、景色が一変する。

彼女の最期を看取った、その場所に。

抱きしめていた庚から、力が抜け落ちた。血に染まった彼女が、ジョイスに手を伸ばし優しく頬に触れる。

「ジョッシュ……うん、ジョイス」

彼女の問いかけに、答えられるはずもなかった。二度も自分の目の前から消えていこうとする彼女を、どうする事も出来ないという事を、ジョイスが一番分かっている。

苦しいはずの彼女が笑顔を作る。

「楓を、お願いね？」

「……当たり前だ」

以前したのと同じように答えれば、彼女も変わらず小さく笑った。
「ねえ……嘘でも、いいの。愛してるって、言ってる？」

応えなかった。だが、そんな事実は存在しない。

ぐっと言葉を噛み殺し、顔を歪めて彼女を見ているしかないのだ。
いつかの自分が、そうしたように。

「庚っ！」

状況に気づいたカラスが、悲痛な声で叫ぶ。だが、敵を近づかせないようにするのに、手一杯でこちらに来られずにいる。

「分かってる、から。苦しそうな顔、しないで？ それでも、私は

ジョイスが、好きよ」

だから　と、彼女は輝き始める。

「私の光を、ジョイスにあげる」

「……やはり、駄目だ」

「こうするしか、ないのよ。分かるでしょう？」

自分が発した言葉は、過去にはなかった。だが、強いまなざしで
庚がたしなめる。

「庚、愛してる。君が　おそらく私を意識してくれるずっと前から」

「私に、勝てると思うの？　会ったその日から、あなたしか見えて
いなかったのに」

青白い顔で、だが嬉しそうに笑った彼女を、ジョイスは抱きしめ
た。

記憶にない言葉に、これも自分がコートニーが捏造したモノかと
疑ったが、だったら彼女は死の淵に行く事はないはずだ。

庚は、血にまみれた顔で艶やかに笑った。

「あなたは、楓を護るの。私に誓ってくれたでしょう？　忘れたの
？」

「庚……？」

「こんな形で再会出来るとは思ってたけど。私も、ジョッシ
ュに会えて良かった。私が消えないとあなたは元の世界の戻れない
もの」

わかってるわ、とジョイスの頬を両手で包む。

「言ったでしょう？　私は、あなたの中にいるの。愛を持って、光
を受け取ってくれたから」

驚きに動けずにいるジョイスに、彼女は優しくキスをした。

「大好きよ。いつだって、ずっとここにいるのよ」

厚い胸板に手を置いて、力なく微笑む。

混乱して、言葉も出せずにいたジョイスはその細い手を握り、自

ら彼女に口づけを落とした。どれだけこの時を望んだか。酷く震え

て、合わせるだけのソレに、彼女は一粒の涙をこぼした。

「楓を、よろしくね」

「ああ」

そして、以前と同じように、彼女の首元へ牙を向けた。

変化する者、しない者（1）

彼は、深い眠りに落ちた。

それを確認したかのように、無数の蝙蝠が寄せ集まり、人型となる。うごめいていた蝙蝠が姿を消すと同時に現れた長い銀髪を持った男は、薄茶色の瞳をジョイスに向けて、くつくつと笑った。

部屋に踏み込んだ事が罨なのではない、城へ踏み入れた時からすでに仕組まれていたのだ。

部屋には、一切の家具は置かれていない。くだらない生物に成り下がった同胞など、どうして取巻きにしておくものか。敷き詰められたどす黒く染まった絨毯の上を軽やかに進む。

「光を取り込んだ奴ってさ」

直立したまま目を閉じているジョイスの顔をのぞき込む。端正な顔を傷つけてやろうか、という衝動もなくはない。

「それが一番の弱みになるんだぜ？」

息がかかりそうなほど近付き、微動だにしない彼に肩をすくめた。仕事は終わったとばかりに彼から背を向け指を鳴らせば、壊れた形跡のない扉が静かに開き、一人の青年がジョイスの手を取り、案内をするようにそっと引く張る。

夢幻に沈む彼は、導かれる方へと足を向けた。

「イレインに、捕獲したって連絡しなきゃな」

口笛を吹きそうなほど機嫌良く、彼らとは反対方向となる部屋の奥へと足を踏み出す。

しかし、何かに絡み取られたようにそれ以上進めなかった。
動いたら死ぬ。そんな想いに囚われ、背筋が寒くなる。振り向く
事も出来ない。

「首謀者は、あの小娘か」

真後ろからかけられた、心地良いほど聞き慣れた低い声に、コー
トニーは目を見開いた。

たんなる恐怖感からではない。背中に死を背負っているも同然だ
った。

「そんな……」

かすれたソレではあったが、それでも声が出せた事は奇跡に近い。
静かに話されるほど、恐れは増していた。

自分の力は、通用しなかったのだ。夢幻から抜け出す為には、愛
する者をその手にかける事でしかない。
自然とその細身に震えが走った。

「コートニー」

その声が、男を縛る。震えは更に大きくなった。

「コートニー」

元々、青白い顔をしている彼の顔色は、もはや白に近い。

鋭くとがる牙をむき出しにして、コートニーは引きつるように笑
った。

泣いているかにも思えるそれは、やがて嘲笑にも聞こえる高く激
しいものになる。

振り返ったコートニーの目の前にいる男は、部屋に入って来た時の短髪ではなく、腰まである美しい黒髪をなびかせていた。出会った頃から、見知ったその姿。

「帰って、来たんだね。また前みたいに、一緒に恐怖をばら撒きに行こうよ!」

「コートニー。貴様はしてはならない事をしたのだ」

「夢の中で殺した奴の事を言っているのなら、お門違いだろ? 自分の手で殺せたんだから、それは未練を断ち切れたって事じゃないか」

手を伸ばせば、すぐ届くその位置に憧れの彼がいる。

髪が元に戻ったという事は、その強悪な心も戻っているのだろう。昔のように。

コートニーは嬉々として、声をあげた。

「だからさ、俺達の方にノッてよ。さすがにジャロックの爺さんを殺すだけの力がなくなつてさー、困つてたんだよねー」

人さし指を立てくるりと回し、だからさ。ともう一度繋げる。

「あんたなら出来るだろ? 簡単にさ」

「ああ、簡単だ」

ジョイスはその響くような甘い声で、淡々とそう答えた。その言葉を受け、コートニーは目を輝かせる。

だが、ゆつくりと持ち上げられた右手に、表情が強張った。薄茶色の瞳は逸らす事が出来ず、彼の行う緩慢な仕草を見続ける。

「力は、効かないって。さっきので分かつてるだろ?」

震える声を、かろうじて絞り出し、銀色の長い髪を小さく揺らした。

無表情のままのジョイスは、その瞳を赤く染める。

「幻覚ならば、うるたえる必要もあるまい？」

「うるたえてなんてないさ」

「ならば好きにさせてもらおう」

「……あんだ、変わったな。前置きするなんて、人間なんかに構ってるからかよ。そんなんじゃないかっただろ！」

そうだ。そんな男じゃなかったはずだ。とコートニーは悔しそうに歯を噛みしめた。灰となる恐怖とジョイスの変わり様に、葛藤を隠せない。

「やっぱり光がいるからいけないんだ。あんだが駄目になる」

「……言いたい事は、それだけか」

「山ほどあるさ！　なんだよ、昔の気迫がないじゃないか！　いるだけで周りが見えないほどのあの悪意はどこいったんだよ、光を渡せよ。あいつの存在が、あんだを駄目にする！」

「貴様が滅びれば、何の問題もあるまい。存在すべきは彼女であり、貴様ではない」

風通しが悪く、薄暗い一室であるというのに、ジョイスの周囲に気流が発生する。

白く柔らかな光が彼を包み、黒髪を弄ぶように吹き巻き始めた。

コートニーは恐怖よりも、その光に魅了された。目を見開き、その風に誘われるように銀髪がジョイスの方へと引き寄せられる。

「俺がいなくなったら、爺さんにかけた術が解けないぞ！」

自分に出来た事ならば、おそらくジャロック卿とて簡単にはずだ。それが何を手間取っているのか。もちろん、分からないではなかったが、舌打ちをしたい気分だった。

こんな小者など、本来ならば相手にするべくもないのだが、赤い瞳に何度も映る厄介なモノに、長い事苛立ちを覚えていたのだ。

楓が、徐々に自分から離れていってしまったている事実。

こいつさえ、いなくなれば。と何度思った事だろう。

だが、楓が彼を気に入る、想いを寄せているというのに、平気で危ない目に遭わせようとする男。

それを見せつけられ続け、彼女の為に消す事さえ容易ではなくなってしまうた銀髪の男。

「悪い虫は、やはり最初に潰さねばならん」

「はあ？」

「迅速に、確実にだ」

「な、何の話を……！」

剣呑な光に染まった赤い瞳が、目の前にいる銀髪の男を捕らえる。闇を撒き散らしていた頃とは違う彼にとまどいながら、コートニ―は自らを無数の蝙蝠へと姿を変えようとした。

瞬間、部屋の中に光が溢れる。

日中の陽差しのような、鋭く白い光。

「いやだ！ 俺は、まだ……！」

光と風の本流に、コートニ―の姿が掻き消える。

その光が収まり、暗闇が色濃く辺りを覆った。正面にあったはずの石壁は消滅し、小さな破片が音を立てて落ちてくる。

ぽっかりと口をあけた向こう側には、鬱蒼とした木々がのぞいていた。

その場に佇むジョイスは、何の感慨も憂いも見せる事なく、シルクハットとマントを取り上げた。

それを被るわけでもなく振り返り、扉を蹴り飛ばす。

八つ当たりが足りなかったかのように。

変化する者、しない者（2）

吹き飛んだ扉の向こうには小さな蝙蝠が跳ね回り、すぐに人影へと姿を変えた。

一番初めに迎えた、黒いフードを目深にかぶった女がジョイスの前に立ちふさがる。

「お待ちくださいと、申し上げたはずですが」

「私は綺麗好きでね。汚れた物を一掃したただけだが、何か問題でもあったかね？」

「でしたら、城内全てお願いしたく存じます」

「誰がやるか」

そう言い放ち、顔の横に垂れた一房の黒髪に気づく。舌打ちをして、自らの長い黒髪に一瞥をくれれば、瞬時に短髪へと姿を変えた。女は少し呆れながらも、彼を導く為、先へと歩き出す。

「長い髪がお似合いですのに」

「心して聞くがいい。男は短髪こそ似合うもの、これが楓ちゃんの言葉だ。リディアの好みなど必要ない」

「人間の娘に、それほど感化されてしまわれるとは……おかしいものですね」

おそらく楓本人も覚えてはいないだろうその一言が、ジョイスの中で大きく腰を据えている事に、リディアと呼ばれた女は小さく肩を竦めただけだった。

「グレッグは何をしているのか。この城がこんな有様で、大人しくしている奴ではないだろう」

「アレは、変わりました」

声が沈むでもなく、淡々と言葉を返してくる彼女の表情は後ろを歩いている為、窺い知る事は出来ない。もちろん、正面で対峙していたとしても、分らないだろうが。

グレッグとリディア。この二人は遥か昔から鉄面皮であつた。ジョイスの目付けとして二人が付きまとつた時など、さすがに心が病むかと思つたほどだつた。と、それを口に出せば、仲も良ろしく「それはない」と口を揃えてきていたが。

どれだけ年月が過ぎようと、いつも二人でいる姿が当然だつた。似た者同士、気が合つていたのだろう。

だからこそ、グレッグがリディアの隣にいないという事実が信じられない。

粘つく通路に辟易しながらも、この城を、ジャロック卿を慕つていた者が一人消えた事に端整な顔が歪む。

一族の中において、広く深く世の理ことわりを知ろうとしたせいで異質だと蔑まれてきた自分ならともかく、グレッグがそんな考えを持つとは思えない。彼の存在意義は、この城であり、ジャロック卿を崇拜する事であつたはずだ。

そして、リディアと共に在る事ではなかつたのか。

「解げせんな。あれは変わらぬ男だ」

「……永く在り続ければ、変わるものでしょう」

「私が人間世界へと降りた時を数えても、そう永くはないだろう」
「ジョイス様が仰つたではありませんか。全てのモノは、滅びる為にあるのだ、と。それがこの時と重なつただけなのですよ」

確かにジョイスが言つた言葉なのだろう。他種族との関わりを避

けている一族連中が言うセリフでは在り得ないからだ。

だが、心という物は、そんな言葉で括られる物ではない事を、ジョイスは知っている。人間だけが持ち合わせている物ではないという事を、庚や楓によって、随分考えを改めさせられた。

「リディア」

「私の心を、操ろうとなさらないでくださいね」

「そんな事をしても、何も変わらないだろう」

声の調子を変えない布をかぶった後ろ頭を眺めつつ、ジョイスは頭の隅に引っかかりを感じる。かなり古い時に、同じ思いをした事はなかったか。

「リディア」

もう一度、声をかけてみると、彼女は立ち止まった。

瞬間的にジョイスは身構え、総毛立つ。

ことさらゆっくりと振り返ってきたリディアは、見えている部分の口元が酷く大きく、笑う形に歪められていた。だが、これは無理に作った笑顔ではない。滅多に見る事が出来ない、彼女の怒りだった。

「何をするべきか、私には分かっております。ジョイス様は黙って、なすべき事をなさいます」

「ああ、分かっている。言っておきたい事があるのだが」

「まだ、何か？」

「私の名はジョイスではない。槇原徹だ、間違えるな」

「人間ごっこも、大変ね」

呆れたように小さく肩を竦めれば、かぶっていたフードが小さく

ずれる。

ジョイスは、それを見逃さなかった。

「お前、その顔をどうしたのだ」

言われ、無表情のまま細い指でフードを引き下げる。即座に背を向け、大きなストライドで先へ行く。

しかし、それを引き止めたのは、低く鋭い声で発した次の言葉。

「グレッグか」

「……あなたは、いつもそんな所ばかり鋭くていらっしやる」

凜とした声には彼女の心を表すように揺らぎが生じていた。だが、一つの扉の前で足を止め、振り返った。

「ジャロック卿は、こちらにおいでです。おそらくあなたにしか開けられませんから、後はお好きになさって下さい」

「ああ、好きにさせてもらおう」

歩を進め、彼女のフードを剥ぎ取る。一瞬の事で、逆らう間もなかった彼女は、さすがに無表情ではいられなかったのか、小さく眉が顰められた。

艶やかな黒髪は高く結い上げられ、切れ長で印象的な瞳が、白く美しい肌によく映えている。だが、右耳から頬にかけて大きく歪み、赤黒い焼け跡が広がっていた。

ジョイスが大きく骨ばった左手で、彼女の頬に触れる前に、リデイアは口を開いた。発せられた言葉は、厳しく冷たい。

「治さなくて結構よ」

「吸血族は、厳しく美しくあれと唱えていたのはお前だろう」

「治癒は、必要ないわ」

「厳しさを取る、か。いいだろう、リディアらしい」

手を下げ、彼女の前をゆっくりと横切る。

追いかけるように視線がついて来ている事には気づいていた。だが、声をかけてくる事はない。

グレッグとの間に、何があったかなどと聞いた所で、返ってくる言葉も決まっているだろう。言わないという事は、知るべきに値しないという事だ。

永い年月を通し、この種族において自らをさらけ出す事はない。

お互いに干渉し合わないという暗黙の了解が根底にある。

扉の目の前に立てば、明らかに何かしらの呪がかけられている事が知れる。

その扉だけは染み一つなく、装飾を施された真鍮製のノブにも塵一つついていない。

躊躇なく手をかければ、音もなく扉が開かれる。

畏たろうが、気にかけずに踏み込めば、自然と扉は閉められた。

リディアが同じように手をかけるが、びくともしないその木の板に、両手の平を押しつけた。

「ジョイス。私は……」

手を扉に押しつけたまま、握りしめる。爪が手の平に食い込むほど力を入れ、しばらく何かに耐える表情を浮かべた。

しかしすぐに力を緩めると同時に手を離す。

右頬にそつと手をやり、固い声で自らに言い聞かせるように呟いた。

「忘れてはならない。これは、戒め。本当に大切な人を苦しめた、

私の罰」

その表情は、普段のそれと変わらない物に変わっている。
厳しさを漂わせ、リディアは身を翻し、その場を後にした。

人心への回帰

扉を閉め切った中では、今までいた空間とは異彩を放っていた。空気が押し潰してくる錯覚に陥りそうなほど重く、漆黒の闇で覆われている。

正面には、赤く光る相貌が浮かび上がり、こちらの様子を探るように瞬く。

「統治を怠り、引きこもるとは。ジャロック卿らしくない」

闇に生きる者として、黒一色で塗り潰されたような空間は、何の問題もなかった。

他の一族はともかくとして、光に護られた彼にとっては、ただの空間でしかない。

ジョイスは躊躇なく一步を踏み出し、腕にかけていたマントが蝙蝠へと変化し、無数に飛び立つ。

「今度は、貴様が」

腹の底から響くような低音に、蝙蝠が長身の彼を護るように取巻いた瞬間、白い光が目前で弾ける。盾となった蝙蝠は霧散しながら、だが減るスピードよりも速く数を増す。

ジョイスは、小さな同胞達の隙間から溢れてくるわずかな光に照らされ、口の端を大きく持ち上げた。

瞳はすでに赤く、楽しい表情の中には、残忍な色をも織り交ぜられている。

「私と分からぬほど、夢に取り込まれたか！」

「……ジョイス、なのか？ 敵味方が分からぬ今、誰をも信用する

事は出来ぬ」

嘲笑と共に言葉を飛ばせば、苦痛に呻く声が返った。

攻撃的な光は幻だったかのように消え失せたが、目前に浮かぶ紅玉のような瞳は、警戒するように光続ける。

ジョイスはゆっくりと歩を進め、取り囲むように踊っていた蝙蝠は姿を消し、彼の肩に寄り添うマントへと姿を変えた。

「敵味方？ そんな無駄な事を考えるから、身動きが取れなくなるのだ。知らない者を切り捨てられないのか？ そんな甘さはなかったらう」

「……昔の話さ」

酷くしゃがれたその声は、決して弱々しいものではないが、苦虫を噛み潰した響きを宿していた。

ひよいと肩を竦め、マントを直しながら苦笑した。

目の前にいる白髪の男は、彫りの深いその顔を洪面に歪めている。大人が座れないような、小さな椅子の背もたれに長い年月を彷彿とさせるシワだらけの骨ばった手を置いて、固くその目を閉じた。

「アンドレア」

その名前を口にすれば、乱れた白髪を揺らし、鋭い視線で抗議を表す。

だがジョイスは屈する事なく、楽しげに続けた。

「やはりな。だが断ち切れぬほど、溺れたか。アレが我が物となった時を、忘れたというのか！」

「後悔をしている。我に心が映った事を」

「あんたが、心を語るようになるとはね。だが、だからこそ。光と

通じ、心を分かち合えたからこそ！ この力を手に入れられたのではないのか！」

「我には、必要のなかった物だ。お前は違つても言うのか？」

静かに染み入る声は、ジョイスに苛立ちを与えた。

庚との日々は、間違いもあつたろう。いや、吸血鬼と人間だ。間違いは掃き捨てるほどあつた。だが、光を欲した事などなかった。

光を奪つとは、単に彼らを喰らえばいいというわけではない。

互いに想い合い、心が通つたその時に初めて彼らの血で光を与えられるのだ。

それを知る事は、光を手にした者にしか伝えられない。だからこそ、決して忘れてはならない物があるのだ。

「後悔を、していると言つたな。アンドレアの最後の意志は、そんなくたらない一言で消されてしまうものか！ 私には彼女を愛している、今でもだ。だからこそ最後の意志を尊重し続ける」

「人間ごときの戯言を……」

「そのゴトキと、心が通じ合えたのだろうか？ 我々には、それを全^{まっ}うする責任がある」

そう、義務ではなく、責任だ。

ジャロックは目を伏せ、眉間のシワが更に深く刻まれる。内側から囁く者は、屈強な肢体を持ち、どれだけ同族を統べていようが、彼の中で大きく居座っている。

もう酷い事するの、やめてよ。

ほんとここにしよう？ ずっと、二人で。

二人でいれば、他の事なんてどうだっていいよね？

小さな子供の声は、彼にすがりつき、嬉しそうに『ダディ』と呼んだ。

切り捨てられない。幻覚であれ、彼をもう一度消す事が出来ない。こんなにも自分は弱かったのだろうか。

「何を囁かれている。それは本当に大切な者が言う言葉なのか？
考えろ、ジャロック」

「貴様に言われずとも、分かっている」
「分かっているから、こんな体たらくでいるのだろうか？」

煮え切らないジャロックに、ジョイスは聞こえるように舌打ちする。

「永年生き続けている奴らと、同じ道は辿れないのだ。何も考えられずに、ただ血をすすっているだけになった同族共のようにはな」

古くなった小さな椅子に寄せられた手が、握り潰すのではないかというほどに背もたれを掴んだ。分かっていたはずだ。彼は、すでに死んだ。

弄ばれていようが、彼を見て触れられた事だけで、幸せだった。

「アンドレアと交わした、最後の言葉を思い出せ」

厳しい面持ちで、考え込むようにうつむいて。ジャロックは奥歯を強く噛みしめた。

ほのかな光が、椅子ごと彼を包み込み、数秒の後に消える。

小さな木の椅子も消し炭となり、年老いた手が離された瞬間、灰となって崩れ落ちた。

それを同じく厳しい眼差しで見届け、黒い短髪の上にシルクハットを乗せる。

「我々は、奴らとは違ってしまった。永く生きるほど、人の心が強くなるのか。面白い事案だ」

「……我等は、人の心を忘れるのだな」

「そうだろう。吸血族となり、生き血を口にしたその時から、我々は心を失っていく」

だからといって、誰しにも光を与えてやる事は出来ない。

光を取り込むという事は、大切な者を失うという事だからだ。ジョイスは、戻ってきた城主に挨拶する事もなく、身を翻す。

「ジョイス、手間を取らせた」

「まったくだ。新たな私の光に、ちよっかいを出してくる輩は、強制送還させよう。始末はまかせる」

この城にいた時からのジョイスを知っているジャロックは、さすがに苦笑した。

「お前たる言葉とは思えんな」

「当たり前だ。大切な楓ちゃんに、凄惨極める現場など見せられるものか！」

「承知した」

いつぞやに見た威厳のある顔立ちに戻った彼が立ち上がるのを横目に、ジョイスは小さくうなずいた。

彼が戻ったのだ。汚れ、朽ちかけた城は、すぐに元に戻るだろう。居心地の悪い、厳しい規律に満ちた空間へと。

ジョイスは小さく鼻を鳴らし、呪の解けた扉を大きく開けた。

「戻ってくるつもりはないか」

「あるわけがない」

背後にかけられた声にそう答え、その身を無数の蝙蝠に変え、城外へと飛び立った。

時間の概念がないこの空間に、外界ではどれほどの時が過ぎてしまったのか。

可愛い小さな楓に、コマが何かするとも思えないが、信用は出来ない。いや、それ以前に食事の心配の方が大きかった。

芋虫や野鳥などを与えてやしないか、そればかりが問題である。逸る心と同じくらいの速度で、蝙蝠は森の暗闇へと姿を消した。

覚悟

楓父がどこかへと出かけ、二日目の夜を迎えていた。

誰かが尋ねてくるわけでもなく、食事の用意以外では穏やかに時が流れていると思っていた。

真夜中であるというのに、リビングを人工的な光が昼間のように照らしている。

唇を真一文字に結び、白いソファに座らされている楓は、苛立ちと焦りに落ち着きがない。

コマは、毛皮のついた身体で通せんぼするように立ち、顔だけを彼女に向けていた。

その状態で、まだ三分も過ぎてはいないのに、楓は立ち上がる事なくコマをにらむ。

「コマさん」

「駄目だ」

目の前の彼女から視線を逸らす事なく否定すると、柔らかそうな頬がみるみるうちに膨れ上がった。その様子に、思わず低い声で笑ってしまう。

「な、何がおかしいの!」

「……なんでもない」

オレンジ色のコートを羽織り、ピンク色のマフラーとミトンの手袋をきちんとはめている彼女は、ただ寒かったからというだけでこのような格好をしているわけではなかった。

コマは、白く消える息を大きく吐き出すと、さすがに楓は首をすくめる。

楓父もいないこの時に、しかも真夜中に外に出るなどという事が
良くない事なのはわかってるからだろう。

少しだけ申し訳なさそうにコマを見つめ、口を開いた。

「コマさん、私が行かなくちゃいけないの」

「駄目だと、何度言わせる」

「こんな事してる間に、ネキさんが……ろされちゃうかもしれない
のに？」

言いくそうに眉をひそめ、強くコマに問いかけても彼は首を横
に振るだけだった。

コートを握りしめ、悔しそうに下唇を噛む。

「アレは自分で出て行つたんだ。前にも言つたろう？ 俺達は……」

「自分の身は、自分で守る？ コマさんは、あんな映像を見てない
から簡単に言えるんだ！ あ、あんな……ネキさん……」

思い出したのか、手の色が白く変わるほど握りしめた。こんな痛
みは、小さい事だと言い聞かせるように。

どちらにしても、彼女に傷をつけるわけにもいかず、コマが重い
口を開いた。

「えいぞうつて、何だ。何を見た」

「映像って言うのはね、ほらテレビとか。知らない場所の事が映る
でしょ？ あんな感じ」

分かったとうなずけば、楓は大きな瞳をくもらせてコマから視線
を外す。

少し考えるようにして、小さな声で話し出した。

「部屋に入ったら、窓の外にネキさんがいたの。いたって言うか、空に、映ってた」

目を閉じて、その時の様子を洩らさず伝えようと思い出しながら。

「血が、出た。痣だらけで、大きな鎖で縛られてて。大きな男の人に殴られて。次に時計が映って、十二を指してた。黒い車が迎えにくるの」

「それに、乗れという事か」

「そう、だと思う。女の子が最後に静かにしてって言うみたいに口に手を当てて」

その少女の真似をするように、楓が左手の人さし指を立て、口に当てた。

「下を向いたネキさんの髪の毛を、男の人がつかんだら、ネキさんの口が『くるな』って動いた。そしたら女の子の口は『おいで』って。それで、ネキさんを指差したから」

「楓が行かなかったら、ネキがどうにかなるって思ったわけか」

「うん。私の、せいだから。私が行けば、ネキさんは酷い事されないでしょ？」

「いや。それを言うなら、もう……」

考えたくもない事だったのだろう、コマが次の言葉を声に乗せる前に、大きな口というか鼻を押さえ込まれた。

茶色の瞳は、はつきりとした怒りが浮かんでいる。

「私が行くの。行けばネキさんが助かるんだから」

楓の力で抑え込まれた所で、口が開けないわけではない。コマは

その小さな手を噛まないように気をつけながら、小さく口を開けた。

「それで、楓に何かあったら？」

「何もないよ、きつと……でも、私がいなくなれば皆が傷つかなくていいかもね」

「良いわけあるか！」

コマの強い口調に、ショートボブがふわりと揺れる。丸くなった目は、すぐに優しく微笑んだ。

色々と思う事があって、抱きつく事はなんとか我慢が出来たが、楓は嬉しそうに銀色の固い毛皮を何度もなでる。

それを複雑な顔でコマは眺め、歯噛みした。

こんなにも短い時間しか生きていないというのに、平気で自分を犠牲にしようとする楓。どうしてどんな手を使ってでも生きる為に戦おうとしないのか、コマにはそれが不思議でならなかった。

大切な者を守る為に出向くのは、分からないでもない。

だが、彼女はただの人間なのだ。話の通りであれば、ネキが何の抵抗も出来ずに殴られている。

そんな場所に彼女が出向けば、待っているのは分かりきっている事ではない。

「コマさんは、優しいね」

「ってゆーか、楓はもう少し考えた方がいい」

「……その言い方は、ちょっと失礼な気がするけど。考えても変わらない。私が出来る事をしたいだけ」

「ネキは来るなと言ったのだろうか？」

「女の子は、おいでって言ったよ。コマさんは、ここにいてね？ パパが帰ってきたら、説明してくれる人が必要だから」

その柔らかくも恐ろしい言葉に、コマは目眩を覚えた。

残ってどうするというのは。いや、どうなるのかは目に見えて分かる。

「そろそろ十二時。行つて来るね」

「駄目だと言っているだろう！」

「もう！ またそこからだと、話が進まないから！」

「進むわけあるか！ 俺が行くならまだしも、楓に行かせる事は、俺の死を意味するのと同等なんだぞ！」

「……いくらパパでも、そんな事しないよ」

「いや、する」

絶対だ。と付け加えれば、彼女は困ったようにコマの耳をつかんだ。

「大丈夫だよ。ネキさん連れて、すぐ帰るから」

「俺が行く」

「それは駄目だよ。私においでつて言っただから」

少女が見せた指を口に当てたポーズは、誰にも内緒でと言っているようにも見えたから。コマさんが姿を見せたら、ネキさんが大変な事になるかもしれない。

お互いまたしても膠着状態に陥った。

今、この時に槇原様が帰ってきたら。と何度切望した事か。コマはそう思いながら、駄目だと繰り返すしかなかった。

無情にも、柱時計が静かな音を奏で始める。

外に、車の止まる音がコマの耳に届いた。

「ほら、もう時間がきちゃった。私行くね！ 戸締りお願いね」
「行かせない。ネキは自業自得なんだ」

「私は、もしこれがコマさんでも絶対に行くよ。パパが駄目だつて言つて閉じ込められたとしても。窓を割つてでも、家を壊してでも行くんだから」

「……俺達からしてみれば、迷惑な話だ」

傷つくかもしれないと思つたが、そう口にする。
だが、楓は楽しそうに笑つた。

「そうだろうね！」

決意は固いのだろう。

小さな彼女は気がついていふのだろうか、白く薄い光が彼女を包んでいる事に。

決して屋外に出すわけにはいかなかった。コマの感覚を盗んで出て行けると思つてはいなかった。

もし行かせる事なく済み、次の日の朝にでも虎女の首が転がっていたら？

楓は悔やみ続ける事になるだろう。人は強い反面、壊れる事もたやすいのだ。

「俺がついて行くなら、出かけてもいい」

「本当！」

やはり一人では心細かつたのだろう。獣の自分達を平気な顔で殴りつける事が出来る化け物の中に、分かつていて踏み込む事は相当な覚悟が必要なのだ。

輝きを増した彼女に、コマは苦笑した。

「俺の言う事は、絶対に聞く事。それが条件だ」
「うん。いつもの通りだね。分かつてる、約束」

「もし破ったら……」

コマは真剣に見返してくる彼女に、厳しく目を向けた。

「楓の手で、俺を殺せ」

闇夜からの誘い

衝撃的な言葉に、楓は一瞬声を出せず、目を大きく見開いた。だが、その恐ろしい提案をした彼は、ひどく真剣で。

「コマさん……わがまま言ったから、怒ってるの？」

気まずい空気の中、心なしか楓の声も強張ってしまう。

しかし、コマは金色の瞳で楓を捕らえたまま、違うと答えた。

その声は、あからさまに低いわけでもなく、冷たく突き放す物でもない。ただ淡々と質問に答えたにすぎなかったが、楓は落ち着かない様子で小さく身を振よらせた。

「この状況で、楓を外に出す事はするべきじゃないとは分かっている。だが、俺が虎女を助けに行つて、万が一……そう万が一にも捕まつて、別の迎えが来たら楓はついて行くだろう？」

「行く、かもしれないけど……コマさんでも、捕まっちゃうの？」

「その気はないが、何があるかは分からない」

マフラーをしているのにも係わらず、首元がヒヤリとしたように感じて、楓はマフラーを口元まで引き寄せた。

「私が、皆の邪魔をしてる？」

「……邪魔、とは？」

「だから……」

マフラーで口元を隠したまま、楓は一度、強く奥歯を噛みしめ、それから小さく口を開いた。

「私って、足手まといだよな」

「ってゆーか、人間相手じゃないから仕方ないだろう」

「コマさんだって、人間でしょう!？」

思わず叫んで、我に返った。

正面に座る銀色の大きな獣は、複雑な表情でいたが、目を逸らす事はない。

そして、見てみるといわんばかりに、太く大きな右前足を持ち上げる。

「これが、人間か？」

「元は人間なんでしょ？ だったら人間だよ。何の問題もないよ」

「問題は、ないのか」

「そうだよ」

大きく、力強くうなずく楓に、やはりコマは苦笑するしかなかった。

車のライトが催促するように点滅し、薄暗い部屋までそれが届く。ピンク色のミトンをはめた手を握りしめて、楓が顔を上げた。

「行かなきゃ」

「いいか、約束だぞ」

「うん、分かってる」

さすがに緊張した顔で、楓はコマの首輪をつかむ。

彼女の左側に寄り添いながら、コマは小さく舌打ちしたい気持ちを抑えてゆつくりと歩を進めた。

黒い扉を開けば、冷たい風が行く手を遮るかのように二人に吹き

付ける。

外界との境界に見える、道路と庭の間にある柵に、楓は初めて安堵感を覚えた。

物言わぬ柵に、守られている。そう思えるほど、待ち構えているセダンの黒い車からは、異質な雰囲気を感じ取れたからだ。

「……楓、やはり槇原様を待った方が良さそうだ」

聞きなれた、だが緊張したコマの声に、楓が視線を落とす。

この異様な空気に銀色の毛皮は逆立ち、唸り声を我慢しているのが鼻にはシワを寄せ、牙をむき出している。

こんな顔をするコマを見たのも、初めてだった。

楓は、震える指先で首輪をつかみ直し、怖くないと自分に言い聞かせる。しかし、根が生えたように、足が動かない。

「楓、家で待っているといい」

毛は逆立てたまま、コマは険しい表情を幾分和らげて、楓の顔のぞきこんだ。

その心配してくれている顔を見て、いつの間にか体中に入っていた力が抜けていく。

「大丈夫だよ、大丈夫。行こう！ コマさん」

「ってゆーか、今からそんな事では、先が思いやられるぞ」

「もう大丈夫！ 助けるの。私が皆を助けるの」

決意の表情をして、小さな少女は一つうなずいた。

コマはそんな楓を家に閉じ込めておきたかった。だが、いつかは同じ状況が いや、もっと酷い状況があるだろう。

何も出来ず、何も見ずに過ごした所で、生き延びる事は難しいの

ではないか。

「コマさん？」

「何でもない。行くぞ」

「うん」

今度は動きの悪い足も前に出た。力強く横を歩くコマを見て、自然と気持ちが大きくなった楓は、怖い気持ちよりも彼と共にいるという現実、心が満たされ勇気が湧いた。

自分に何が出来るか、分からない。確実にコマ達の邪魔をしてしまっただろう事だけは、はっきりと見えるほどだ。

しかし楓は、自分にも何かが出来るはずだと疑わず、先に乗り込んだコマに続く。

黒い革張りの座席は、体重をかければ悲鳴を上げるように小さく鳴いた。

誰かが話しかけてくるわけでもなく、その場に居るのは二人だけ。居たたまらない静寂に、楓が座席の上で身じろげば、ドアが静かに閉められる。

広い足元にいるコマの毛並みを確かめるように、楓は手を伸ばし、コマは床に尾を軽く叩きつけて大丈夫だと返した。

楓は、開くわけがないとは分かっているが、ドアに手を伸ばしたが、やはり動かない。一つため息を吐き、外を眺めようとするが、黒く塗られたような窓からは、一切の物を見る事が出来ずに、座席に座っているしかなかった。

どれほどの時が経つだろう。

夜はなお深くなり、霧が立ち込める。

いつしかコマの鼻に、潮を感じた。

そのしばらく後に、車はやはり静かに停車し、来た時の反対にドアが開かれた。

「着いた、みたいだね」

コマが座席を土足で上がり向きを変え、外をのぞこうとした楓を横面で押し戻す。

「あ！ コマさん今、土足で椅子に上がったね？ 足拭いてないのに、駄目だよ！」

「……………」

頬をふくらませ、少し厳しい顔をした楓を横目に、コマはただ小さく肩をすくめた。謝罪の言葉を言わないコマに、楓が眉をひそめる。大きな首輪を彼の後ろから力一杯引つ張るが、びくともしない。銀色の獣は、振り返る事もせず、外の様子を窺う為、夜目を利かせ、鼻も探るように動かした。

地面は土ではなく、きちんと舗装されていた。波の音が止めどなく聞こえ、潮の香りが酷く近い。整然と建ち並ぶ倉庫の群れは、眠りにについているかのように静かに鎮座している。所々にある外灯は、寒さが引き立つほどの寂しさをまとっていた。

見える範囲の倉庫の窓には一切の光がなく、何者かがいる様子には見えず、人間のにおいは近辺にしない。

だが、コマの鼻は人のそれとは違うにおいを捉えていた。車に残っていた、微かなモノと同じにおいを。

「コマさん？」

顔をしかめ緊張を表した雰囲気、後ろ姿からでも感じ取れたのだろう。楓の声は幾分固くなっていた。

人狼だと相手側に知られていないなど、まずないだろうが、コマ

は普通の犬を装う為に声を出さず、楓に小さくうなずいて見せる。
何か意味があるのだろうと気付いた楓も、首輪を握り直し、奥歯を噛みしめてうなずいた。

コマが先に車から降り、周囲に意識を張り巡らせる。

こんな緊張は、いつ振りだろうか。その思いがふと頭に浮かんだが、楓が片足を地面に下ろす前に、掻き消した。

余計な事は考えず、この小さな少女を出来るだけ無傷で返さねばならない。

それだけがコマの使命であるとばかりに、自らの持つ全ての感覚を鋭く研ぎ澄ませる。

『進め』

少年の高い声が、辺りに冷たく響いた。

思わず身を低くして牙を剥き出せば、楓が小さく首輪を引く。気負い過ぎれば、ネキさんを見つける前に疲れきってしまうかもしれない。

そんな思いと、もう一つ。コマが楓を置いて、声の元へと走って行ってしまいそうな気がしたのだ。

コマは金色の瞳を細めたまま、小さく楓を振り返り、不安げな彼女に大丈夫だとうなずいた。楓は目眩がしそうなほどのストレスの中、声を絞り出す。

「……行こう」

口を結び、緊張を隠せないまま、二人は慎重に歩を進めた。

小さな石を踏む音と、波が砕ける音だけが大きく響く。すぐにコマの鼻が、火のおいをはつきりと捉え、緊張が増した。

こちらに気付けさせるために、火をつけたのだろう。だが、どこか

の倉庫が燃えているような、大きなおいではなかった。大量の蠟ろうが溶けているにおいも感じたからだ。

そして、すぐに奥まった場所にある古びた倉庫の窓から、場を占める凍てつくほどの緊迫感とは程遠い、柔らかく暖かい色を映し、二人を呼び寄せるようにその光が揺らめいている。

倉庫から数メートルの所で足を止めた楓に、コマも無理に引つ張る事もせず、彼女のそばで足を止めた。

恐怖のあまり、動けなくなったのかと窺えば、彼女の顔は強い怒りに染まっていた。

冷たい空気から、ノドと肺を守るかのようにマフラーを口にあて、大きく息を吸い込み、楓本人が驚くほどの、ついぞ聞いた事のない大声をあげた。

「ネキさんを、ここに連れて来て！」

思いもよらない行動に、コマは大きく目を見開く。

確かに、建物の中に罠だと分かっている入って行くのは気が引けていた。だが、外よりも狭い空間の方が彼女を護りやすいのではとも考えていた。

考えあぐねていた矢先に、楓の一声だ。思わず声を上げるところだった。

『いいから、中に入れ。大事な子猫の首がなくなるよ?』

最初に聞いた、つまらなそうな声ではない。どこか楽しげな少年の声は容赦なく、楓達は建物の中に踏み込むしかなかった。

加勢となる者

目の前には、見上げるほどもあるシャッター。すぐ隣を見れば、こじんまりとした扉が備え付けられている。素直にそのドアノブに手をかけようとした楓だったが、コマの大きな頭が間に入り、邪魔をする。

「ちょっと、コマさん？」

鼻先でノブを触ってみるが、何か仕掛けられているわけではなかった。

後ろ足で立ち上がり、狼の手のままでノブを押し回してみる。すぐさま扉から離れたが、何かが飛び出してくるわけでも、落ちてくる物もない。

「……考え過ぎだよ。ネキさんを返してもらっただけなんだから」「そうさ。人間の子供なんて、小細工するまでもないだろう？」

今まで反響するように響いていた声が、酷く近くで聞こえた事に、コマは牙を剥き出す。

それでも、楓は小さくリードを引き、彼を引き止める。

温かな蠟燭の灯りに、手入れの良い金髪が美しくきらめき、少女と見紛うほどの少年は、

わざとらしいほどうやうやしく中へ入るよう促した。^{うなが}

奥には、大きな鎖に吊るされたネキ。そして、薄笑いを浮かべたくましい体つきをした大男、一切の感情を排した表情をする少女に、眉間にシワを寄せた黒い長髪の美しい青年。

「ネキさんを、連れて来てください」

あまりにも異質な雰囲気に、手の平にはいつの間にか汗をかいており、声が消え入りそうになるのを堪えて、楓はリードを握りしめて叫んだ。

「入れって言ったろ？ 人間」

「人間って……えっと、あなただって人間でしょう？ こんな事、やめようよ」

美しい少年は、いやらしく口の端を持ち上げる。

「聞いたかよ、僕が人間だって！」

「まあ、姿形は人間だろうがよ。外見で判断したら、痛い目見るぜ？ お嬢ちゃん」

「どうでもいいや。猫を引き取りたかったら、自分で助けるよ。お前が、本物だったらな」

あっさり和大男の言葉を一蹴し、少年は一足飛びに鳶色の髪をして少女の隣に降り立った。

「本物って、何の事？」

「何って？ 本当に呆れるね。いいから鎖を外してみろ。これ以上言わせるなら、ひねり潰すよ？」

可愛らしい顔で、さらりと恐ろしい事を言う少年に、楓は思わずコマの背に手をやる。そこで楓はコマの異変に気がついた。

彼の硬い背中の毛は気の高ぶりに逆立ち、筋肉の小さな動きに落ち着きなくざわめいている。その息遣いは荒く、目の前にした彼らがどれだけ厳しい相手であるのかを思い知る。

恐ろしくたぎる血を押さえるコマの背を、楓は少しだけ力を込め

て叩いた。

「怒らない!」

普段のコマになってと言うように、楓は声を張った。

その厳しい声に、コマは大きく息を吐き出し、金色の目を素早く瞬かせた。

「いい? ネキさん、優先だよ」

ゆつくりと歩き出す一人と一匹に、少年が我慢出来ずに嘲笑する。

「獣人がチビの言う事聞いてるよ、イレイン」

「そうね」

鳶色の巻き髪に手をやり、そろそろと歩くコマと楓を眺めながら、つまらなそうに目を細めた。

強く美しいあの方の横に立つには、楓は身分不相応だと思ったからだ。

どこをどう見ても惹かれるわけではない容姿の少女に、彼が求める物は、彼女が持つ『光』の力しかないだろう。

見目も、悠久の時を共に歩ける年月も、全てイレインが有利なはずである。唯一たる力を手に入れさえすれば。力を失ったあの貧相な娘など見捨て、彼が傍にいるのはイレインとなるはずだ。

今、目の前にいる少女が、まさしく本物の光であるならば。

手を出してこない彼らを警戒しながらも、楓はネキに駆け寄った。

「ネキ、さん?」

「……しょうがないねえ。くるなって、言っただろう?」

目を開かないのではないかと思うほど、彼女の顔も、全身も赤く青く腫れあがっている。

口を少し歪め、それでもわずかに目を開き、ネキは苦笑した。

「私なら、鎖外せるんだって」

「いいから、帰りな。特に野良犬、あんた槇原様に殺されるよ」

「大丈夫。散歩してただけって言うから」

真剣な顔で言う楓に、コマとネキは出来る限り目を見開いて息を呑む。

思わず吹き出したネキの声を聞きつけて、少年が痺れを切らし、苛立ちを隠す事もなく声高に叫んだ。

「早くしろよ！」

「どうしたらいいの？ 鍵も何もないのに」

「はあ？ お前、光なんだろう？」

それを聞いて楓は、ああと呟いた。

だが、力の使い方を知っているわけではない。それでもネキの手を繋いでいる鎖を辿り、鎖の端にミトンのまま手を触れる。引っ張ってみるが、微動だにしない。

「光だからって、考えて何か出来るわけじゃないのに……」

「……楓、ズボンを出しておいてくれ」

「え？ うん」

オレンジ色のコートの下に隠し持っていたコマのズボンを、コートの裾から引きずり出す。コマに渡し、鎖がくくりつけられている鉄骨に足をかけ、力ずくで鎖を引っ張ってみる。

「はーずーれーてーっ！」

金切り声をあげる楓に、イレインが冷めた瞳で小さくため息をついた。

「……品性のカケラもありませんのね」

「あー、もう飽きた」

楓の姿に腹を抱えて笑っていたマノの楽しげな姿が一転し、冷酷さが顔を覗かせる。

金茶の瞳に危険な色が浮かび、イレインの白く細い左手を両手で包み込んだ。

「光かどうかなんて、喰えば分かるんだからさ。余興は終わりにしようよ、イレイン」

「そうもいかないわ、マノ。こんな貧相な人間でも、あの方の手持ちなのだから段階を踏んでおかないと」

「……あの方、あの方って。今この場所にいないんだからさ。それに力を手に入れて、あの家で帰りを待ってた方がよっぽどいいんじゃないか？ ほら、あの方にとってもさ」

クルクルと印象を変える金茶の瞳に、イレインが小首をかしげる。

「そうかしら」

「そうに決まってるよ。使命のせいで厄介な光に手を出せなかったのを、イレインが代わりに漬けてやるんだ。ついでに光の力も手に入れば、足手まといにもならず一緒に歩いていけるだろう？」

「……そう、そうよね」

「そうだよ！ でも、僕にも光の一部をくれよ？ イレインを護る力を持つ者は、一人でも多いほうがいいだろうからね」

「そうね」

小さくうなずいて、背後を護るように立つグレッグへと振り返った。

「グレッグ、あれをここへ」

「はい」

端正な面持ちの彼は、表情を崩す事なく彼女の後ろから前に出た

その瞬間、辺りが白い光に包まれる。

吸血鬼である彼らの目を焼くほどの光ではないにしろ、それぞれの心を動かすには十分過ぎるほどの光。

「あれが……！」

逸る心に突き動かされて、イレインが楓の方へと足を向けた。

それに違わず、他の三人も光に目を奪われ、その不可思議な引力に操られるように引き寄せられる。

光が消えた後には、ズボンのみを身につけた銀髪の男が身構えていた。無残に引き千切られた鎖を足蹴にし、乱れた金髪を手で簡単に直しながら、解き放たれた歓喜と屈辱を晴らす為、青い瞳を剣呑に光らせる女が楓を背にして彼らの前に立ちふさがる。

「……帰るぞ」

「何言ってるのさ、やられた分やり返さなきゃ気も晴れないってもんさ」

「ネキさん、ダメ！」

ネキの服の裾を小さな手がつかみ、引き止める。

必死な少女に同意するように、コマは四人から目を離す事なくうなずいた。

「お前は簡単に捕まった。どうせまた捕まる」

「はあ！？ 誰にモノを言ってると思ってるんだい！」

「ネキさんに、だよ」

「そうだ。槇原様が帰る前に、何事もなく家に戻る。楓は何があっても、この建物から出る事を優先しろ」

「うん！」

身を翻し、言う事の聞かない足を出来る限り早く前に出した。

いち早くグレッグが大きく跳躍し、コマは迎撃するように強く地を蹴り いや、跳びあがる前に黒い影が空中で彼と激突した。目と鼻が隠れるような鋭く尖った鳥のくちばしにも見て取れる変わった仮面をつけた男。彼の背にある闇に紛れるほどの美しい漆黒の翼を、茶色い瞳が捉える。

「あーっ！ もう俺の領分じゃないと思ったのによっ！」

「カラス先生っ！」

歓喜の声を楓が上げたが、カラスは目の前の敵から目を逸らす事なく、コマとネキを鋭く叱責する。

「力量を知れっ！」

その言葉と同時に、コマは一飛びで楓の傍に降り立ち、すくい上

げるように左腕で彼女を担ぎ、その勢いのまま入ってきた狭い入り口ではなく、閉め切ったままの大きなシャッターを蹴り飛ばす。

歪みよじれたシャッターの隙間に潜り込もうとする前に、闇が広がりに行く先を塞いだ。

ネキはイレインが指差した事で、何かしたのだと瞬時に理解し、小さな彼女に獰猛さを隠す事なく跳びかかる。

カラスは舌打ちをし、即座に羽を一枚抜き取り、闘志を剥き出しにしたネキへとダーツのように投げる。その後の反応を見届けるでもなく、カラスは手にした錫杖を相対している彼に突きつけた。

「お前が『そっち側』につくとはな」

だが彼は何も答えず、黒髪をたなびかせて無数の蝙蝠を生み出す。カラスは瞬時に背中の翼で突風を起こせば、蝙蝠達は霧散し掻き消えた。

大きく吹き飛ばされたグレッグとの距離をすぐさま詰め、錫杖で彼をお世辞にも綺麗とは呼べない壁へと押さえつける。

「リディアは、どーしたよ？」

さすがにびくりと身体を震わせ、グレッグの表情に動揺が浮かぶ。

「彼女の顔を見たか？」

「だま……れっ！」

もがくが蝙蝠へと変身も出来ず、闇に紛れる事も出来ない。カラスはその様子を酷く楽しげに見つめ、口の端を大きく持ち上げた。

「動けないだろう？ コイツには、あのジョイスだって手間取るかなあ。お前なんぞに逃れられやしないのさ」

人の子よ。と、耳元で囁いてクツクツと笑う。

この錫杖は、浄化し吸収する力を秘めた物だった。工作上、不浄極まる場所が多い為、特別に鍛え上げた杖だが、使い方によっては闇の者達を制圧出来るほどの力を持つ。力を削がれた相手は、普通の人間とさほど変わらない。

「迎えが来るまで、イイコにしてような？」

初めて悔しげに顔を歪めたグレッグに向け、カラスは抜き取った羽をノド元に突き立てた。

「おやすみ、お前の悪夢はこれからだ」

おそらく最後の方の言葉は聞き取れていなかったろう。グレッグは脱力したまま、冷たいコンクリートの床へと落下していった。

カラスの様子をのん気に見守る事も出来ず、外に出る事が叶わなくなつたコマは楓を立たせ、身軽になつた身体で強引に広がる闇を突き破ろうと試みる。楓も何か出来ないかと、目の前に広がる不自然な闇に手を伸ばした瞬間、闇の中から無数の黒い手が伸び、襲いかかった。さすがに楓が小さく悲鳴をあげた瞬間、横からの衝撃に突き飛ばされていた。

「コマさん！」

今まで立っていた場所を見て、楓は思わず声をあげた。

彼は、無数の黒い手につかまれ、引きずりこまれそうになっていた。必死に抵抗しているようだが、彼の腕力を持ってしても逃れる事は容易ではない。

「く、るなっ」

立ち上がった楓を、その手の隙間から見てコマは声を絞り出した。小さな彼女などひとたまりもないだろう。そしてその手には、コマの意識を蝕む何かが宿っていた。闇の力が、コマの奥深くに作用し、本人の忌み嫌う獣を呼び起す。

抵抗した。

いつかの二の舞にだけはしたくない。

彼女だけには、あの姿を知られたくない、と。

だが否応なしに闇がコマへと流れ込む。心地良くさえ思えるその感覚に抗いながら、コマは苦しげに声をあげた。

「……楓。俺を、見るな　！」

交錯する想い

＊

肩に小さな痛みを感じたネキだったが、勢いが止まる事はない。
小さな少女に鋭い爪で引き裂く前に、褐色の、太い丸太のような
腕が彼女の腕を捕らえた。

「おっとー、危ねえな」

その腕力で腕を折られる前に、すぐさまネキはもう片方の手で、
彼の腕に爪を走らせたが、そこにはすでに腕はなく虚しく宙を切っ
た。

一旦距離をあける為、ネキが後ろに跳べば、追随するようにバデ
イックが目前に迫る。

「鈍重だな」

つまらなそうに、大きな拳を無造作に振り下ろしてくる。

その時、ネキの口が開き、女のものとはとても思えない、低くし
やがれた声が発せられた。

『我の花嫁に、触れるな』

異様な雰囲気を感じたからか、反射的に大きな身体を仰け反ら
せるが、一瞬遅かった。

彼女の表面から虎が発現し、逞しい腕を肩ごと噛み千切ったのだ。
ネキは意識なく崩れ落ち、虎はなお、彼に襲いかかる。

バディックには、容姿と同じく同族との確執が大きい。人間との差といえば、特別な能力を持っているわけでもなく、腕力がより優れている以外の力はない。それゆえに誰からも迫害され、光を欲していた。

しかし、彼はより強く純粋な力を持つ死神に対して、悔しそうに、だが楽しげに笑った。

目の前に在る凶悪な獣は、彼のみを見つめ、破壊せんと向かってくる。

ただ彼のみを、透き通るような青い瞳に映して

イレインの傍で、二人を助けるでもなく不甲斐なさを見届けたマノは、親指の爪を噛み、苛立ちを表した。

どこかから湧き出た虎も、いつの間にか消え失せた。カラスと呼ばれた男が、目を覚ました女から何かを抜き取っていたが、そんな事は関係ない。

人間の子供に憑いている獣どもなど、グレッグの一撫でで簡単に決着がつくと思っていたというのに。

「イレイン、『道』を作っておくよ？ いざとなったら入るんだ」

「どうして？」

「君が壊れてしまったら、つまらなくなるからさ。それに、また駒を増強して出直せばいいだろ？」

「……そうね」

深追いはしてはならない。マノが追い求めるメインは彼らではなく、ジョイスなのだ。時間なら、いくらでもある。

イレインに向けた可愛らしい笑顔の中に、残酷な考えは微塵も見えない。

しかし、イレインの顔に焦りの色が浮かぶのを、彼は見逃してい

た。

「アレは、何？」

少女が顔を歪め、差し出していた手に力を込めるように握りしめた。

男を一人取り込んだ闇が、大きく膨らみ表面がさざめく。くぐもるような呻き声は、はっきりとした唸り声へと変わった。

「楓っ！」

一番近くで目を見開いていた少女は、カラスの声に我に返る。捕らえきれず、闇の手は次々に消えていく。その隙間から見え隠れする者は、一人の若者ではなく、二本足で歪いびつに立つ銀色の獣。息は荒く、自らを縛りつけようとする手から逃れるように、そのゆったりとして見える歩みは止まらない。

「……コマ、さん？」

その場を動こうとしない彼女に、カラスは本日何度目になるだろう舌打ちをして、突風のように近づき楓を抱え上げ、壁に沿って垂直に飛び上がった。

完全に自由になる前に、隙間から突き出された腕は確実に楓を狙ったものだった。カラスがわずかでも遅れをみせていたら、命はなかったかもしれない。

腕の中で、少女は震える。全体は見えていないが、あれはコマであると楓には確信があった。それなのに

「……見るな。それが野良犬の言葉だろう？」

「でも！」

「見て、やるな。アレは恐らく、お前にだけは見せたくない姿なのだ」

「どうして……」

何も分からなかった、だが初めてコマに恐怖心を抱いてしまった。それが、許せなかった。自分を、許せなかった。慣れない感情が楓に付きまとい、胸が締め付けられる。以前にもあった感覚に、楓はどうしていいのかわからない。

ただ強く目を閉じて、言葉の通りに見ないようにするしかなかった。

獣の呪縛が解け、彼は怒りを吐き出すように咆哮する。

その圧倒的な声 いや、音の本流に、ネキは歯を食いしばり近くの壁を突き破って、野外へと逃げた。

「イレインは、下がっていていいよ」

声に気圧され、半歩退いてしまった自分に顔をしかめ、マノはイレインよりも前に出た。

「押し負けるのは、好きじゃないんだよ」

動いた彼に、コマが敏感に反応し、ボルトで固定されているはずの柵を軽々と持ち上げ、投げつけた。

マノは飛び来る柵を指差し、

「バーン」

と子供が遊ぶように声をかければ、透明な壁が彼の前に存在するかのように、鉄骨で作られた柵を阻む。投げつけられた柵は大きく

軋み、派手な音を立てて床に落ちた。

コマが立っていた場所に、すでに彼はいなかった。

「左よっ！」

甲高い少女の声に、マノは振り向くよりも早く左手で指を鳴らせば、左方の壁を蹴り襲いくるコマの全身に無数の深い傷口が広がる。激痛に体勢を崩し、マノよりも手前で怒りの声をあげた。

吹き出た血は、すぐに灰となって散る。傷口は瞬時に治っていくが、どうしても動きは鈍ってしまう。

それでもなお、マノへと足を踏み出す獣は、近づけば近づくほど傷つけられ、深くえぐられていき、治癒が間に合わなくなっている。しかし、それすらも気にならないと、ただ目の前の者を蹂躪する為だけに動いているようだった。

怖ろしい金属音に、うつすらと目を開けた楓は、傷つけられていくコマを見て悲鳴を上げた。

「駄目だよ、やめてっ！ コマさん！」

我を忘れてしまったコマには、その声すら届かない。

怖いと、少しでも思ってしまった罰なのかと、楓は息が詰まりそうだった。声を出せば、何かが溢れてきそうで小さく喘ぐ。

一步、また一步と近づいていく彼に、楓の頬に涙がこぼれた。

「……やめてえええっつっ！！」

堰をきるように、涙がとめどなく溢れてくる。そして、ネキを助ける時よりも強く激しい光が彼女を中心に輝いた。

カラスは歯を食いしばり、錫杖を握りしめる。光を吸収する事は出来ない、ただ一番近くにいて抱きかかえている。その彼女を襲う

事がないように、カラスの中にも潜む闇を消す為だけに錫杖を使うしかなかった。

初めて見る、美しくも強く魅惑的な白い輝きに、イレインもモノも瞬時に心を奪われた。

それは、コマやネキとて例外ではなかった。出会った頃よりも、強く恐ろしい引力が思考能力も低下させる。

イレインは恍惚の表情で、体の均衡を保てないように不安定に歩きだした。

「ああ　私の、光よっ！」

譲ると言っていたモノだったが、そんなイレインに殺意を覚える。美しいイレインと共に歩くために、彼女と光の血を分け合い、家に入った所でジョイスを倒す。強く美しい者を好む彼女は、きっとジョイスを倒した自分を見てくれる。

そんな考えは、光に消された。

「あれは、僕の物だ！」

叫び、よく手入れされた鳶色の巻き髪を後ろから掴み、容赦なく引つ張った。指先を彼女の背中に押し当て、狂気に満ちた笑みを浮かべた。

悲鳴をあげる間もなく、彼女は体内から灰と化す。

何の感慨もなく手の平に残った、愛しいはずの彼女の灰も、ただ冷たく払い落とし、ノドの奥から笑い声を上げる。

怒りと焦燥を失ったコマは、徐々に意識を取り戻していった。白い光に包まれた彼は、目を覚ました感覚のまま、楓が生きている事に安堵し、嬉々として光の根源へと跳躍した少年に、血まみれの手

を伸ばした。

楓は、俺のモノだ！

自分でも気がつかないほど、いつの間にか筋力をフル活動させ跳躍していた。

向かってくるマノに楓は恐れ、自然に光が弱まっていく。

動けば襲いたくなるような衝動が薄れ、カラスは楓の前に錫杖を突き出した。楓にしか目に入らない美しかった少年は、変貌してしまったかのように目を見開き、牙を剥き出しにしている。

「邪魔するなっ！」

「お前がな」

少年が叫べば、彼の背後にコマとネキの姿が迫り仲良くハモる。そしてその豪腕と全てを切り裂く爪によって、彼女に手が届く前に灰となり崩れ落ちていった。

近く、遠く

蠟燭の灯りは争いの間に消え、薄暗い倉庫内は静寂に包まれた。周囲の惨状は、現実を起こった事なのだと切に訴えている。

完全に消えたわけではないがぼんやりと光り、泣きじゃくる楓を見上げ、安心したようにコマは狼の姿に戻った。

だが、耐えられずによるめき、倒れ込む。

「コマさん！」

カラスに床に降ろされた楓が、大粒の涙をこぼしながら駆け寄ったが、どこを触っても痛そうで、楓は手を触れられずにいた。

躊躇を見せた彼女に、薄汚れた獣は固く目を閉じ、耐えるように眉間にシワを寄せた。

いつかは知られる時が来たのだろうか、こんなにも早くになろうとは。

本当は、今すぐにもこの場から逃げ出したい。だが血を流し過ぎたのか、身体は上から押し付けられているように、床に縫い付けられているように動かす事すらままならない。

コマは、見えない何者かに心臓をつかまれた感覚に、小さく喘いだ。ただ、楓を傷つけなかった事だけが、唯一の救いだ。そう考えて、コマはゆっくりと目を開けた。

「見るなど、言っただろう」

「でももう見ちゃったもん」

首をすくめながら、口をとがらせた楓には、コマを恐れる色は感じられない。その事に多少なりとも驚き、息を呑んだ。

「約束だが……楓の手を汚さずに、死ねそう、だな」

「馬鹿っ！ 何の為に、カラス先生がいると思ってるの！」

「はぁ？ 俺は……そう、たまたまの通りすがりなだけだ！」

突然振られた話に、仮面を外しかけたカラスは、動揺を隠すようにまたかぶり直す。

その仮面から飛び出た口ばしを、猫パンチでネキが弾き飛ばせば、あからさまに目が泳いでいた。

「心配で心配で、見守ってたんでちゅーって言ったほうが、いいんじゃない？」

「や、やかましいっ！」

ツバを飛ばしながら反論すれば、背後から聞き慣れた声が冷たく響く。

「やかましいのは、お前だ。何故この場に楓ちゃんがいるのか、説明してもらおうか」

「そ、れは……」

覚悟を決めて目を閉じたコマを除いて、楓とカラスは同時にネキを見てしまった。

それを見て、冷酷な目がネキへと向けられる。
非常にうるたえた様子で、青い目を白黒させ、ネキは必死に弁明した。

「あ、あたしはちゃんとして、来るなって言ったんだよ！？」

「ほう、ではどちらにしろ。お前が原因を作った事には違いないのだな」

「パパ！ そんな事言ってる場合じゃないの！ 先生、コマさんを助けて！」

うつすらと灰が積もるように変化し、彼の毛皮がくすみ始める。一度閉じてしまったまぶたは、ピクリとも動かない。楓の声に静まり返ったというのに、わずかに聞こえてくる波の音のせいで、息すらもかすかに聞こえるかどうか分らず、少女の気を更に焦らせた。

「お願い、カラス先生！」

「そうさ！ 助けてやんなよ、大先生だろう？」

「……断る」

「どうして!？」

驚愕に目を見はらせて、和装の彼に詰め寄れば目をそらされた。さすがのネキも、齒を鳴らし力づくで、と一歩踏み出そうとすれば、楓父の声に遮られる。

「楓ちゃんを泣かせたのは、誰だ」

いまだ止まらず、何故こぼれ続けるのか本人も分らずにいる涙に、今度はカラスとネキが、倒れ伏しているコマへと思わず視線を送れば、美しい顔に青筋が浮かんだ。

殺気というものが目に見えるならば、暴風のように辺り一帯が吹き飛ばされていたに違いない。あきらかに失敗したばかりに、ネキは肩をすくめる。

「カラス、即治せ」

「はあ？ 何でだ、敵は身内にあるかもしれないだろ」

「治せ。事と次第によっては私がコマを消す」

あまりの言葉にあぐりと口を開け、楓は文字通り開いた口がふさがらなかった。カラスでさえ口をへの字にして首をすくめたほどだ。

腹を抱えて吹き出したネキの声は、倉庫の天井に反射しておかしな響きが生まれる。

仕方なさそうにカラスがコマの後ろ足の付け根、そして首の裏に手を当てて深く息を吸い込めば、青白い光が冷たく辺りを照らし出す。

少し時間がかかるだろうと、楓父が彼らから離れ、意識を取り戻していないグレッグの傍に立つ。近くには闇の者達が使う『道』が、大きく口を開けていた。

その道に負けないほどの黒い瞳には、それが城へと繋がっているようには見えない為、右腕を肘まで通し、まっすぐ引き抜く。

ただそれだけの動作だったが、中からフードを目深にかぶった者が、その手を取り現れた。

反対の手で、ノドに刺さっている黒い羽を抜き取れば、長髪の男が目覚めます。

「グレッグ」

凜とした女の声が、厳しく彼を縛り付ける。

驚き身体を起こした彼の横に、汚れる事も構わず膝をついた彼女から、それでも目を逸らした。

細く滑らかな指が、彼の乱れた長髪を整えるように、優しく撫でる。

「愚かだったわね」

「……ああ」

「貴方の処遇は、私に一任されたわ」

「そうか………すまない」

苦しげに吐き出した言葉に、リディアは唯一見える口元をほころばせた。

もしグレッグが彼女を見ていたら、酷く動揺したのだろうが、残念ながら彼は気がつかない。

それすら見越していたかのように、表情を元に戻し、厳しい口調で告げる。

「私への傷を、治す事は許さない。そして、その手立てを考える事も」

はつと顔を彼女に向ければ、待っていたとばかりに頬を力一杯張り飛ばされる。

赤く腫れる事は決してないが、彼は瞳の色を沈ませた。

「己の力のみにて、責任を取りなさい。私を戒めとして……」

ためらい、思わず言い淀む。

広いとはいえ、さほど離れた場所にいるわけではない楓とネキは、完全なる野次馬として、彼女達の一挙一動に聞き入っていた。不謹慎にも胸を高鳴らせてお互いの手を取っている。

そうとも知らず、リディアは立ち上がり、彼を見下ろした。

「私の傍を、離れないで」

思ってもいなかった言葉に、様々な感情が表情に浮かび、彼は立ち上がった。

「しかし……お前は、ジョイス様を」
「だから。貴方は愚かだと言うの。処罰は他にもあるわ、ついてきなさい」

楓父へと優雅に一礼し、身を翻す彼女に、困惑を隠せないグレッグ。そんな彼に含み笑いをしつつ楓父が声をかける。

「グレッグ。今後、何があっても私は城へは戻らん。リディアとお前に全て託されるはずだ、心しろ」
「……はい」

複雑な面持ちで、眉間のシワが更に深く刻まれる。小さく頭を下げ、彼女の後を追う。

『道』という名の闇が二人を飲み込み、消えた。

「ネキさん、ネキさん！ 今のって告白？ 告白だよね？」

「違うじゃないよ！ くぁーっ！ いいねえ、あの上から目線。あたしもあんな風になってみたいねえ」

「ええ？ 上から目線がいいの？ そうじゃなくって、最後の言葉、いつか私も使ってみたいて思っただけど」

「そんなもん、来るなって言われてもつきまとしてやれば、その内根負けするのさ」

「えー！ なんか、そんな関係ヤダよ」

いつの間にか止まっていた涙にも気付かず、何故か関係のない所で、ガールズトークに花が咲いていたが、カラスを包む光が消えると同時に口をつぐんだ。さすがに不謹慎だったかと反省する。

獣から手を離し、空を仰ぐように見上げた彼の息は荒く、黒だつたはずの短髪は、それが嘘であったといわんばかりに青に染まっていた。

「カラス、先生？」

「……しばらく、呼ぶな」

恐る恐るかけた声に、彼は仮面に手を伸ばし、その苦しい表情を隠す。

「お前こそ、用事もないのに来るなよ」

こちらに向き直った楓父の、あまりにも心外なセリフに、自分が助太刀に入らなかつたら など様々な返しが脳裏に渦巻いてため息を吐くにとどまった。言い返すほどの気力が、残っていないかったのだ。

その時、倉庫の外から光が差し込む。不規則に揺れながら移動するそれは、人の声とともに数を増す。

大きな音を立てて飛び回る機械的な羽音は、屋根を挟んだ頭上から離れる事はない。

「誰か、いますか！」

聞いた事もない老齡の男の声が響き、ネキとカラスは瞬時に暗がりへと身を潜めた。楓父は足音も立てずに楓の傍に寄り、羽織っていた黒いマントで彼女を包み込む。

グレッグが意識を失った事で、倉庫にかけていた結界が解けてしまっていたところに、楓の爆発的な光がネキが壁に開けた穴や窓から溢れ出したのだ。それを見た誰かが通報したのだろう。

遠くから、けたたましい音を立て、続々と集まってくる気配に、楓父は少女の肩を抱き寄せ、呻きながら身体を起こしかけたコマを足で小突く。

「コマ。お前が楓ちゃんを連れ出した責任を取るのだ」

「パパ！ だって、これは私が……」

「大丈夫だ、楓……さま」

無言で振り上げられた拳に、コマは耳を下げ身をかがめて思い出したように付け加えた。

傷口は塞がったが、そこらじゅう引きつる感覚に、渋く顔を歪めながら四肢に力を込めて状態を確認する。動けそうだと、意識を切り替えるように頭を振った。

「状況は？」

「飛ぶハエどもを、引き付ければそれでいい」

「あ！ またそんな言い方して！」

「おっと、口を滑らせてしまった。では、空高くで鳴くヒバリとでもしておこうか」

「違うよ、人間！」

そうだね。と笑顔で頭をなで、細い首に巻かれているマフラーを外し、コマへと投げる。

「身につけるがいい。お前の意識は、そこにある」

「パパ？」

冷たい空気に首をさらされ、少しでも身をすくめれば、楓父はマントで隠すように彼女を抱き上げた。そのまま背を向け、扉へと歩いて行く。慌てて彼の後に続くネキを見届けて、視線を下げた。

「俺の……意識？」

小さく身震いをし、コマは固く目を閉じた。

暗がり、金色の瞳が怪しく光り、雷と見紛うような咆哮が轟き渡る。

その凶悪な、怒声とも似つかないそれに、壁を挟んで近くにいた人間は腰を抜かし、恐怖に苛まれた。

他の者として、例外ではなくその声に畏縮し、身動きが取れなくなるほどであった

ヘリコプターの飛ぶ音と波の音のみが、周囲を占める。

その中で、ピンクのマフラーを首に縛った、二本足で立つ歪な巨獣が屋根を突き破り躍り出れば、得体の知れないモノへの恐怖から、彼らの思考回路は混乱を重ねた為に、冷静さを失った。

平然と倉庫から出てくる者達に、疑念すら浮かばないほどに。

金魚のように口を開け閉めしている彼らに、追い討ちをかけるように。空を飛ぶ金属の塊へと届くように、コマは激しく怒りの声を上げ、悠然と歩く彼らとは反対の方向へと、月の光に映える銀色の肢体を輝かせ、人の目でも追える速度を保ちながら大きく跳躍した。

月明かりに、寄り添う牙

楓は、マントの陰でコマの咆哮を聞いていた。

楓父に護られているからか、それとも自らの持つ光のおかげなのか。尋常ではない畏怖に晒される事はない。

だが、派手な破壊音や唸り声が離れていく。

たった独りで、かなりの速力で楓から遠ざかっていってしまう。

行っちゃ、いやだ。

そんな言葉は、言えなかった。自分の為に引きつけてくれているのだ。それくらい楓にだって分かっている。

しかし、壊れた涙腺はすぐに彼女の頬を濡らした。皆で一緒に帰ると、言ったのに。

結局、誰かしらを犠牲にってしまう。

それが恐くて、苦しくて。楓はさすがに楓父のシャツをつかんだ。

静かに、それと分からぬよう周囲の記憶を操作していた楓父は、初めて頼られた驚きに、抱く腕の力を強くした。

「帰って、くるよね？ 皆、一緒じゃなきゃ、駄目なんだから」

「大丈夫だよ。あれは何があっても帰ってくる」

「何かないように、ここに来たのに……誰も、傷ついちゃ、駄目なの」

遙か遠く離れた所から二、三回ほど空気を切り裂くような乾いた破裂音に、茶色の瞳が見開かれる。小さな身体は、かわいそうなほど硬直し、ガタガタと震えだした。

蒼白となり、オレンジ色のコートの胸元を強く握りしめた。呼吸

するのも難しいほどの胸の痛みが、楓を襲う。

「楓ちゃん……楓！ 人間の武器では、我々は死ぬ事はない。大丈夫だよ」

諭す声とかぶさるように、聞こえてきた咆哮で、無事なのだと少しだけ気持ち が和らいだが、更に離れたとも感じた。

傍にいて欲しいというのは、冗談で言っただけではなかった。コマともう離れたくなかったのに。生きていて、と願わなくてはいけない状況が嫌だった。

「コマさん……」

痛切に呟いて、細い腕を逞しい背中 に回した。

強く抱きしめれば、コマが帰ってくるのだと言うように。

*

銀色の獣は、上空からのサーチライトに照らされ、その光の中に収まる程度の速度で、派手に地面や塀を壊し、怖ろしげに声を上げながら逃げていた。

どこまで距離を伸ばせばいいのかは分からないが、とにかく遠くに見える山をまっすぐ目指す。

コマは瓦屋根の上へと飛び上がった。その勢いに数枚の瓦が割れ、その下で悲鳴が聞こえた。被害が出ないように降り立ったつもりだったが、やはり難しいようだ。

この姿形のまま、長時間意識を保ってられる事は初めてだった。放って寄こしたマフラーのおかげなのか、とにかく囧は成功しているわけだ。

もう見えるはずのない方向を振り返り、風を読むように、黒い鼻

を高く上げる。

潮の香りが強いものの、彼女の香りすら感じられる事はない。

中途半端に伸びた口を、横に大きく持ち上げる。苦笑に見えるその顔には、少しの憂いを含んだ金色の瞳が揺らぐ。

家の中はともかくとして、外では彼女の居場所を探る事は出来なかった事を思い出したのだ。

徹底して隠された彼女には、コマの鼻すら効かない。

彼女の存在を感じたかった。このまま会えなくなるのではないかと焦燥感にかられる。

「……楓」

楓父が傍にいるのだ。心配する事など何もないのだろうが、落ちて着かない。

そして、そんな自分に酷く動揺していた。

激しいサイレンと、強い光に晒されて、コマは白い煙のような息を大きく吐き出す。赤い光が近づくのを確かめて、裏手の道へと跳んだ

瞬間、乾いた音が立て続けに鳴り響く。

こんな町中で、まさか発砲されるとは思っていなかった。

油断していたとはいえ自分の失態に、コマは思わず舌打ちをする。その凶弾に、右足の脛けんを打ち抜かれていたのだ。

体勢を崩したコマは、それでも家と塀の間に身を滑り込ませた。

恨み言を吐き出したくもなかったが、とにかくこの状況を打破するしかない。

真夜中であるというのに、塀の向こう側では、歓喜の声が沸きあがっていた。

鼻屑目に見ても人間と見る事は出来ない獣を、捕獲出来るのだ。数の多さを優位とする人間にとって、未確認物体とて怖くなるのだろう。

狼へと姿をやつし、三本足でそつと家の影に身を潜めれば、視線を感じた。

風下に、何かいる……！

いくら体調がすぐれないとしても、失態続き過ぎる。

至近距離に迫り来る黒い影に、身を低くして迎撃するべく、大きく堅固な牙を剥きだした。

しかし、それは彼を飛び越え、うかつにも塀へと身を乗り出してきた男に襲いかかる。

苦痛と恐怖に慌てふためく複数の悲鳴が、そこかしこで上がった。
いぶか訝しく思いながら、コマは息を殺し、塀越しに様子を窺う。

何者かが、反対側の家の屋根へと気を使っわけでもなく降り立った。

破壊音とともに、月の光にぼんやりと照らされたソレは、黒の混ざった灰色の毛皮に覆われ、二本足で立つ犬にも似た顔立ちの巨獣。赤い瞳が冷酷に光り、凶悪な怒りに満ちた声を、閑静な住宅街に響き渡らせた。

中心にいる警察官や、騒ぎに起きてしまった住民達は、その恐ろしい咆哮に身の毛立ち、その恐怖に支配される。

その歪な獣は嘲笑するように口を歪ませ、屋根を渡り跳びながら、山へと駆けた。

制服を着た男達は、身震いしながらも果敢にパトカーに飛び乗り、

へりの発するサーチライトを追って走り出した。

けたたましい音が遠ざかり、戻ってくる事がないと確信したコマは、騒ぎの間に完治した足で地をしっかりと踏みしめる。

「……どうして、タイが？」

彼には、気まぐれという言葉は当てはまらない。何事も計算ずくで動いていたはずだった。

年月が、そうさせたともいうのか。

どうしても信じられないその事実には、思わず呟いたコマだったが、誰が答えてくれるわけでもない。考えても分かる事ではない。

ただ、静かに走り出した。

早く、彼女の傍に戻る。

それだけを考え、闇夜を疾走するコマを、おぼろげな月明かりが優しく見守っていた

白々と、夜が明ける。

楓は、眠る事も出来ずにいた。虎の姿で、大きなコブを作って意識を失っているネキの、大きな胴体に毛布を巻きつけた身を預け、そつと撫で続けていた。

呼吸に合わせて波打つ温かな身体に、不安は最小限でとどまっている。

また、涙がこぼれ落ちた。

「おかしいな……こんな事、なかったのに」

泣くという言葉は、辞書でしか知らなかった。
何事も起こらず、全てにおいて平穏な生活は、楓の感情に何の起

伏ももたらさなかったのだ。

ネキを拾った時も、彼女は父親にしか興味を示さず、楓はただ眺めているだけだった。

「ネキさん……好き」

ピクリとも動かない巨虎に、そう呟いてみる。

心からの言葉だった。口にしてしまえば、少しだけ胸がむずがゆくなる。

涙を袖で拭って、楓は小さく笑った。

明るくなってきた窓辺を、泣き腫らした目でぼんやりと眺める。

「コマさん……大好き」

呟いた言葉は、誰にも届かない。

そう気が付いて、また涙が溢れ出す。

もう何度目になるのだろう、体中疲れきってしまっていた。それなのに、眠れないのだ。

冷たくなった指先を温めるようにネキの身体に押し付ける。

「大好き、なんだよ」

怖かった。何かと聞かれたとしても、漠然とした物でしかなかったが、その目は丸く巢作りされたバスローブを見つめている。

帰ってきて。という言葉は、嗚咽に阻まれた。

感情のコントロールが追いつかない。ぽっかりとあいた胸の隙間は、広がる一方だった。

玄関前の定位置に、彼がいないというだけで、酷く心細い。

「こわい……よお」

小さな子供が泣きじゃくるように、それでも楓は声を押し殺して泣いた。

楓父はネキのシツケを済ませ、すぐ戻ると言い、出て行った。

その間にコマを探しに出たかったが、行き違いになれば意味がない。それに、動きの悪い足では遠くまで探せない事も分かっている。

「役立たず　何で、こんな足に生まれちゃったの！」

右足に小さな拳を振り上げれば、黒い扉の外側を小さく引つかく音が聞こえてきた。

控えめに、それでもちゃんと聞こえるように。近くに誰かが起きていると、確信した仕草にも思えた。

ショートボブを揺らして、立ち上がる。声が、出せなかった。

言いたい事は、たくさんあるのに。

毛布を肩にかけたまま、ゆっくりと扉に近づく。心はすでに扉を開け放っているくらいの勢いを見せていたが、現実にはドアノブに手をかけて躊躇していた。

「……コマ、さん？」

声を震わせて、氷のような冷たさの扉に手の平を当てた。

楓の声に別段驚いた様子もなく、そうだと返してきたそっけない言葉。あまりにもいつも通りな言い方に、冷え切った頬をほころばせた。

こんなにも心配したのに。
そうだって……それだけ？

色々な想いが頭の中を駆け巡り、たどり着いた先は唯一だった。

帰って来てくれて、良かった。

扉をそつと開ければ、少し離れた所で背筋を伸ばし、行儀良く座っている。

誰にも侵されていないような冷たい空気は、濡れた頬を優しく撫で乾かしていく。

その静寂と優しさに誘われて一歩踏み出せば、彼も立ち上がった。

「おかえり！ コマさん」

「ああ、遅くなってすまない」

ため息を吐きながら、渋い声で言う彼に、楓は不思議そうな顔を見せた。その意味が分かったのだらうコマは、長い口を横に伸ばしながら苦笑する。

「獣の姿でも人に追われるし、まさか人間の姿でも出歩けないだらう？ 最近、人間はどんなに遅い時間でも起きてるんだな、面倒くさい」

思わず裸で走っている人型のコマを想像し、赤面する。

脳裏に浮かんでしまったその映像を消す為に、ショートボブが乱れるほど頭を振れば、まっすぐ見つめてくる金色の瞳とぶつかった。

「……どうした？」

「なんでもないからっ！」

入って、とうながして 隣を横切ろうとしたコマの首に抱きついた。

温かく、硬い毛並み。少し薄汚れているが、しっかり筋肉がついている首に顔をうずめて泣く。

不安、切なさ。そして安堵が一気に押し寄せてきていた。

毛並みが濡れる事も構わず、コマは静かに彼女の傍にいた。

「ってゆーか……悪かった」

久しぶりの感覚に、鼓動が早くなりながら、コマは口の中で呟くように声をかける。

早鐘のように打つ脈を聞きながら、楓は泣きながら笑った。

「……ってゆーか、悪かったよ」

顔を離して言い返した楓を振り返り、困った顔で、そうだなと言う獣を見て、もう一度小さく笑う。

少々、塩気のあるその二オイ。コマはそっと鼻先を寄せ、彼女の濡れたアゴを小さく舐めた。

飛び上がるようにコマから離れた楓の顔は、驚きに満ちている。

昔、自分を犬だと飼い、泣き虫だった子供をあやす時にしていただけの行動だった。だが人によって、それがどれだけ重要な行動だったのかを、今、思い知る。

コマは激しく動揺し、尾を股に挟んで耳をさげ、低姿勢に身構える。無意識に、謝罪の意を示していた。

「い、いや！　これはっ！」

「コマさんの　変態っ！」

「変態とはなんだ！　これは、そう、なぐさめようと思って……」

「うるさい、うるさいっ！　近所迷惑でしょっ！　早く家に入っ
てよー！」

首まで赤くなるのを感じながら、楓は恥ずかしさを隠すようにコマの背中を強く叩く。

言葉に迷って、変態と言ってしまった事は、言い過ぎだったろうか？ と少しだけチクリと胸を刺したが、口から飛び出しそうなほど跳ねている心臓を誤魔化す事で、精一杯だったのだ。

騒々しく黒い扉が閉められた。

また陽はのぼり、作られた平和は続くだろう

「……あー、ジョイス。あいつ、消していいよな？」

「許さん……」

青い髪を風になびかせながら、隣で浮いている黒ずくめの男へと思わず顔を向け、意外そうに目を見張った。

しかし、彼の放った言葉はカラスに向けられたものではなかった。剣呑に光る赤い瞳を確認し、複雑な気持ちでカラスは呟いた。

「あー……俺の分まで、頼むわ」

そのままこの場にいたら、確実に八つ当たりされそうだと踏み、朝陽に輝く黒く美しい羽を大きく伸ばした。

コマに対して、同情する余地は微塵もないが、疲弊している今、騒動に巻き込まれる事だけは避けたい。

つむじ風を起こして、彼は出来る限り離れる事しか出来なかった。静かに、しかし迅速に淡い光に照らされた邸宅へと降り立つ彼を尻目に、カラスは小さく首をすくめた。

見ざる、言わざる、聞かざる。と、人間の言葉を思い浮かべ、ため息をついた。

常時、平和が保たれるという事は、なかなかにして難しいも

のなのかもしれない。

月明かりに、寄り添う牙（後書き）

月明かりに、寄り添う牙。これにて終幕となります。

長い間、お付き合いくださいまして、
本当にありがとうございました！

もっともっと精進していきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4302e/>

月明かりに、寄り添う牙

2010年10月9日02時00分発行